

元便利屋は旅をする

鹿蹄草

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

*この作品を始めから書き直すことにしました。削除はしませんが、これ以上更新することはありません。

書き直した作品です。 ← <https://syosetu.org/novel/295121/>

処女作です。

異世界転生した後のチート主人公が呪術廻戦と名探偵コナンがクロスオーバーした世界で好き勝手する話です。ネタバレ・原作改変が苦手な方は自己防衛をお願いいたします。

不定期更新です。もしかしたら続きは書かないかもしれませんが。

作者はコナンについてあまり詳しくありません。違うところがあつたら申し訳ございません。

あまり、救済という言葉を使いたくありませんが、とりあえず原作キャラクターの死亡は阻止する予定です。

目次

の酒場およびアリスの能力説明)

57

1 橘 小夜 ミヤ・クロム (主人公の

能力説明) | 2

2 元便利屋は探偵+呪術世界で (白

雨の能力説明) | 15

3 外の世界 (旧時子の能力説明)

20

4 楽しい時間はすぐ過ぎる (影月の

能力説明) | 30

5 新しい家族 | 41

6 食事 | 46

7 お風呂 | 51

8 一人遊び (稲葉の能力説明 亡霊

9 古賀 飛優 | 64

10 能力 | 70

11 1994年8月 | 75

12 古賀良平視点 飛優ちゃん

81

13 お盆 | 85

14 墓参り | 89

15 1994年10月 | 96

16 術式の偽装 会合の準備 | 100

17 会合 | 104

18 会合2 | 110

163	式神の改良 (新時子の能力説明)	265	た。	265
26	1998年6月 父親について	256	この小説を新しく書き直すことにしまし	256
25	修行?と老人の回想	246	……魔王?	246
24	入学式とその後	236	明)	236
143	ランドセル (白梅の説明)	225	31 あおぞらこども院2 (銀桜の説	225
23	明)	208	30 あおぞらこども院	208
22	1997年10月 (黒の書の説	189	29 強制参加 嘘の後始末	208
128	緊急会議	176	28 1998年7月14日 火曜日	176
20	1994年12月	176	風見家	176
19	会合3	27	27 1998年7月13日 月曜日	27

1 橘 小夜 ミヤ・クロム (主人公の能力説明)

勇者が死んだ。

もう五百年も前の話だ。共に魔王を討伐した勇者の仲間たちは皆、既に墓の下で眠っている。——ただ一人、ミヤ・クロムを除いて。

(これは、罰なのだろうか。)

勇者の仲間でありながら、ミヤは魔王の死を悲しんだ。……魔王とは知らなかったとはいえ、ミヤが彼と友人であった事実を仲間が知れば、きつと彼らは失望することだろう。戦友に対する裏切りは、どのような罰を与えても足りないくらいに重い。

「ケホッ」

ベット以外はほとんど何も無い白い壁の小さな部屋に、乾いた咳の音が響いた。

(老いたな……。)

外見は、若い頃と何も変わらない。鏡の中には、若い——幼いといつてもいいくらいの童顔が映っている。しかし、体の中がここ最近すっかり弱っているのがミヤにはよくわかった。

「死ぬのか。」

ようやく、死ねるのか。

「ゲホ、コホ、コフツ」

口元を押しえたミヤの手の平に血が付いていた。

(まあ、べつに、死にたいわけではないさ。)

死にたくなかっただろうに、心残りは腐るほどあっただろうに、目の前で呆気なく死んでしまった人をミヤは何人も覚えている。彼らを知っているから、ミヤは自発的に死ぬ気にはなれない。生きていられるまで生きていくつもりだ。

自殺はしたくないが、生きることとも面倒くさい。ミヤはそんな気持ちだった。

魔王親友のいない世界は、ミヤにはとても味気なく、色褪せて見えた。

(疲れたな。)

ミヤはベットに体を横たえて、ゆっくりと静かに目を閉じた。

*

ガタン、と大きな音をたてながら、小さな部屋の扉が開いた。

「こんなところにいた！ 聖人様！ ねえねえ、勇者のお話をしてよ！」

大体三時間くらい眠っていたのだろうか、とミヤは寝起きであまりはつきりとももの考えられない頭を使ってぼんやり考えた。薄暗かった窓の外はすっかり明るくなっていった。

「聖人様など、恐れ多いですよ。クロムとおよびください、王子。」

「そうミヤが言うのと、この国の王子——勇者の子孫は頬を膨らませた。」

「でも、クロム様は聖人様でしょうか？大昔にこの国を襲っていた悪い魔王をやつつけた英雄たちの一人で、唯一現在まで生き残っている、『聖人』ミヤ・クロムでしょうか？神に愛されている証に、魔王を倒した後から全く老いていない。ね、そうでしょ？」

王子はキラキラとした目でミヤを見た。この王子は本が好きで、勇者が登場する絵本をいつも手に持っている。王子はミヤが話す勇者の冒険もお気に入り、城下町にあるミヤの屋敷までわざわざ護衛を引き連れて毎日のように歩いて来ていた。

「……あまり、魔王のことを悪くおっしゃらないでくださいな。彼にも、なにか辛いことがあつたのでしょうか。」

ミヤは魔王のことをよく知らない。彼とミヤは、酒場で偶然出会った。いつも適当にくだらない話をして笑い合うような緩い関係だった。

魔王を討伐し終えたあと、ミヤは彼について調べてみたが、手に入った情報のほとんどは眉唾物で、結局何も分からなかった。

「でも、人をいっばい殺したんだろ、魔王は？」

「そうですね。」

「やっぱり、悪い奴だ。」

ミヤは哀しそうに微笑んだ。

どのような理由があったとしても、魔王がしたことは変わらない。彼が殺した人の数も、彼が枯らした畑の数も、彼を憎んだ人の数も変わらない。それがわかっているても、ミヤはどうしても彼を憎むことができなかった。

「……そうですね。……ああ、でも、聖人などではありませんよ、私は。そのような、優しい人間ではありません。」

「えー、嘘だあ。お父様もお母様もみんな、『悪い魔王を倒した聖人様は神に愛されている。だから、若いままなのだ。』って言ってるよ！それに、絵本にもそう書いてあるもん！」

ミヤは王子の頭を優しく撫でながら、いたずらっ子のような笑みを小さく浮かべた。

「あら、もしかしたら、皆さんが嘘を吐いているだけかもしれないよ？」

「えっ、う、そ、そんなことないもん！お父様もお母様も嘘つきじゃないもん！」

「そうですね。でも、お父様とお母様が、悪い奴に騙されていたら？」

「う、う、クロムのいじわる！」

ミヤはクスクスと楽しそうに、上品に笑った。

「ケホッ、クツ……。」

笑い始めてすぐに、ミヤが口元を押さえて咳き込んだ。

「クロム!?？」

王子の焦った顔が見えた。ミヤの心臓に激痛が走った。

(……目が霞んできた。もう駄目かもしれないな。)

「ね、王子、私……。」

「大丈夫なの、クロム様!?？医者を呼んでこようか?」

王子が必死にミヤに呼びかけた。

「もう良いのです。私は、充分、長すぎるくらい生きましたよ。」

ミヤは王子の手を優しく取った。

「ね、王子、最後のお願いです。私のことを、便利屋と呼んでくださいな。」

「え、……うん、便利屋様……?クロム!?？クロム様!寝ちゃダメだよ!起きて!死ん

じやダメよ!」

——おい、便利屋、なにをぼんやりしている?

——少し寝ていました。何か御用ですか?

——こちらに來い。珍しいものを見せてやろう。

ミヤの脳裏に、魔王との会話が浮かんた。魔王の声がはつきり聞こえるようになる
と、代わりに王子の声は全く聞こえなくなっていた。

(今、行きますよ。)

ミヤ・クロムは目を閉じた。

*

最後の英雄は静かに息を引き取った。

王国は国を挙げて盛大に葬儀を執り行った。

王子は泣き腫らして真っ赤になった目のまま葬儀に参加していた。全ての国民に惜しまれた聖人は、かつての仲間たちと同じ場所に埋葬された。

*

ミヤ・クロムはかつて便利屋として勇者一行の雑務全般をこなしていた。

自分の事を説明しろと言われて最も先に出てくる言葉はやはり〈便利屋〉だろうとミヤ——小夜は思う。

橘 小夜という平凡な女がミヤ・クロムに転生した原因はいわゆるトラ転だった。目の前で子供がひかれそうになっていたから咄嗟にかばい、そのあと白い部屋の中で神を名乗る人物と対話し、対価と引き換えに能力を得た。チープなネット小説ではよく見る展開だ。

(そういえば、『勇者の仲間として手助けをする代わりに能力を与える』というのが契約の内容だった気がするな。)

小夜はふと、自称神ならば魔王のことを知っているのではないかと思った。

(まあ、なんとなく、あいつの性格的に、教えてくれそうにはないが。)

そう考えた小夜が小さく溜息を吐いた。小夜は今、ミヤ・クロムとして産まれる直前まで過ごしていた白い部屋の中にいた。

「酷いじゃないか、そんなこと言って！僕のこと、一体なんだと思ってるわけ？」

「自称神ですね。」

「ちゃんと、他称神だよ！自他ともに認める真正銘神様だよ!!？」

小夜は唐突に現れた自称神の目を見た。

「まあ、八百万の神とも言いますし、どのような神様がいらっしやっただとしても不思議ではありませんね。」

「そうそう！僕、神様！」

「それでは、神様、お願いです。どうか、私に魔王について教えてくださいませんか？」

「やだ」

語尾にハートマークがつきそうな言い方だった。

「はあ……。」

「魔王にも、君に話すなど言われているからね。僕、約束は守るから。なんせ、神様だし！」

神は飄々とそう言った。

「彼が……ま、仕方がありませんね。」

「そ、仕方ないの。……でもさあ、驚いたよねえ。魔王と呼ばれていたとはいえ、ただの精霊の執着がここまで一つの魂を固定するなんてさ。」

小夜は神の言葉に目を見開いた。

「……固定、ですか？……魔王が、私を？」

「うん。……お陰で、僕が与えた能力がすっかり定着しちゃってさ、大変だよ。」

「ああ、たしか、亡くなったらお返しする契約でしたね。」

「そうなんだけどね。……五百年も君の魂に付けていた上に、魔王の魂が無理矢理君にしがみついている状態だからねえ。色々混ぜて、外そうとしたら全部壊れそうでさあ。」

「……えー。……ん、え？彼が、私の魂に？」

「うん。それが彼の希望だったし。……君の魂の色って、内側が深緑で外側が金色でしょ？だからちようど、金色の球に定家葛が根を張って絡み付いているように見えるよ。」

「へえ、そうなのですね。」

「あれ、あんまり興味ない？」

「……彼が私に知られたくないことなのでしょう？それなら、聞きませんよ。……まあ、

もう一度話したいと思ったことはありませんけれど。」

小夜がそう言うのと、神はニヤニヤと笑った。

「ふうーん、へえー！そう、良かったねえ、魔王。」

神は小夜の胸元を覗き込みながらそう言った。神曰く、大体の人間はそこに魂が入っているらしい。

「あ、そうそう、さつきも言ったと思うけど、君の魂は『橘 小夜』と『ミヤ・クロム』の状態で魔王が固定しちゃったんだよね。だから、君はこの二つの生の記憶を持ったまま転生することになるよ。『橘 小夜』と『ミヤ・クロム』以降の記憶は通常通り浄化されて消えると思うけどね。」

「……つまり？」

「君の魂は、今の状態から成長も衰退も一切しなくなったということさ。……まあ、あくまでも魂の話だけだね。肉体自体は次の輪廻で赤ん坊として産まれてくるわけだから普通に成長も老化もするよ。……次からは、若いまま五百年も生き続けるなんてことはならないはずだよ。安心した？」

神がそう言った。小夜はしばらく黙った。

「ええ、まあ。」

「それじゃ、さつきと転生して来なよ。ここで僕とした会話までなら覚えていられるは

「ずだから。」

「あ、能力はお返ししなくても良いのでしょうか？」

「言ったでしょ、取り外せないって。いいよ、面白いものを見せてくれた対価ってことで、君にあげる。」

「……そうですか？……それでは、さようなら。ありがとうございました、神様。」

「うん。バイバイ。」

小夜が手を振りながら、ゆっくりと部屋の中から消えていった。

小夜がいなくなった部屋で、神は心底愉快そうに笑った。

「ほんと、ただの世界の要素の一つでしかないはずの精霊が感情を持つようになるなんてさ、驚いたよね。おまけに、一人の人間の魂と一体化しちゃうなんて、珍しいにもほどがあるよ。」

神は笑いがおさまると、白い部屋の中からフツと消えた。

主人公

真名 小夜

名前 〈便利屋〉 橘 小夜(たちばな さよ)

ミヤ・クロム

容姿 小夜 : 黒髪 黒色の瞳の垂れ目 白い肌

ミヤ : 黒髪 金色の瞳の垂れ目 白い肌

魔力量 : ほぼ無限

能力

・界渡りかいわたり : 異世界間を自由に行き来することが出来る。同じ世界内を移動することも可能。(移動するときは黒い穴を空間に開く。穴を潜ると移動することが出来るが、穴を跨いだ状態で穴を閉じるとその部分は綺麗に切断されてしまうので注意が必要。穴を開けるといに行き先を意識するとそこに繋がる。)

・式神生成しきがみ・使役しえき : 式神を作りその式神を使役することが出来る。式神自体に自由意志は無い。一般人は基本的に式神を見ることはできず、写真や映像に写ることもないが、式神が意識して姿を見せることは可能。写真や映像に写ることも可能。

・神器生成じんぎせい : 神器を作ることが出来る。神器は基本的に壊れることはないが、神器の性質として壊れるようにしておけば壊れる。

・翼つばさ・浮遊ふゆう : 天使の翼のような白い翼を生やすことが出来る。それを使って自由に飛行することが可能。翼を出していなくても空中に浮遊する程度は可能。翼は基本的に肩甲骨の辺りの皮膚から生える。服だけを通り抜けるなど、特定の対象のみを通すことが可能。逆に、特定の対象を弾くようにすることで盾として使用することもできる。

痛覚はない。魔力で構成されているため、実体は無いように思われるが、抜けた羽根はその場に残る。羽根からは鱗粉のような金色の粉が出ているようにみえる。この翼は一般人にも見え、写真などにも写る。

・治癒ちゆ : 自分を含む生物の治療が出来る。

・聖薬せいやく : 様々な効果のある薬を作ることが出来る。

・聖歌せいが : 歌を歌うことや、奏でることで様々な効果を及ぼすことが出来る。自由に

声を変えることが出来る。楽器の使い方が分かる。

・結界けっかい : 基本、盾として使用。様々な効果を付与することも可能。

・収納しゅうのう : 異空間に収納することが出来る。

・過去視かこし : 直接目で見ることで物・生物の過去に関する情報を見ることが出来る。

(任意で発動する。) 発動時から1時間瞳が緑色に変色する。その間は幽霊などが見えるようになり、瞼を閉じた状態でも普通に見えるようになる。(幽霊などは過去の人物の情報や思想が何かに焼き付いた物と言う認識なので見ることはできるが、一方的に話を聞くことしか出来ない。)(瞳の色が変色するのは小夜の魂の色のようなものが表面に出るから。小夜の魂の色は外側が金色で内側は深緑色のため、変色する場合は一瞬金色になつてから緑色になる。色が元に戻るときは、アースアイのような模様になりながら徐々に金色になり、完全に金色になつてから元の色になる。)

2 元便利屋は探偵＋呪術世界で（白雨の能力説明）

激痛が小夜の身体を襲った。

小夜はたまらず産声をあげた。よく見えない視界が小夜の思考を加速させる。医者や助産師、両親と思われる者達の声が聞こえた。小夜は疲れて眠ってしまった。

*

体感で三日経っただろうか。小夜は周りに不自然に思われない程度に赤ちゃんを演じていた。ちなみに家族構成は父・母・小夜だが、小夜には戸籍と名前がない。自分の実家に売ると父親が言っているのを聞いた。

なんでも“術式”を持っている人間がここ60年間一人も生まれず、呪力を持っている者もほんの僅かしか生まれていないらしい。そのため、もし術式を持っていた場合は高値で売れるそうだ。父は術式も呪力も持つておらず、家からは殆ど勘当扱いらしい。

（呪術廻戦かなあ……。）

周囲の人に見えていないと思われる化け物が頻繁に飛び交っているのが見えた。

（父親の実家に売られるにしても、このままこの家に居るにしても、術式がないと酷い扱いをうけそうだ。この際、私自身の能力をそのまま術式にしておくか……。いちいち考

えるのが面倒だしな。)

今考えた通りの術式を身体に書き込む効果のある薬を作った後飲み込んだ。

(今は、1992年の2月……と言うことは誰と同学年だろうか?)

病院のカレンダーを眺めて考える。

(さて、どうしたものかな……。)

まあ勿論、知っているのに見殺しにするわけにもいかない。そんなことをしたら絶対に安眠することができなくなる。

(禪院 甚爾がどこに居るのか、だな)

体感で約500年前に読んだ本の内容など、重要人物の名前くらいは覚えていたとしても、忘れていくことの方が多いだらう。

(原作を買ってこよう。)

よい子はまねしないでね

1 : 呪術廻戦が漫画として売られている世界へ渡ります。

2 : 実在する人物の身分証明書や神器として作り、偽装します。

3 : 偽装した人物にそっくりな、人間が見ることの出来る式神を作ります。

4 : 適当なアクセサリや宝石類を神器として作り、適当な店で売ります。

5：得たお金で呪術廻戦を買いましょう。

（ま、たぶん私以外には無理だがな。）

小夜は収納用の異空間で、式神の身体を使い本をめくった。しばらくは原作を読む時間が要るし、本体である赤ん坊の護衛用に式神を何体か作っておこうと小夜は思った。

（このくらいでいいか。）

式神

名前 白雨（しらさめ）

容姿 白い鱗に所々金色の鱗が生えている大きめの鯉 ↓ 白い鱗に所々金色の鱗が生えている龍

（普段は鯉の姿だが、龍の姿にもなれる。）

呪力量 ：多い。小夜から供給する事も可能。

能力

・ 結界 ：小夜の能力と同じ

・ 治癒 ：小夜の能力と同じ

・ 聖薬 ：小夜の能力と同じ

・浮遊ふゆう : 空中を、泳ぐように移動する。

・水の術みずのじゆつ : 水を生成する。水を操作する。

・雷の術いかづちのじゆつ : 雷を生成する。雷を操作する。

・炎の術ほのおのじゆつ : 炎を生成する。炎を操作する。

・聖域せいいき : 任意で発動する。白雨を中心として半径10m以内の呪霊を直径2cm程

の白い玉にする。(使役されている呪霊は白い玉にならない。) ↓食べて、胃袋(亜空間)の中に白い玉の状態 で保管する。

・胃袋いぶくろ : 口の奥が亜空間になっており、さまざまなもの を収納することができる。

・隠密おんみつ : 任意に姿を消すことが出来る。姿を現すときと消すときに金色の水の波紋

の様な歪みが出る。(小夜には無効。)

・龍鱗りゆうりん : 攻撃を全て無効化する。術式効果も全て打ち消す。

説明 護衛対象を追尾する。任意に姿を現す事が出来、姿を消している間は小夜以外には見えない。鱗の形を変形させてから切り離して、武器として使用することも可能。小夜の命令を守る。小夜の身体をある程度動かすことも可能。

(これを何体か作って、姿を消させておけば目立たないだろうし、売られる時に姿を見せれば術式だと分かるだろう。)

小夜自体の魔力量がほぼ無限だった事もあって、今まで考えていなかったが呪力量はどうしようか？

（呪力を使い切る度に、ゲームのレベルアップ時のように呪力量の最大値が倍になって全回復という風にすれば大体足りるようになるかな。早速薬を飲んで……つと。）

いざという時に呪力が足りずに死ぬなんて真つ平御免だと小夜は思う。多すぎて困るなんて事は早々あるまい。

（大は小を兼ねるとも言うしね。赤ん坊の行動は大体本能的な物だろうし、不自然な時は白雨が身体を動かして誤魔化すように命令しておいたから大丈夫だろう。）

ちなみに、白雨の姿が鯉と龍なのは小夜の好みだ。小夜は昔から実在空想問わず水に関係する生物を大層好んでいた。そのため、ミヤ・クロムとして生きていたときも白雨のような龍の姿をした式神を多く使役していた。

3 外の世界（旧時子の能力説明）

式神の肉体を使って原作を読み始めてから3ヶ月が経った。

原作も読み終わったため、私は式神の肉体から本体へ戻った。そこで私は、どうやら自分が薄暗い部屋の中にいるらしいことに気が付いた。

（両親はどこだ……？）

白雨が泳いでいるのが見える。今見えているのは5匹……おいておいた数と同じだ。1匹の白雨が私の周りを結界で覆っているのが分かる。気温を整えているらしい。部屋には暖房もついていないようだ。

（虐待か……？食事は摂れているのか？）

白雨の過去の情報を見た。……どうやら貰っていないらしい。死にそうになる度に白雨が治療をかけていたようだ。食事や排泄等の世話も白雨がしていたらしい。

（護衛をおいていて良かったな……。気付かない内に死んでいたかもしれない……。もつとも、そんなことをさせるために作った訳ではないが。）

白雨の過去の情報を見て分かったことを整理する。まず、小夜の両親は夫婦関係では無かったらしい。小夜を作って本家に売り、得たお金を分けると言うビジネスライクな

関係だったようだ。交渉は決裂し、父親と母親は殺し合った。そして、父親が母親の死体を持って部屋から出て行ったらしい。そのまま3ヶ月ずっと帰ってこないままのようだ。父親は掃除をしていかなかったため、血痕が乾いて床に消えない染みを作っていた。部屋の空気がどこか生臭い気がして小夜は少し憂鬱な気分になった。

(……肝心の商品を放置してどうするのだろうか？ 白雨が居なかったら死んでいたぞ？)

小夜は心の中で悪態を吐いた。

*

父親が帰ってこないまま2年が経った。

ちなみに今は1994年の5月である。小夜は伊地知潔高と同学年だ。

(私を売ると言う話はどうなったのだろうか？)

小夜はそんなことを考えながら身体を起こして白雨が出した水を使って顔を洗った。

(家の電気も水道も止まっているし、こりやあ本格的に捨てられたのかね？)

小夜は寝間着を脱いでから白いレースの袖なしのワンピースを着て、紺色のキュロットパンツを穿いた。ワンピースの裾にはデフォルメされた魚の模様が青と紺で描かれている。

身支度が調ったので、術式で作った掃除用具を使って部屋の掃除をした。術式で作っ

た薬で食事を済ませ、齒磨きをする。

(生活物資を全て術式に頼っている状態だが、まあ、取りあえずのところは凌げているからよしとするか。)

家からは一歩も出ていないが情報収集専用の式神に集めさせているので大体の情報は入ってくる。

ついでに特級呪霊と特殊な能力を持っている呪霊は、見つけ次第すぐに白雨で捕獲するように命令していたのだが……。

(まさか花御、漏瑚、陀良がすぐに手に入るとは思わなかったなあ……。)

「期待していなかったのか？」と聞かれて、「期待していなかった。」と答えれば嘘になる。あわよくば入手出来れば良いとは思っていた。しかし、難易度が尋常では無いことも勿論分かっていったのだ。

(それがこんなにあっさりと手に入るとはね……。)

小夜は物凄く気が抜けた気分になった。

(入手出来て嬉しいのには変わりないし、気にしないでおこう。それに、彼らがいらないと言うことは渋谷事変の状況も少しは良くなるかもしれないしな。)

何にせよ悪いことでは無いのだ。

(それよりもいい加減外に出たいな……。)

小夜はどちらかと言うとインドア派なのだが、流石に二年も外出をしていないとなると健康面が気になるし、罪悪感を感じる。

(外行くかあ……。)

二歳児が一人で居るのは目立つし、人の目に映る人型の式神を作って保護者の振りを見せておこうと思ひ、小夜は式神を作り出した。容姿は母親に似せておけば大体誤魔化せるだろう。何か言われたときは最悪式神だけを逃がせば問題ない。二歳児に細かい説明をさせるような事は無いだろうから小夜が捕まったとしても困ることはないのだ。戸籍が無かったとしても何も知らない振りをしておけば問題ない。小夜が児童福祉施設に引き取られるだけだ。

*

近場の公園に着いた。

小夜の家はアパートの近くにある。だから、少し歩けばアパートに住む子供達がよく遊びに来る公園があった。

(……会話が出来ない且不自然だな。小細工をしておこう。)

式神

名前 野上 時子(のがみ ときこ)

容姿 濃い茶の短髪 焦げ茶色の瞳

呪力量 : 多め。小夜から供給する事も可能。

能力

・催眠術さいみんじゆつ : 周囲の人間を催眠状態にする。発動は任意。

・幻術げんじゆつ : 触ることの出来ない映像のような物をつくる。映像は写真等にも写る。

・読心術どくしんじゆつ : 周囲の人間の心の中を読む。

「催眠術で常に周囲の人間に“普通”だと思わせた上で、話しかけられたときに読心術で周囲の人間の心を読んで相手が予測している受け答えをしなさい。」

「分かりました。」

「それと、私の名前はミヤということにしておいておくれ。」

小夜と言う名前を使わないのは真名を知られたくなかったからだ。小夜が便利屋として仕事をしていて世界では真名を教えるのは強い信頼関係がある場合のみで、普段は別の名前を使っていた。ちなみに普段使う名前が偽名という訳ではなく、単にそういう文化というだけである。すっかりその文化に慣れてしまった小夜は、嫌悪感がある訳では無いが真名を極力知られたくないと感じていた。

(さて、外に出たは良いがこれから何をしようか?)

時子に抱えられた状態で小夜は思案した。取りあえず一人で子供達の所に行ってみよう。

「たっちゃんボールそっちにいったよ。」

「まっつて。とつてくるから。」

「みかちゃん、おままごとしよう?」

「いーよ」

「ゆいもいれて!」

「うん」

「わかった」

(この中に入る勇気が欲しい……。)

公園には何人かの子供がいたが、既に知っている子同士で仲良く遊んでいた。小夜は結局話しかけることが出来ずに一人で立ち尽くしていた。このまま日が暮れる迄立っているだけだったとしても一応外に出たことに変わりない。

(適当に走り回ってから帰ろうかな。)

「ねえ!」

女の子が誰かに向かって話しかけた。

「ねえつてば!」

「え……あ、私？」

女の子は小夜に向かって話しかけていたようだ。

「そうだよ！」

「何ですか？」

「一緒に遊びたいの？」

「あ、えと……うん。」

「こっちおいで！」

小夜と比べると女の子は随分身体が大きく見えた。二つほど年上だろうか？柔らかなような髪は肩にかかる程度の長さで、苺の飾りの付いたヘアピンをこめかみの辺りに付けていた。女の子は小夜の手を引いて、さっきまで一緒に遊んでいた子達の方へ向かった。

「ねえ！このこもいつしよにあそんでいい？」

「いいよ」

「あ、ありがとう！」

「なにをするの？」

少し長めの髪の女の子が苺の飾りの女の子に尋ねた。それに向かって短髪の男の子が元氣よく応える。

「ゆうくんはね、おにごっこがいい！」

「おにごっこはさつきやったでしょ。」

しかし、長めの髪の子にバツサリと却下されてしまった。

「みいね、おままごとする！」

「さーちゃんもそれがいい。」

母の飾りの子が「みいちゃん」少し長めの髪の子が「さーちゃん」男の子が「ゆうくん」と呼ばれているらしい。

「ええー」

「なに？」

「……うん、わかった。」

ゆうくんのささやかな抵抗は黙殺された。

「みいがおかーさんね！」

「それじゃあゆうくんはおとうさんでいい？」

「うん。」

「いい？」もなにも男の子はゆうくんしか居ないのだから必然的にゆうくんがお父さん役になるしか無い。

（ゆうくん可哀想だな……。）

「ねえ、おなまえなあに？」

みいちゃんが小夜に向かって話しかけてきた。

「あ、えと……ミヤと申します。」

「もうし……？」

「えつとね、私の名前はミヤだよ。」

「みやちゃんね！」

「はい。」

小夜は心の中では男のような口調で話すのだが、口に出すときには敬語か敬語では無くても常に柔らかい口調になる。癖のようなものだ。

「みやちゃんはなんのやくがいい？」

「猫さんが良いなあ。」

「ねこさんね！」

「みやちゃんがねこさんだから、さーちゃんはみやちゃんのおねえさんネコね！」

「えー、さーちゃんふつうのにんげんがいいなあ。」

「じゃあ、さーちゃんはおとーさんとおかーさんのこどもよ。」

「おんなのこはむすめっていうんだよ！」

「へえ、さーちゃんものしりねえ。」

この子達の中ではさーちゃんが一番語彙が有りそうだと小夜は思った。役が決まったのでおままごとが始まった。小夜はみいちちゃんの決めたお家の中に座った。

4 楽しい時間はすぐ過ぎる (影月の能力説明)

「みいちゃん！もう帰るよ！」

「えー、みいちゃんまだあそぶ！」

「だあめ！お空がもう真つ赤よ！」

「うー」

みいちゃんは抗議するように唸った。

みいちゃんが帰ればこの公園には小夜以外に誰も居なくなる。

「すみません、騒いで。……ほら！帰るよ！みいちゃん！」

「はあい……」

「みやちゃんとはまた明日遊べばいいでしょう？」

「うん……」

「それじゃあ、みやちゃんにさようならして。」

「うん、みやちゃんさよなら。またあしたあそぼ！」

「ごめんなさいね、美咲ったらみやちゃんと一緒に遊ぶのがよっぽど楽しかったようで

……」

「いえいえ、うちのミヤも喜んでいましたし、どうも有難う御座いました。また遊んでくださいね。」

「はい、それじゃあさようなら。」

「さようなら。」

公園には鳥が3、4羽程居た。空は血が滲んだように赤く染まり始めている。公園はさつきまでの騒がしさなど無かったかのように異様な雰囲気になっていた。誰も乗っていないブランコが風に押されてキイと軋んだ音を立てる。

小夜は時子の服の裾を緩く握って家に向かって歩き始めた。

*

家に着いた。

小夜は身体を洗って食事を薬で済ませた。その後、小夜は時子を異空間に収納すると、布団を出してそれに包まった。

「……おやすみなさい。」

誰も居ない部屋に声が響く。小夜はしばらくそのまま目を開けていたが、段々と瞼が閉じて眠ってしまった。

*

何か物が崩れる音がした。

小夜ははっと目を覚ますと、辺りを伺った。

(何だ？何が落ちたのだ？)

足音が段々と小夜の居る部屋へと近づいてくる。

(父親か？)

男達の話す声が聞こえる。小夜は耳を澄ませて会話の内容を聞いた。

「本当に居るのか？」

「2年前に此処に置いてったまんまだぜ？誰かに世話でもされてんじやねーか？床に埃が積もってる様子もねーしよ。」

「子供が居なければ金の話は無しだぞ。」

「チツ、うるせえよ糞親父。アレが生きてつか死んでつか知らねーけどこの家からはでてねーだろ多分。」

「何処にそんな保証がある？……まあ良い、探せ。」

「へいへい」

「全くお前は……」

会話の内容からすると小夜の父親と祖父らしい。父親は粗野な雰囲気の中で、祖父は気難しそうな人だった。小夜は扉の隙間からそつと男達を覗いた後、扉を閉じて息を吐いた。

（どうしようかな……）

小夜の脳裏に、床に血痕の染みがある伽藍堂の部屋が浮かんだ。小夜はしばらく考えると扉を開けて父親の前へ出た。

（ごめんなさい、みいちゃん。約束を守れなくて。）

父親が喜色満面の笑みを浮かべるのが見えた。

「ほら、居たぜ！こいつだ！」

「ふん、まだ術式が有るかどうか分からんだろう」

白雨の姿を現す。相手からは金色の水の波紋の様な歪みの中から銀色の龍が出て来たように見えたはずだ。

「ほう！術式持ちか！」

「あ？どう言う事だよ？」

「約束の金だ」

祖父はアタッシユケースを父親に投げた。

父親はそれを抱えると祖父に向かって叫んだ。

「おい！いくらだ!？」

「五千万それに入れてある。」

「はあ!?!少ねえぞ！」

「……一億。手切金も含んである。二度とウチの敷居を跨ぐな。」

「ああ、いいぜ。口座に振り込んどけよ。」

「分かったならもう帰れ。」

「ああ。」

父親はアタツシケースを持って家を出た。祖父は父親が出て行つてからも扉を覗んでいた。

暫くすると祖父は思い出した様に小夜の方を向いた。さつき父親と話していたときの表情とは全く違う顔をした祖父は小夜の顔を覗き込んだ。

「年は幾つだ？」

「……1992年の2月に産まりました。」

「何日だ？」

「知りません。」

「そうか。」

それだけ聞くと祖父は小夜を抱え上げた。そして、家の扉を開けて外に向かつて歩きながら祖父は小夜に話し掛けた。小夜は白雨の姿を消して祖父を見上げた。

「今日からお前は私の子だ。名は飛優ひゆう。飛ぶ鳥の様に気高く、優秀な子となりなさい。」

「はい、お祖父様。」

「賢い子だな。」

祖父は黒い車の前に立った。

車の窓が機械音を立てながら開く。運転手が祖父に尋ねた。

「その子は……」

「アレの娘だ。」

「ツ……あゆ子様によく似ていらっしやいますね。」

「ああ、そうだな。」

会話が終わると車内は重苦しい沈黙に包まれた。飛優は祖父に向かって尋ねた。

「あゆ子様とはどなたですか？」

「……お前のお婆様だ。」

「そうですか。」

車内はまた沈黙に包まれる。

（会話が続かないなあ……。）

小夜——飛優は気づかれないように小さく溜息を吐いた。

「和田、コレの戸籍を用意しろ。」

（あ、やっぱり無かったのか。）

「ええ!?!無いんですか!?!」

(この人結構賑やかだなあ。)

「アレはコレの戸籍をつくっていないと言っておった。コレの名前は飛優だ。飛ぶに優しいと書く。」

「ええ……。とりあえず明日迄に用意しておきますね。」

(……どのような方法だ?!?少し怖いのだが?!?)

「急がんでいい。それよりも抜け目の無い様にしろ。」

「はい」

(まあ良いか……。無いと困るしなあ……。)

「飛優、お前は今まで誰に世話をされていたのだ?アレの口振りでは、どうも放置されておった様だが?」

(時子さんを出すか……)

収納していた異空間から時子を誰も座っていない席に出して見せた。白雨が姿を現したときに見えた金色の水の様な歪みは白雨特有の物で、呪霊が見える者には必ず見えるようになっていてる。(ちなみに姿を消すときは金色の水の歪みに潜って行く様に見える。)

だから、本来時子を収納から出した場合は(他の物を収納から出したときと同様に)何も無い空間に唐突に異空間に繋がっている丸い穴が出来て、その穴から時子が出て来た

様に見える。（余談だが、界渡りと同様にこの穴に物の一部を入れたまま穴を消すと入れた所と入れていなかった所が綺麗に切断されてしまうので注意が必要。）飛優は出来るだけ能力の詳細を相手に隠しておきたかった為、時子に映像を作らせた。だから、向こうからは白い紙吹雪の中から時子が現れた様に見えるだろう。

「ほう、式神か。先程の龍もこの女もお前の術式か？」

「じゅっしきか？」

「ああ、術式を知らんのか。ううむ……あの龍とこの女はお前の物か？」

「はい」

「おお、そうか。」

（術式のことを知っていたら不自然だからなあ……今度からも少しずつ質問した方が良いだろう。）

「他にはどんな物がある？」

「えつと……白雨……さつきの龍が沢山居ます。」

「龍以外はおらんのか？」

「えつと、私が考えた能力と身体の生き物を作ることが出来るのです。どのような姿のものでも作る事ができます。」

「それでは、今から私が言う式神……生き物を作れるか？」

「はい」

「……黒い狼。大きさを自由に変わることが出来る。呪霊を喰らい、自分の呪力として使う。」

「目の色は何色ですか？」

「金色」

「……はい、出来ました。」

「見せてみろ。」

時子の膝の上に子犬サイズの黒い狼を出す。能力の中に、白雨と同じ様に姿を消す隠密を入れておいたので相手からは黒い煙が集まって狼になった様に見えるだろう。

（これから式神を作るときには隠密を必ず能力の中に入れないとな……。時子さんにも後で付け加えておくか……。）

「ほう、便利だな。出せる式神の数に限りはあるか？」

「ありません。」

（式神の姿を隠せることは黙っておいた方が良いでしょうな。）

「何体出したことがある？」

「7体です。」

（と言うか今出してる。）

「ふむ……帰ったら確かめよう。」

「はい。あ、あの」

「何だ？」

「この狼の名前は何ですか？」

「……影月^{かげつ}。陰影のえいの方に月だ。」

「影月、宜しくね。」

式神

名前 影月（かげつ）

容姿 金色の瞳の黒い狼（大きさは自由）

呪力量 ……多い。呪霊を捕食し、自分の呪力に変換する。飛優から供給することも可能。

能力

・結界 ……飛優の能力と同じ

・隠密 ……任意に姿を消すことが出来る。姿を現すときと消すときには黒い煙が出る。

（飛優には無効。）

・韋駄天^{いだてん} ……足が早くなる。身のこなしが俊敏になる。（時速250kmまでなら出せ

る。)

・変化へんげのじゆつの術　：黒い物に化けることが出来る。変化するときには黒い煙が出る。(大き

さを変えることが出来るのはこれの応用。)

説明　護衛対象を追尾する。呪霊を捕食することが可能。

(言われていない能力が有つても言わなければバレないだろう。それに、あつたほうが便利で面白そうだ。)

飛優は誰にもわからないように小さく笑った。

5 新しい家族

山奥の、森と一体化したように苔生した石段の前に車が止まった。

「着きましたよ、当主様」

「ああ」

「それでは私は車を車庫に入れて来ます。」

「分かった。」

祖父に抱えられたまま車から出る。車内でもずっと抱えられていたが、逃げるとでも思われているのだろうか？

「私は自分で歩けますよー？」

「……そうか。」

祖父がしょんぼりとした顔をした。

いや、厳密に言えば表情は変わっていないのだが、周りの雰囲気があるものすごく寂しそうに見える。

(なんか、悪い事を言ったかもしれない……。)

「あ、でもお祖父様に抱っこして欲しいから抱っこじゃ駄目ですか？」

「ああ！構わんぞ！」

（凄く嬉しそうだなあ。）

「ありがとうございます。」

飛優はふにやりと擬音語がつきそうな人畜無害そのものの笑みを浮かべた。

（嬉しそうな表情と悲しそうな表情と涙が作れると便利だよなあ。）

腹黒い。処世術の一つなのだろうが腹黒い。

苔生した石段を登ると大きな門があった。お寺の前にあるような重厚な黒い門がギイと軋んだ音を立てながら開く。門の先は神社の境内のようになっていた。学校の校庭以上に広そうな広場の奥の方に石垣と石段があり、それを登ったところに大きな日本建築の家が見えた。

その家に入るとすぐに紺緋の古風な着物を着た老女が出迎えた。そして、祖父に向かって礼をしてから口を開いた。

「おかえりなさいませ、御当主様。そちらのお嬢様は……？」

「私の孫だ。飛優と言う。……多恵さん、後でこの子の着物を用意して欲しい。」

「分かりました。すぐに手配させて頂きます。今日は取り敢えず近くの店で下着と着替えを買って来ましよう。」

車が走った時間は30分程度。電車が1時間に一本しか通らないような所ではある

が、15分も車で行けば住宅街にたどり着く。大型ショッピングセンターくらいならすぐに行くことが出来るだろう。

「飛優、私の部屋に行こう。」

「は、」

（良く考えたら家から出るときに靴を履いていなかったからどちらにしろ私は歩けなかったな。）

飛優はふとそんなことを考えた。日本建築の家の中は玄関から続く廊下が中央の広い部屋をぐるりと一周する造りになっている。中央の部屋を囲う形の廊下の外側を別の部屋が囲っており、祖父の部屋は一番奥にあった。

部屋は板の間で、本棚が沢山あった。部屋の一番奥に焦茶色のアンティーク調な机と黒い革の座り心地の良さそうな椅子がある。ワイン色のカーペットが机の下に敷かれていて、それがこの空間にぴったりと合っていた。暖色系の照明が薄暗い部屋を柔らかく照らしている。

祖父は椅子にゆったりと座ると、飛優を膝に乗せた。

（本だ……!!）

飛優は本が好きだった。きよろきよろと辺りを見て落ち着かない様子の飛優を見て、祖父が話し掛けた。

「気になるか？」

「はい、本が好きだから。」

「そうか。」

少し嬉しそうな顔をした祖父は、本棚から子供向けの絵本を取り出した。 ”あまのいわと” など、内容が殆ど平仮名で漢字にも読み仮名が書かれてある童話のシリーズだった。

（この本は昔誰が読んだ物なのだろうか？）

「読めるか？」

「はい」

「読んで良いぞ。」

（これは、音読しろと言うことなのだろうか？）

「どうした？」

「え、えつと、

”イザナギとイザナミ、”

むかしむかし、天地がまだ分かれていなかった頃のお話です。イザナギとイザナミと言う夫婦の神さまがいました。……………」

取り敢えず、飛優は本の内容を朗読した。一冊読み終わると、次の本を渡される。

”イザナギとイザナミ”から”あまのいわと”、”ヤマタノオロチ”、”いなばの白うさぎ”、”ウミサチヒコとヤマサチヒコ”まで読み終わったところで、多恵さんが昼食に呼びに部屋の前に来たので続きは食事の後になった。

「二通り文字は読める様だな。」

(テストも兼ねていたのか……。)

6 食事

(ウミサチヒコとヤマサチヒコの間の兄弟が抹消されていたな……。まあ、物語に關係が無いから省略したのだろうが。)

飛優は絵本の内容について考えていた。

明確に言うとは現実逃避である。多恵さんが用意したであろう食事が目の前に並んでいる。

「頂きます。」

飛優と祖父は挨拶をしてから黙々と食べ始めた。お茶碗などの食器は大人用だったが、量は祖父の半分程度で柔らかかそうなものが多い。祖父のお膳には無いクマの形をした可愛らしいパンケーキに、飛優は目を輝かせた。

「美味し……」

煮物の厚揚げがじわりと口の中に出汁の旨味を広げる。牛蒡も柔らかく煮込まれていて、食べやすかった。小さめの焼き鮭を大根おろしと一緒に食べる。最後に食べたくて残しておいた煮物の人参は優しい甘さが有った。デザートのパンケーキを食べる用に小さなフォークが付いていたのでそれを使って柔らかかそうな生地を切り取った。断

面を見るまで分からなかったが、野菜が細かく切り刻まれて生地の中に入っている。パンケーキはふわりとした食感で、飛優はすぐに食べ終わった。

「ご馳走様でした。」

祖父は既に食べ終わり挨拶を済ませて席を立った後だった。

飛優は四角い形をしたお盆を持ち上げて台所まで運んだ。二歳児の体ではきつい仕事だったが、白雨に支えさせることで何とか運びきる。台所にいた多恵さんに食器の乗ったお盆を渡そうとすると、多恵さんは目を見開いた。

「あらま！後で私が下げましたのに！」

（そういえば祖父も運んでいなかったな……。）

「御免なさい。」

「重かったでしょうに……。」

「はい……。」

「この次からは私が運びますからね。」

「はい。ご飯美味しかったです。有り難う御座いました。」

「まあ！お利口さんですね。お粗末さまでした。」

飛優はペコリと一礼すると台所を出た。

（お祖父様の部屋はあちらだったかな？）

飛優はお祖父様の部屋があると思われる方向に向かって歩いた。
「おい、どこに向かってる？」

後ろから祖父の声でした。

「……？お祖父様の部屋ですよー。」

「そちらは便所だ。」

「あれ？」

「……正反対の方向だぞ？」

「すみません。」

「……逃げようとしたので無ければ良い。」

「はい。」

（今更逃げたりはしないのだがなあ。）

「まあ良い。術式について試したいことがある。ついて来なさい。」

「はい。」

*

道場のような場所に着いた。

「式神を出してみろ。」

「はい。」

今まで隠していた白雨と影月の姿を現す。

それぞれ金色の歪みと黒い霧の中から出て来たように見えたであろう彼らを見て、祖父が言った。

「女は居らんのか？」

「あ」

（忘れていた。）

「出します。」

白い紙吹雪と共に時子さんが現れる。

（早く時子さんにも『隠密』が出来るようにしないと。）

時子さんの紙吹雪は時子さんに作らせた映像なので飛優にもしつかりと見えた。

「ほう、丁度七体か。」

「はい。」

「もつと出すことは可能か？」

「はい。」

鯉の状態の白雨を生成する。

十五匹くらい出来たところで祖父が止めた。

「呪力に問題は？」

「問題ありません。」

「あと、どれくらいの数出せる？」

「……いくらでも大丈夫です。」

祖父は胡乱な目で飛優を見た。飛優が強がっていると思ったのか、何も言わずに飛優から目を離した。

「ふむ、まあ様子を見るとするか。今日のところはこれで良い。」

「はい。」

「部屋に戻るぞ。」

「はい。」

7 お風呂

「あつ、こら！待って下さい！」

「嫌です。一人で入れます。」

「ちよつと！」

トツトツトツと軽やかな足音をたてながら飛優は廊下を走る。その後ろから多恵さんがパタパタと追いかける。

「お待ち下さい！お風呂に入りますよ！」

「だから、入りますよう、一人で。」

「まだ二歳なので一緒に入るのは当たり前です！濡れたらどうするのですか!？」

「うー、濡れませんよー。」

「駄目です！ほら、意地を張ってないで、早くこちらにいらつしやいませ！」

これ以上の抵抗は無意味だろう。多恵さんは何が何でも飛優と一緒に入浴するつもりらしい。飛優は不服そうに頬を膨らませて唇を尖らせた。

「はあい。」

「ほら、せっかく沸かしたお風呂が冷めてしまいますよ。さ、お洋服を脱ぎましょう？」

「はい。」

飛優は観念して多恵さんに大人しく従った。多恵さんは緩くゴム紐で結んでいた飛優の長い髪を優しくほどいて微笑んだ。

「綺麗な黒髪ですね。」

「んー?」

「さ、御手を挙げてください。」

「はい。」

多恵さんは飛優の衣服を全て脱がせた後、自分の着物も全て脱いだ。それから、飛優の体を抱えて風呂場の扉を開ける。飛優は白い湯気に息を詰まらせて小さく咳き込んだ。

*

飛優はお風呂上がりの火照った体をぐったりと横たえていた。無理もない。多恵さんは飛優の身体も洗おうとしたのだ。

(なんとか背中と頭以外は死守したが……。)

抵抗するのに体力を使ったため、飛優はすっかり疲れている。

お風呂から上がった後、多恵さんに着せられた薄桃色の浴衣は柔らかく着心地の良いものだった。飛優は廊下から聞こえる足音にピクリと反応して身を起こし、気崩れを直

した。

「飛優、こちらに来なさい。」

祖父が襖を開けて部屋の中を覗き込み、飛優に向かって手招きをした。飛優は大人しく祖父に従って部屋から出た。

暫く祖父の後ろについて廊下を歩くと、祖父がある部屋の前に立ち止まった。祖父は飛優の手をとって部屋の中に引き入れた。

「ここがお前の部屋になる。好きに使い。」

「はい。」

「布団は後で多恵さんが持ってくる。」

「はい。」

「お前はいやに落ち着いているな。普通お前くらいの子供は泣いたりするものだろう？」

たしかに二歳児がいきなり現れた男に怯えた様子も見せずにしつかりと目を見て会話出来るのは違和感があったことだろう。

（中身が五百歳越えのお婆さんだからなあ……。）

五百歳越えと言っても結婚も出産もしていないので、人生経験はそこまで豊富ではない。だが、伊達に歳だけを重ねたわけでもない。まあ、落ち着いているというよりも枯

れていると言った方が良いのかもしれないが、それは関係のない話だ。

「どうなのでしようね？性格によると思いますよ？」

「そう言う返し方が子供らしくないと言っている。」

「直しましょうか？」

「いや、良い。お前が無理をしていないのであればそのまま構わん。」

「そうですか。」

（前から思っていたが、お祖父様は私に甘いな？初孫効果か？）

祖父はそれだけ言うと、用が済んだのか部屋から出た。飛優は祖父が部屋を出た後、部屋を探索した。

飛優の部屋は八畳間の和室で、まだ何も置かれていない。古臭い照明が部屋を暖かい色に染めている。飛優が部屋を見渡すと、廊下から部屋に入る襖の右手に小さめの障子があった。

（何だ？これは？）

障子の大きさは二歳児の飛優が通り抜けられる程度で床から45センチ程上にある。大人が正座したときにちょうど顔の横にあるくらいの高さだろうか。明らかに通路用ではない。

（窓かな……？）

飛優は障子に手をかけてゆつくりと引いた。少々建て付けの悪い障子の向こうには案の定硝子窓がある。障子と窓の間には30センチくらいの隙間があり、飛優は北海道の二重窓のようだと思った。

「おー。」

硝子の窓の向こうはもうすっかり夜で、何があるのか全く分からず、ただ飛優の顔が映るばかりだ。墨汁が広がったような暗闇をぼんやりと眺めながら、飛優は今日あった出来事を思い返した。

（今日だけでいろいろあったなー。）

初めて外出する。その後、父親が帰宅し、祖父に売られ、そのまま家に連れてこられた。

（うわ、文章にすると少し伏黒くんに似てるなー。まあ、彼は十億円だし、未遂だけだな。）

そんなことを考えてから暫くすると、多恵さんが布団を持って来た。

「飛優様、さ、お布団を敷きますから少々お待ちくださいませ。」

微笑みながらそう言った多恵さんは臙脂色の和布団を静かに敷いた。そして、そのまま飛優を布団に寝かせた後、枕元に座った。

「おやすみなさい、飛優様」

「おやすみなさい。」

多惠さんは部屋の照明をフツと消すと部屋から出た。

一人取り残された部屋は、そこに何かあるのか分からなくなったことでピンと張り詰めているように思える。自分の体温で温まった布団にぬくぬくと包まれた飛優の意識は段々と深い沼に沈むように眠っていった。

8 一人遊び（稲葉の能力説明 亡霊の酒場およびアリスの能力説明）

うーさぎ うさぎ なにみて はねる

じゅうごやおーつきさん

みてはーねる

一人の幼女が3羽の白い兔といっしょに駆け回っている。

臙脂色えんじの着物に、黄土色の帯を付けた子だ。

幼女が駆け回るたびにカランコロンと小気味の良い下駄の音が響く。

ふいに、幼女は立ち止まり、近くの木に寄りかかった。

（あー、暇だな。）

飛優は多恵さんに緩く結んでもらった長い髪を揺らして小さく欠伸をした。

（何か、便利な式神でも作ろうかなー？）

ちなみに、白い兔は稲葉いなばという名前の新しく作った式神だ。

式神

名前 稲葉（いなば）

容姿 赤い目の白い兔（大きさは自由）

呪力量 : 多い。飛優から供給することも可能。

能力

・隠密 : 任意に姿を消すことが出来る。（飛優には無効。）姿を現すときに白い煙が集まって稲葉になる映像、姿を消すときに白い煙になって空中に溶ける映像を周囲に見せる。

・変化の術 : 手袋に化けることが出来る。大きさ、色、形、材質は自由に変更可能。変化するときは一瞬白い煙になって形が変わったように見える。

・結界 : 飛優の能力と同じ。

・水の術 : 白雨の能力と同じ。

・聖域 : 白雨の能力と同じ。

・強制睡眠きようせいすいみん : 触れた相手を強制的に眠らせ、強制的に起こすことが出来る。（発動

は任意。飛優には無効。）この能力で眠らせた場合、強制的に起こさなければ永久に眠り続ける。（“○時間眠らせる”など、最初から眠らせる時間を決めることも可能。）

（因幡の白兔を読んで思いついた式神だが、能力は全然関係ないな。）

祖父に式神を見せてから一週間が経った。

祖父は飛優の戸籍関係やらで忙しいらしく、飛優は野放しにされていた。もちろん飛優は祖父の部屋の本を読み漁った。飛優としては今日も家の中で読書やお絵描きでもしていたかったのだが、多恵さんがそれを許さなかった。

『まあ！こんな良い天気なんですから！お昼ごはんまでお外で遊んでいらつしやいませ！さあ！』

一体いつから天気の良い日は外で遊ばなければならぬと決まったのだろうか？たしかに家から一歩も外に出ないのは健康に悪い。だが、家の中でだって運動は出来るし、家から出るのはたまにでも良いと飛優は思うのだ。

（あー……日差しが辛い。）

普段日光に晒されていないために青白い肌を容赦なく刺す太陽に飛優は恨めし気な視線を向けた。日焼け止め（聖薬）は塗ってあるので日焼けはしないが、嫌いなものは嫌いなのだ。

（……おうちかえりたい。）

残念。お昼までにはまだ時間がある。

（便利な神器でも作ろう。）

現実逃避である。

人生諦めが肝心なのだ。

(どんな神器を作ろうか？ 戦闘手段は間に合っているから、情報収集専用のものを作ろうか？ 情報と言えばインターネットだが……2ちゃんね○が出来たのが1999年で、今が1994年の6月だから、あと5年くらいで2ち○んねるが出来たのか……) 5年……案外すぐに過ぎるような年数だが、飛優が昔ただの日本人女性だった頃は産まれたときから携帯電話は普及していたし、物心ついた頃にはスマホがあった。しかし、今はそもそも携帯電話がまだ普及していない時代である。

(情報を収集した後記録する神器を作ろう。……欲しい機能を並べていくか。) 飛優は帳面と万年筆を(神器生成で)作ってからそれ書き込んでいった。

(今思ったけど、ニコニコ動画やYouTubeも、2005年なんだよなー。)

欲しい機能

- ・ 呪霊情報の収集と記録
- ・ 事件・事故・交通情報の収集と記録

(名前は亡霊の酒場にしよう。なんとなく情報って酒場にあるイメージだし。)

*

三十分後

「おー、これで完成かな？」

見た目は完全に黒いガラケーである。

（懐かしいなあ。）

まあ、この時代の携帯電話はまだ折り曲げられないのだが。

（やっぱリスマホより、この頑丈そうな感じがしつくり来るな。）

重さがあった方が落ち着く人間なのである。

ちなみに、このガラケー自体が神器で、小魚のような式神が収集した情報を記録して管理する仕組みになっている。

（少し前に作った式神を強化して統合した形になるな。）

飛優以外には見えず、肉体的には存在しない情報収集専用の式神である小魚が空中に舞った。メダカのような見た目のこの式神は、強化したことにより、インターネット上の情報も収集出来るようになっていく。過去視のような機能もつけてあるので大概の情報も調べられるだろう。

（これを世界中にばら撒くか。あ、収集した情報をどのように表示しようかな？）

飛優はとりあえず呪霊情報と事件・事故・交通情報は地域ごとにまとめて表示されるようにした。

ばら撒いた式神が集めてきた情報が早速携帯の中に記録され、画面に表示される。

（この情報の中から欲しい情報を探すのは骨が折れるな。秘書みたいに情報を管理する

役割の式神を作ろう。付近の情報や、特級呪霊の情報をすぐに伝えてくれるようなやつ。）

神器

名前 亡霊の酒場（ぼうれいのさかば）

容姿 黒い携帯電話

呪力量 多い。飛優から供給することも可能。

能力

・情報収集 : メダカのような式神を生成し、それを操作することで情報を収集する。

・情報記録 : 収集した情報を記録する。

式神

名前 アリス（ありす）

容姿 金髪青目のクラシックメイド服を着た少女

呪力量 多い。飛優から供給することも可能。

能力

・亡霊の酒場の住人 : 亡霊の酒場内に存在する。（AIのようなもの。肉体は存在し

ない。画面の中の存在。）

・亡霊の酒場の事務員　：文書業務を完璧にこなすことができる。

・管理者権限　：亡霊の酒場に記録された情報を管理することができる。亡霊の酒場に、飛優の欲しい情報を優先的に収集させることができる。また、亡霊の酒場に記録されている情報をデータとして既製品のコンピュータに送信することも可能。（この場合、インターネット回線を経由せずに直接データをコンピュータに入れることになるため送信された側は送信した側の情報を一切辿れない。データを送られた側からすると、入れた覚えのないデータが唐突に出現する怪奇現象。）

・変声　：自由に声を変化させることができる。

（大体こんなもので良いかな？）

飛優はでき上がった黒い携帯電話を見つめて、満足そうに微笑んだ。

9 古賀 飛優

亡霊の酒場およびアリスを作り上げた後家の中に入った飛優は、昼食後に祖父に呼び出された。

(何の話だろうか?)

廊下を歩いて祖父の部屋へ向かう。祖父の部屋の前に着いた飛優は、軽くノックをして、声をかけた。

「失礼します。」

「飛優か、入れ」

扉に手をかけて、ゆっくりと開けた。入室した後に扉を閉めて、祖父に向かって声をかけた。

「何か御用ですか? お祖父様。」

「お前の出自についての話をしたい」

「……そうですか。」

(出自といっても何を話すと言うのだ?)

そもそも、二歳児に自分の出自を話しても理解できるか怪しいものだ。

「お前の様子を見て、話しても問題がないと判断した。……今から話すのはお前の父親についての話だ。」

「そうですか。」

飛優の父親のことについて苦虫を噛み潰したような表情で話す祖父の話を要約すると、飛優の父親は古賀家（飛優が引き取られた家）の嫡子で、前当主であった飛優の祖母の実際の息子であるが、問題を起こしたため勘当されて、それ以降の消息が全く分からなかったらしい。（ちなみに祖母はお亡くなりになったため、現当主は祖父）しかし、今回『子供（飛優）を買い取る気はないか？』と急に連絡をとってきたため、祖父が直接出向いたそうだ。

古賀家はそもそも祖母の親の代から男児がおらず、絶えかけていたのを祖母が継ぐことで無理矢理存続できた家であるため、子供どころか人間がほとんどいない。いても術式やら呪力やらを持っていない者ばかりである。そのため、祖父は飛優を次期当主としてこのまま養育したいらしい。

ここからが重要なのだが、父親が勘当された理由は大まかに言うと「犯罪者になったため」である。「犯罪者の子供を次期当主として育てる」のではいささか外聞が悪いため、「両親を事故で失い児童福祉施設に預けられていた古賀家の遠縁の子供を当主が養子として引き取り次期当主として教育する」というのを表向きの飛優の境遇にする

らしい。

「分かりました。異論はありません。」

「表向きの事情はこのように説明するし、お前の戸籍もそれに合わせて作る。……口裏を合わせるようにしろ。」

「はい、どなたかに尋ねられたときは、お父さんとお母さんが居なくなつてからお祖父様に引き取られた」と説明すれば問題ありませんよね？」

(嘘ではないしな。)

「問題ない……お前が、居た」ということにする施設は、あおぞらこども院で、お前の両親の名は田口遼一と田口美春だ。」

「分かりました。」

「もう用はない。下がちなさい。」

「はい。」

入室したときと同じようにゆつくりと扉を開けて退出した。扉を閉めた飛優は自分の部屋へと向かつて歩いた。

*

自室に戻つた飛優は正座をして考え込んでいた。

父親の話は

・“術式”を持っていてる人間がここ60年間一人も生まれず、呪力を持っていてる者もほんの僅かしか生まれていない。

・父は術式も呪力も持っておらず、家からは殆ど勘当扱い。
という内容だったはずだ。

(呪力と術式無しのため勘当ではなかったのか?)

まあ、飛優が直接質問して父親に聞いたわけではなく、父親の発言を組み合わせる飛優が推測したに過ぎないのだ。多少の誤差はあるだろう。

(んー、多分呪力と術式がないのは事実だろうなー。”呪詛師”ではなく”犯罪者”だったしな。)

一体どんな罪を犯したというのか。

(特に興味はないけれど、亡霊の酒場の性能テストも兼ねて調べてみるか。)

「アリス、私の両親について調べておくれ。」

『了解いたしました。』

無機質な少女の声でそう言ったアリスは三十秒ほど沈黙した。

『完了しました。』

田口遼一 : 消防士。1993年3月28日に交通事故で死去。享年37歳。

田口美春 : 保育士。1993年3月28日に交通事故で死去。享年32歳。

以上です。事故についての情報はご入用ですか？」

「あ、うん、必要ありませんよ。」

『了解いたしました。』

（質問の仕方が悪かったな、これは。えー、両親、んー……生物学上の父親と母親について、で良いかな？）

「アリス、私の生物学上の父と母について調べておくれ。」

『了解いたしました。』

また三十秒ほど沈黙した後、アリスは父親と母親についての情報を語り始めた。

『古賀重吾　：闇ブローカー。麻薬などの違法な物品を主に取り引きしている。現在は国際的な犯罪組織に所属している。父である古賀誠一郎とは不仲。援助交際の相手であった中田柚花を殺害後、遺体を山中を遺棄した。』

中田柚花　：女子高生。古賀重吾と援助交際していた。享年18歳。

以上です。』

「ありがとうございます。」

（あー、まあ、中田柚花さん以外は殺していない……のかな？）

なぜ不仲なのか、どうしてそのようなことをしたのか、なんてことは飛優にとつてはどうでも良いことだ。興味もないし、どのような事情があったとしても事実は変わらない

い。知らなくても良さそうでも複雑そうな人間関係にわざわざ首を突っ込む必要は全くない。

(眠くなってきたな……。)

珍しく外に出たせいで体力を消耗したらしい。亡霊の酒場の性能テストは済んだことだし、予定はない。飛優は影月に体を大きくさせて、それに包まって昼寝をした。

1
0

能力

*

十七巻で夜蛾学長が楽巖寺学長に殺された件について。

(……………ええ)

今は午前四時。飛優は新しく買った単行本の内容を異空間の中で式神の体を使って読んでいた。ちなみに飛優の体はまだ布団の中である。

(いや、何故……………?)

正直なところ夜蛾学長は最後までいると思っていた。

(……………というか、もしかして私の術式も危険視されるのか?)

夜蛾学長の術式が”容易に軍隊を所持できる”という理由で上層部が無期限拘束をしようとするならば、飛優の術式も同じ扱いを受けるのではないだろうか?

(……………んー、でも、完全自立型人工呪骸……………要するに自我を持ち呪力の自己補完が可能な呪骸が危険視されたのだ。その点私の式神には自我がない。……………まあ、戦力として見るならば自我を持つがどうかなど関係ないだろうが。)

結論として、飛優の術式は夜蛾学長の術式と同じように危険視されるはずだ。

(なんとまあ面倒なことになった。)

べつに無期限拘束されようが、死刑になろうが、飛優は特に何も感じない。なぜなら、そもそも飛優を殺すことができるものは本当に限られているからだ。

たしかに、飛優自体の攻撃力は高くない。しかし、回避能力は高いし、逃げ足も早い

のだ。おまけに結界を張れば大概の攻撃は防げる。最悪、界渡りを使えばどのような状況からでも逃げる事ができる。ついでに言えば、式神を使って死体を偽造して、死んだふりをする事だってできる。

したがって、飛優を殺すことができるのは飛優を捕獲することができ、その上結界を破れるものに限られる。飛優に能力を与えた自称神ならば可能だろうが、権力者とはいえただの人間にそのようなことができるはずもない。

(んー、できれば上層部とは良好な関係でありたいのだが……。)

いくら腐敗が激しいと言っても、呪術師の多くが所属する組織だ。敵対する利点などほとんどないだろう。人間社会で生きてゆく以上集団のなかで疎まれるのは避けるべきだ。

(……五条悟は何故あのような分かりやすい態度をとっているのだろうか？呪術界の腐敗を取り除きたいのならば表面上は穏やかに接して内側に入り込んで十分な地位を得てからことを起こせば良いだろうに。)

五条家は御三家の内の一つなのだから上層部の懐に入るのは容易なはずだ。

そもそも教師になって若い世代から呪術界を変えていくだなんて一体何年費やすつもりだ？腐ったミカンにだって子供や後継はいるぞ？

話の流れの都合上と言われればそれまでだが。

(まあ、上層部の仕組みがよく分からないため、なんとも言えないが。)

わざわざ敵を作るような真似をしなくても良いだろうに、と飛優は思った。

(五条悟の場合自分が規格外に強いからなあ……。)

自分以外のものを自然に見下しているため、相手に気を使う意味がないと本能的に感じていたのかもしれない。

(ま、今はそんなことはどうでも良いのだが。)

そう、大切なのは飛優の術式についてだ。

(五条悟^六がいるから、詐称することはできないだろう。)

そもそも祖父に見せた後である。詐称は難しい。

(んー、危険性が少なく、利用価値の高いものであれば敵対視はされないだろうか?)

利用価値があれば、無期限拘束をされたとしても死刑にはならないのではないだろうか。例えば、神器生成で呪具を作って売るとか。

(式神の身体を飛優^{本体}に似せて作り、それを拘束させれば後は自由に行動できるしな。)

適当なところで赤ん坊からやり直すのも良いだろう。

(何にせよ、拘束だの死刑だのにならないに越したことはないが。)

”敵を作らない”

(まー、今後の緩い方針としてはこんなものかな?)

あまり良い意味ではないが、八方美人、日和見主義、というのが似つかわしいかもしれない。

(前世でも似たようなことをしていたから慣れているしなあ。)

時刻は午前七時。もうそろそろ多恵さんが飛優を起こしに来る頃だろう。

(思ったよりも時間が経っているな。飛優の体に戻るか。)

飛優は自室にある本体に戻った。体自体は既に眠っている状態であったため、体に戻った飛優の意識も、すぐに深い闇の中に落ちていった。

11 1994年8月

飛優が祖父に引き取られてから三ヶ月が経った。

盛夏である。

自らの命を燃やすような蟬の声が、辺り一面に木霊していた。

(煩いなあ……。)

飛優は今、森の中を散策している。

元来飛優は引きこもり気質であるが、祖父の部屋の本を粗方読み終わったため気分転換に古賀家の敷地内を探検することにしたのだ。

(それにしても、広い敷地だ。)

多恵さんから聞いて分かったことだが、飛優が古賀家に来たときに通った石段と黒い門、境内のような広場、そして、飛優が現在住んでいる家は敷地のほんの一部なのである。

多恵さんによると、古賀家はそこそこ大きな山々にぐるりと周りを囲まれた石垣の上であり、付近に民家はないらしい。そして、古賀家の周りを囲んでいる山のほとんどは古賀家が所有しているため、古賀家の敷地はとても広いらしいのだ。

飛優が今歩いているのはそんな山の一つだ。人の手がある程度加えられている山であるため、獣道よりはマシな通路がある。

(まあ、熊も鹿もいるらしいから普通の人にとっては安全ではないのだろうか。)

ある程度人の手が加えられているとはいえ、道以外はほぼ自然のままである。ちなみに、飛優は言語能力補助でそういった生き物の縄張りを理解することができ、避けることができるので遭遇したことはない。

(それにしても、かなり自由にさせてもらっているよなー。)

祖父は、食事やお風呂や就寝の三十分前に家にいなければ恐ろしい形相でこちらを探すのだが、それ以外は本当に自由だ。それに、恐ろしい表情で飛優を探しても、飛優を見つければすぐに優しい顔になる。

(まあ、そんなときは強制的に抱えられたまま下ろしてもらえないが。)

この三ヶ月で何度か昼食を忘れて遊んでいたことがある飛優は少々苦い顔をした。腕から逃れようとするが無表情でじっと見つめてくるので、飛優は大人しく抱えられることしかできないのだ。

ちなみに、祖父は仕事で週に何度か外出しているのだが、そんな日に昼食を忘れていた場合は、帰宅してすぐに抱えられて、一日中そのままだ。

(それ以外では、そこまで干渉はされないし、人間が少なく居心地が良いから、できれ

ばずっとここにいたいものだ。」

飛優は人付き合いができないわけではないのだが、どうにも昔から人間との会話が気疲れして苦手なのだ。そのため、祖父と多恵さんと和田さんしかいない古賀家は飛優にとって理想的な場所だった。

（そろそろ帰ろうか。）

飛優が乗れる程度の大きさになった影月に乗って、飛優は歩いて来た道を戻っていった。

*

（……知らない人達がいる。）

旅行鞆を持った男女が家の前に立っていた。

飛優は影月を子犬くらの大きさにして、サツと木陰に隠れた。

（誰だ？）

じつと息を殺して様子を伺っていると、多恵さんが家から出てきて対応しているのが見えた。

「まあ！おかえりなさいませ、春香様、良平様。」

女が先に返事をした。その後すぐに男も続けて応える。

「ただいま、多恵さん。父さんはどこ？」

「ただいまー。」

女の方がせっかちそうなのに対して、男はのんびりとしている。服も、女の方は赤いチエック柄の半袖シャツにベージュのパンツ、薄色の襟なしデニムジャケットを腰に巻いて頭にデニムキャップを被っている……という風になかなか小洒落ているのだが、男の方は白いTシャツにダボつとしたデニムパンツといった、至ってシンプルなものだ。

（「父さん」……ということとは、）

彼らは、飛優の祖父の息子と娘で飛優の父の兄弟……つまり、飛優の叔父と叔母であるらしい。

（一応、お祖父様がいらつしやるまで隠れていよう。）

多恵さんと談笑している時点で危険はないだろうが、知らない人の前に出るのはかなり勇気がいる。見つかったても困らないため、特に気配を消したりはせずに静観することにした。

かれこれ、四、五分くらい話していただけるか。

「ところでさー、」

女……春香が口を開いた。

「さっきからそこに隠れてんのって何？」

（……………！）

先程まで和氣藹々としていた空気が一気に緊迫したものとなる。

(……これは、今姿を見せた方が心証が良いだろう。)

飛優は大人しく前に出た。攻撃をされるかもしれないため、影月は大型犬くらいの大きさにした。

「え、子供!?どつから来たの!?お母さんは?」

「えーと、あの……すみません。」

なんとも妙な空気になった。

「あらま!飛優様でしたか!隠れていらしたのですね。ああ、あとでぶどうジュースとおやつをご用意しますから、お座敷でお待ちくださいませ。」

「はい、分かりました。」

「え、多恵さん、知ってる子なの?ひゆうちゃん?」

「えーっと、ひゆうちゃん?おじさんにお名前教えてくれるかな?」

飛優はぱつと走つて多恵さんの後ろに隠れ、多恵さんの着物の袖を緩く握つた。

「あらあら、人見知りですか?飛優様、ご挨拶なさいませ。ほうら、怖くありませんよ。」
(別に人見知りではないが、この質問の勢いはきつい。……まあ、一旦聞く姿勢になつてくれたようだから言われた通りにしよう。)

多恵さんに整えられて肩までのおかつぱになった髪がふんわりと風に靡いた。多恵

さんの後ろから一歩前へ出る。

「はじめまして、古賀飛優です。」

1 2 古賀良平視点 飛優ちゃん

「はじめまして、古賀飛優です。」

多恵さんの後ろから出てきた女の子はそう言つて、ペコリとお辞儀をした。

気弱そうな垂れ目に、下がり眉、ぶつくりとした可愛らしい唇。どことなく兎のようだと思つてしまうその容姿は、写真の中の母によく似ていた。

母あゆ子は良平が四歳のときに亡くなっているので、良平は写真に写っている母しか記憶にない。でも、白黒写真の中の母をうんと幼くしたら、きつとこんな顔になるんだろうなあ、と良平は思った。

「はじめまして、飛優ちゃん。僕の名前は古賀良平。ところで、その黒い犬の名前を教えてくださいませんか？」

人見知りをする子のようなので、良平は屈んで飛優と視線を合わせてできるだけ怖がらせないようにした。

「この子は影月という名前です。私の式神です。」

(式神……呪術師の子供かあ。でも、それにしても幼いような……。)

術式を使えるようになるのは大体四歳頃。この子供はせいぜい三歳くらいにしか見

えない。

(うーん、成長障害かな?)

「てゆーか、古賀つて……どういうことよ?多恵さん。」

今まで状況についていけずに黙っていた姉が多恵さんに質問した。

(あ、それは僕も気になる。)

もちろん、良平だつてこの子供について聞きたいことは山ほどある。

「重吾様の娘です。当主様が養子として引き取りました。」

「はあ!?アイツ、子供をここに置いてつたの!?」

姉がそう言うのと、多恵さんは飛優ちゃんをチラリと見て姉に目配せをした。姉もハツとした顔になり口を押さえる。さすがに本人、それも子供の前でそう言った話をするべきではない。とりあえず、家の中に入って、飛優ちゃんと影月をお座敷に連れて行つてから別室で話をする事になった。

*

「重吾様がお金と引き換えに当主様に渡してきたそうですよ。」

多恵さんが沈痛な面持ちでそう言った。

「なつ……子供を金で売つたの!?アイツ!やっぱり今度会つたら一発……飛優ちゃんの方も含めて二発ぶん殴つてやるわ!!」

子供好きの姉にとつてはとても許し難い行為だろう。だがしかし、良平は姉に重吾を殴らせるわけにはいかない。

「姉さん、落ち着いてよ。姉さんの力で殴ったら兄さんが死んじゃうよ。」

なんせ、良平の姉こと春香は呪力を蠅頭よりは多い程度にしか持っていないはずなのに、ただの金属バットで一級呪霊を討伐したことがあるのだ。呪力なしの完全非術師の重吾は確実に死んでしまう。

「どういう意味よ!?!」

「ご、ごめんよ。あ、そういうえば、どうして飛優ちゃんが隠れてるのに気付いたの?」

「いや、なんか、話してたら、途中から視線を感じただけだけけど。」

「ええ……。」

(視線って何……?)

良平には逆立ちしても分かりそうにない領域の話だった。

「ま、でも、嫌な感じとかは全くないし、観察してるみたいだったから最初は小動物かと思っただけど、なんとなく違う気がしたから。」

「へえ、そうなんだ。」

「何よ?」

「いや、別に?」

相変わらず、野生に生きていると思ったただけだ。

13 お盆

(あの人たちは父親の悪口を子供の前で言わない程度の良識がある人物なのだろうな。)

そんなことを考えながら、飛優は子犬サイズにした影月を膝に乗せて、用意されたぶどうジュースを少し飲んだ。お皿に盛られたぼんたん飴を摘んで、もちやもちやと咀嚼しながら影月の頭を撫でる。

「ああ、もうお盆の季節なのですな。」

なるほど、彼らが来訪した理由に得心が行った。

実家に帰省したら知らない子供がいただなんて、とても衝撃的だったことだろう。

(お祖父様は私のことを彼らに伝えていなかったのか?)

養子を取ったことを実子に言わないのは少し酷い気がする。まあ、先程の様子を見る限り彼女と飛優の父親との仲はとて悪そうだ。もしかしたら言いにくかったのかもしれない。

祖父は今仕事で出ているが、もう少ししたら帰ってくるだろう。そのときに多分彼ら
が問い詰めるだろうから、飛優も一緒に聞けば良い。

飛優は違うお皿に盛られていたたまごボーロを口に放り込んだ。

*

祖父が帰ってきた。

「どーしてこんな可愛い子のこと教えてくれなかったのよ〜！」

現在飛優は春香さんに抱えられている。

(きつい。胸に圧迫されて苦しい。)

顔には出さないが、ものすごく逃げたい。春香さんは飛優がいた部屋に入ってきて来てからずっとこんな調子である。多恵さんと良平さんはこちらを生暖かい目で見るばかりで引き剥がしてはくれないのだ。

「言ってなかったか？」

「聞いてないわよ〜！」

「父さん、しつかりしてよ……。」

(おいおい、言い忘れていただけかよ。)

呆れた。もつと深い事情があつて、黙っていたのかと思つていた。

「それよりも、そろそろ離してやったらどうだ？苦しそうだが。」

「……えつ、あ、飛優ちゃん！大丈夫?!」

(しぬかとおもつた。)

圧迫され過ぎて顔色が少し悪くなつていた飛優はようやく春香さんから解放された。

「ありがとうございますお祖父様。」

「ご、ごめんね、飛優ちゃん。」

「いえ、大丈夫ですよー。」

この人だつて別に悪気があつてしたわけではないのだ。それに、もう解放されたため、特に文句はない。

「ごめんよ、姉さんのことを止められなくて。」

「飛優様は内気なところがございますから、春香様と強引にでも触れ合った方が上手くいくと思ひました。」

(多恵さん……。)

しかし、実際その通りなのだ。飛優の中の春香さんを警戒する気持ちはすっかり消え去っていた。

「春香さん、あの」

「飛優ちゃん! 『春香お姉ちゃん』つて言ってみて!」

「えと、春香お姉さん?」

「お姉ちゃん! ……父さんの娘になつたんだから、私の妹よ!」

「僕のこと、『良平お兄ちゃん』つて呼んでよ。」

「良平お兄さん……?」

春香さんと良平さんが嬉しそうに微笑んだ。飛優は新しくできた兄と姉に、優しく抱きついた。

14 墓参り

精霊馬が仏壇の前に置かれていた。

仏壇の前にお線香をあげて、手を合わせた。しばらく目を閉じた後、ゆつくりと退席した。

「うわ、この家まだテレビ置いてないの？」

「そんなもん要らん。」

「うわー、ありえないわー。ね、飛優ちゃん？」

「え……。」

（どう返答すれば良いのだ、これは？）

賛成すれば祖父を批判することになるし、反対すれば今度は春香さんが気を悪くするかもしれない。

と言うか、そもそもここに電波がくるのだろうか？

「ほら、姉さん、飛優ちゃんが困ってる。」

「えーっ、でもでも、テレビ、ないんだよ!?!」

「父さんがそんなの家に置くはずないだろ。」

「そーだけどさあ。」

祖父が鬱陶し気に顔を顰める。

（お疲れ様です。）

飛優は祖父に同情した。

「皆さま、スイカを切つてまいりましたよ。さあさあ、縁側でお召し上がりくださいな。」

「ああ、ありがとう、多恵さん。」

「いえいえ」

ちなみにこのスイカは敷地内にある多恵さんが世話をしている畑産のものだ。多恵さんは古賀家の敷地内にある、いわゆる屋敷の離れと呼ばれるものに住んでおり、その離れの付近にある小規模な畑で野菜などを作っている。離れの付近には、他にもヤギ小屋と鶏小屋があり、多恵さんはそれらの世話もしているようだった。のちに聞いた話だが、飛優が古賀家に来た際に車の運転をしていた和田さんは多恵さんの息子で、多恵さんの仕事の補助と、運転手をしているらしい。名前は和田達也さんというそうだ。

離れも屋敷も石垣の上であり、柵もあるため、野生動物に畑を荒らされたり、家畜を襲われたりする心配はない。昔は多恵さんや和田さんのほかにも数人の使用人がいて、離れで生活をしていたらしい。そのため、離れの造りは寮のようになっており、現在は空き部屋が数部屋ある状態のようだ。

(改めて考えると、多恵さんはかなり多忙だよなー。)

一人くらい増やしてもいいと思うのだが、それを決めるのは祖父だ。飛優が口を出すことではない。

シャクリとスイカを食べる音が、簾に日を遮られて薄暗い縁側に響く。

「飛優ちゃん、もつとスイカ食べなよ。無くなるよ?」

「いえ、先程おやつを食べましたから……。」

「あ、そうなの?」

「はい。」

「遠慮してない?……姉さん、飛優ちゃんのお皿貸して。」

「はい、良平。」

透き通るような水色のガラスのお皿にスイカが乗せられた。

「あ、いえ、ほんとうにお腹がいっぱいで……。」

春香さんが心配そうに飛優を見る。

「大丈夫? いっぱい食べないと大きくなれないよ?」

「飛優ちゃん、もう四歳でしょう? いくらなんでも小さすぎやしませんか、父さん?」

良平さんが祖父に向かって問いかけた。

「いや、まだ二歳のはずだ。」

良平さんが目を見開いた。

「…………え、でも術式が」

「あくまで平均が四歳というだけで、早くに術式が使えるようになる者も、数は少ないが居る。」

「…………そうなんです。よかった、検査が必要かと思いましたが、それなら大丈夫そうですね。」

良平さんが安心したように笑った。

「ああ、いや、一応検査をした方がいいかもしれん。」

「なぜですか?」

良平さんが怪訝そうに祖父を見る。

「アレが、飛優のことをどのように扱っていたのか、はつきりとは分からんが…………どうやら、戸籍も作っていなかったようだな。」

「…………そんな!」

春香さんが声を上げる。それに対して祖父がため息混じりにつぶやいた。

「アレは一体何を考えているのか…………。いきなり連絡をしてきたかと思えば『子供を買い取れ』だど? ふざけたことをぬかしおつて。」

「…………父さん、飛優ちゃんの前でそんなこと」

「そうよ！父さん！」

「いや、此奴は聡い。わしらの会話を全て理解しておつた。事情も説明してある。今更隠す必要はない。……たとえ術式も呪力も持たずとも、わしの孫だ。引き取り、育てはしただろう。だが、術式を持つ以上、古賀家の跡取りとして育てる。」

祖父の言葉に、春香さんと良平さんの顔が強張る。

「僕たちのせいですよ。僕には呪力がないし、姉さんは強いけど呪力は少ししか持つてない。」

（なんか、急に重い話になったのだが。）

飛優としては、祖父がそのようなことを考えていたことを初めて知り、少し衝撃を受けていた。呪術師でなければ、何処ぞに捨てられていただろうと思っていた。しかし、考えてみれば祖父は飛優の父親に対しては冷たい態度だったが、飛優に対して酷いことをしたことはない。飛優は祖父のことを誤解していたことを申し訳なく感じた。

「あくまで、跡取りとして育てるだけだ。飛優が拒絶するならば諦める。……家の存続は、お前たちの祖父にあたる栄治郎様の望みだ。私はあの方に大恩がある。できれば、継いで欲しいとは思っておるが、無理にとは言わん。……あの方は自分の愛娘に生き写しの曾孫を苦しめることは望まんだろう。」

祖父はそう言つて息をつくつと、良平さんと春香さんの目をみた。

「お前たちが気に病む必要はない。」

そう言ったあと、立ち上がり、多恵さんに向かって声をかけた。

「多恵さん……」

「分かりました。」

「あ、父さん、お花とお線香持つてる？」

「あるぞ。」

「私もお花持つて来たから、一緒に持つてくよ？」

「ああ、頼む。」

（ああ、お墓参りか。）

飛優は歩き始めた祖父の着物の袖を軽く握り、小走りで祖父に着いていった。

*

墓は敷地内にあつた。

屋敷から見て、多恵さんが暮らしている離れの反対方向の山に、苔むした低めの石垣があり、その上に墓石が置かれている。その山の麓に小さな井戸があり、そこで汲んできた水を使って墓石付近の掃除をした。普段使っている生活用水用の井戸は屋敷と離れの間くらいにあつたのを見たことがあるため、これは墓専用の井戸なのだろうか。生活用水用の井戸には機械が取り付けられており、家の中の蛇口から水が流れるように

なっていたが、こちらの井戸にはレトロな手押しポンプが付いていて、それを使って水を汲んだ。ちなみに呼び水は近くに流れている川のものを使った。

墓石の前に並んで手を合わせる。

飛優はなんとなく、誰かに優しく微笑まれた気がした。

15 1994年10月

季節はもうすっかり秋である。

山の合間にある草原はススキに覆われており、銀色に、海のようにゆったりと波打っていた。

「狐でも出そうな景色ですねえ」

影月に乗り、鯉の姿をした（飛優以外には見ることができない状態の）白雨を周囲に泳がせた飛優は、思わずそうつぶやいた。

（そういうえば、近々会合があるのだったな。）

飛優は影月の頭を撫でながら、二ヶ月前に祖父が言ったことを思い出していた。

*

春香さんと良平さんがそれぞれの家へと帰ってから、二日後のことである。

「飛優、私はお前を今年の会合に連れて行くつもりだ。」

「お祖父様、会合とは何ですか？」

（会合……呪術師のか？）

昼食を食べ終わってすぐに、祖父がそんなことを言い出した。

「十月に島根で開かれる予定の、呪術師の名家の会合だ。お前はもう術式を使えるし、粗相をすることもなからう。古賀の次期当主として、私の後ろで大人しくしているだけで良い。」

「分かりました。」

「礼儀作法などを指導してもらえよう多恵さんに頼んである。明日から、昼食を食べ終わり次第多恵さんのところに向かいなさい。」

「はい。」

*

作法は、飛優が便利屋になる前に、社会人として身につけていたものと似たようなものであったため、すぐに覚えることができた。

(しかしなあ……。)

憂鬱である。なんせ、五条悟が『腐ったミカン』と呼称する者たちの会合だ。おそれなく、権謀術数渦巻く、大奥のようにドロドロしているところだろう。

(まあ、それを言うならば、お祖父様だってミカンなのだろうが。)

飛優は、祖父のことをかなり好ましく思っている。具体的に言うと、祖父の望み通り、古賀家を継承するつもりになるくらいには。

(……やるか。)

古賀家の当主となるならば、これくらいのことではできて当然だろう。

飛優は弱気になっていった自分に発破をかけた。

(さて、とりあえず、古賀家の立ち位置や、会合に参加する家の情報について調べよう。)
「アリス、島根県で今月開かれる呪術師の会合に参加する名家の関係を調べておくれ。」
『了解いたしました。』

アリスが調べた内容を要約すると、古賀家は、御三家の中では加茂家と一番仲が良く、次に禪院家と仲が良いらしい。五条家とは、敵対はしていないが、そこまで仲が良いわけではないらしい。ただ、古賀家がある福岡県に、太宰府天満宮があるため、そこそこ付き合いはあるようだ。ちなみに、家系図を調べればどの家とも血の繋がりがあある。

古賀家自体は、御三家には及ばないものの、かなり長く続いている名家という評価だ。
……近年、子供に恵まれず落ち目と嗤う者も多いが。

(うーん、基本的には、日和見主義でいれば問題は無さそうだな。)

おつとりと微笑んで大多数の意見に賛同し、角を立てないように気をつけていれば大丈夫そうだ。主人公側……五条悟と敵対しないために、『いじめを好まない優しい優等生』のふりをして、周囲の補助監督や窓に対しても、礼儀正しくしておこう。

(……あれ？ 橘小夜とミヤ・クロムとやることが同じ？……というよりも、人として当たり前のことか。)

やさしくしましょう。あいさつをきちんとしましょう。
人に優しく礼儀正しくしましょう。)

小学一年生でもできることだ。不思議なことに、できない大人もそこそこいるが。

16 術式の偽装 会合の準備

会合には、五条悟も参加する。

(私の二つ上だから、ちようど四歳くらいのはずだ。)

そして、当然、五条悟は六眼を使える。

(うーん、ついに、先延ばしにしていた問題に取り組みざるを得なくなってしまうたなあ。)

問題とは、もちろん、飛優の術式についてである。はつきり言って、飛優の術式はこの世界においては異常だ。そして、異常ということは、上層部に排除される可能性が高くなるのと同義である。異端者は往々にして大多数の者から迫害される運命にあるのだ。

(まあ、六眼対策といつても薬を飲むだけなのだがな。……相手に見せる能力は式神生成・使役、神器生成、結界、過去視で良いか。)

要は、能力の数が多すぎるのが悪いのだ。上層部に危険視されそうなので、まだ祖父に認識されていない能力や、式神で誤魔化せそうな能力を隠せばいい。幸い、術式自体は元々一つなのだ。偽装はそこまで難しくはない。

飛優は、他人に、術式の能力を式神生成・使役、神器生成、結界、過去視と認識させる効果のある薬を聖薬で作り出し、飲み込んだ。

（まあ、これで大丈夫かな？……そういえば、お祖父様からは、術式の名前なんて聞いていないのだが、これは自分で考えなくてはならないのだろうか？）

そもそも、術式の名前がどのようなにして決まっているのか分からないが、もしかしたら、使っているうちに『なんとなくこんな名前！』とピンと頭の中に浮かんでくるものなのかもしれない。

（……一応、聞かれたときのために、考えておくか。んー、出来るだけ、名前から能力を推測できないようにしたいな。）

無粋な名前はさすがに嫌だが、できるだけ覚えやすく、簡単な漢字のものが良い。そうでない、飛優が忘れてしまう。

（うーん、二月生まれだから……誕生石は紫水晶、星座は水瓶座か魚座、花ならば梅か？）
星座は祖父に誕生日を聞かなければわからないため、却下だ。梅は菅原道真との関わりが深い、避けた方がいいだろう。

（消去法で、紫水晶からとって紫水？）

紫水。簡単な漢字で覚えやすい。条件はしつかりと満たしている。

（読む分には良いのだが、口に出すととなると、少し言いがらましいな。）

そもそも、紫色の水なんて、飛優の術式とはまるで関係がない。

（目の色とかどうだ？過去視を使用した後の目の色などは、かなり綺麗だと思うのだが。）

深碧^{しんぺき}

（うん、良いのではないか？）

術式の名前は深碧で決定だ。

*

「飛優様!!」

「ね、もういいでしょう？先程の着物で充分でしょう？」

「いいえ！飛優様！こちらのお着物もお召しになってからお決めになってくださいませ！」

目の前には三枚の着物。あまり派手なものを好まない飛優に合わせて、華美なものはないが、繊細な刺繍が施されてあるものばかりで、一目で上等なものだとわかる。

「はい。」

多恵さんが諦めてくれそうにないのをみて、飛優はそつと溜息をついた。

会合があるのはこれから三日後である。会場へは、関門海峡の新関門トンネルを通る

新幹線に乗って向かうらしい。ちなみに、和田さんと多恵さんも、ともに向かうそうだが、着物の着付けなどがあるかららしい。

「ねー、決まりましたか?」

「はい!やはり、最後にお召しになったものが一番よくお似合いですよ。」

「ありがとうございます。」

しつとりとした紺色にスキの刺繍。秋らしく、美しい着物だ。帯は鳥の子色で、金色の糸で鶴が刺繍されている。

「懐かしいですね。あゆ子様が昔着ていらつしやったお着物を出してきた甲斐がありました。」

「そうだったのですね。」

たしかに新品ではなさそうだが、丁寧に保管されていたことが分かる。

(大切に着よう。)

17 会合

島根に着いた。

これから、予約していた宿に向かい、そこで身支度をして、会合の開かれる建物へと向かうらしい。飛優は、多恵さんに髪を結って、髪飾りをいくつかつけてもらい、着物を着付けてもらった。白い足袋を履き、黒い巻に臙脂色の鼻緒の草履を履いて、飛優の身支度は完了だ。ほとんど多恵さんの仕事である。

*

会合は、御三家が持ち回りで行うらしい。毎年開催されるのだが、今年は五条家が主催するようだ。五条家と犬猿の仲の禪院家からの参加者は禪院家当主の禪院直毘人と、禪院扇のみだ。加茂家は五条家と禪院家の争いに関して高みの見物をしているため、跡取りも分家も連れてきている。古賀家はどこの分家でもないが、加茂家と仲が良かったため、加茂家の分家の近くに席を用意されていた。

席の配置は入り口から遠い方が上座なのだろう。そうすると、御三家の力関係は、（五条家は主催側のため除く）加茂〱禪院となる。もしかしたら、五条家と禪院家の仲も関係しているのかもしれないが。

(静かだなあ。)

広間は厳かな雰囲気だった。各家の間と正面には御簾が下げられており、薄暗いのも相まって、向かいに居る人達の顔はよく見えない。ちなみに、向かいの席とは、三、四メートルくらい離れている。

事前に祖父に言われていた通り、飛優は祖父の斜め後ろに置かれた座布団に座った。三十分以上そうしてじっとしていただろうか。参加者が全員着席して、しばらくすると、張り詰めた空気を破るように、五条家当主が声を上げた。

「これより、今年度の会合を開始いたします。まずは、今年の呪霊の被害から……。」
そこからは、全て今年起こった出来事の報告だった。五条家当主の話に対して、各家の当主達が、それぞれ小声で呟いた。

「やはり、五条の六眼が生まれてから……。」

「しかし、去年よりも特級の数は減っておるぞ？」

「未登録の呪詛師ではないか？」

「いや、残穢がないそうな。」

「それはそれは……。」

(すみません、それ、私のせいです。)

特級呪霊と特殊な能力を持つ呪霊は、アリスが見つつけ次第、白雨に回収させている。

隠密状態の式神の残穢は全く残らないため、証拠はないが、飛優は心の中で呪術師達に謝った。しかし、後悔は全くしていないため、これからも続けるつもりである。たちが悪い。

(それにしても……。)

会合で話している内容を意識すると、

『今年はこちらなヤバいことがあったんだけど、どうしようなんか良い案ある人いる?』

『え、マジヤバい。つんだらマジびえん。萎える。つか、それってドコ情報? マジ初耳なんだけど、ウケる。』

の繰り返しで、誰も具体的な案を出さない。

(まあ、ここで自分の意見を言えば、間違いなく『じゃあ、この仕事、君に任せるね』という流れになるから、誰も言わないのだろうなあ。)

飛優だって、もちろん嫌だ。それに、祖父はピクリとも反応していない。

(古賀家には関係ない話ばかりなものな。)

ぼんやりと、当主達の会話を聞き流す。会合は一日中あるらしいが、このまま、無言でいれば問題無さそうだ。

(……しかし、五条悟は参加していないようだな? アリスが調べた情報では参加する予

定だつたはずなのだが……。

暇を持て余しているため、隠密状態の白雨を動かして遊んでいると、遠くからドタバタした足音と、「悟様ー!!」「いけません!!」だのと若い女が叫ぶ声が聞こえてきた。

(……嫌な予感がする。)

スパアン!と襖が乱暴に開かれた。

キラキラと宝石のように輝く六眼にフワリとした雪のように真つ白な髪……紛うことなく、五条悟ご本人である。

(ええ……。)

関わりたくない。

「……どうした、悟?」

五条家当主が冷たい声を出した。

(うわー……。)

おそらく、参加させるつもりではあったのだろう。しかしながら、見ての通り作法を全く無視している。

(さすがに、あのような状態の子供を、大事な会議に参加させるわけにはいかんだろうな。)

五条悟はすぐに女の使用人に抱えられて広間から退出した。「失礼いたしました。」と

言つて使用人が襖を閉めた後、気まずい空気が漂つた。

「……なにぶん、幼い子供ですから、至らぬところがございましょう。誠に失礼いたしました。」

五条家の当主が頭を下げた。しかし、禪院扇がこれに対して、鬼の首を取つたような顔をして口を開いた。

「ふん、古賀の幼な子は五条のよりも二つ下と聞いたが、最初から行儀良く席について静かにしておるぞ?」

(おい、こちらを巻き込むでない!)

顔には出していないが、飛優は心の中で禪院扇をなじつた。飛優がいなければ、このようなことにはならなかつたのかもしれないが、心底関わりたくない。禪院直毘人が、こちらをみて、祖父に向かつて話しかけた。

「のう、誠一郎、どう思う?」

祖父はしばらく黙つてから答えた。

「はあ、しかし、この子はどうにも内気で……身内以外とはなかなか話したがらないのです。親としては、もう少しお転婆になつてくれた方が安心するのですが。」

「まあ、無い物ねだりというやつだな。どこも子供には苦勞するものだ。」

直毘人がそう言つて話を締めくくつた。

(まあ、ここでやり合っても五条の方が有利なのだから、妥当といえれば妥当だな。)
飛優はそつと安堵の溜息をもらした。

18 会合2

会合は一日中行われる。一応、合間に、昼休憩として一時間ほど時間を設けられてはいるが、それでもほとんど休みなしに一日中話し続けるのだ。ちなみに、昼休憩の際には食事を主催側が用意してくれる。

(美味しいなあ。)

精進料理のようなお膳だった。良い出汁を使っているのだろう。あっさりとした薄味だが、味気なさを全く感じさせない。飛優は作法通りに、しかし、素早く料理を口に運んだ。

出されたものを全て食べ終えた飛優は、祖父に式神を出しても良いか尋ねた。許可が出たため、飛優は、影月を子犬くらの大きさにして、膝に乗せた。普段は乗り物として使っているため、必然的に影月の体は大きくなるのだが、今回はぬいぐるみ的な癒しが欲しいため、子犬サイズだ。

(あー、大きい狼も格好良いから好きだけど、小さい狼も可愛くて良いなあ。)

ふわふわの黒い毛皮をたっぷりと堪能した飛優の顔はすっかり緩んでいる。

「飛優、先程お前のことを内気と言ったことは覚えておるか？」

祖父が、飛優に向かって話しかけた。広間にいるのは、食事が終わった後、知人と話していたり連れてきた者と話したりしている人ばかりだ。そのため、飛優たちの会話も周囲の音に溶け込んであまり目立たない。

「はい。」

飛優は答えた。祖父は飛優の目を見て、それから飛優にこのように話した。

「これから、御三家の方々に挨拶をしに向かう。挨拶は作法通りにしろ。しかし、もし、話しかけられたら、怯えた振りをして私の後ろに隠れるか、私を見なさい。」

「なぜですか？」

「内気というのに信憑性を持たせるためと、私が指示をしやすくするためだ。」

「分かりました。」

「影月はしまいなさい。」

「はい。」

祖父は話し終わると、立ち上がり、飛優を連れて御三家の席へと向かった。最初は主催の五条家だ。

「五条の当主様、本日はどうもお招きいただき、ありがとうございます。」

既に、何人も対応しているであろう五条の当主は、少しも疲れた様子を見せない。さすがは、御三家の当主だ。

「ああ、古賀の当主。こちらこそ、遠方からよくお越しくださった。……そちらは噂の？」

「はい、飛優と申します。……飛優、挨拶を下さい。」

「お初にお目にかかります。飛優と申します。どうぞよろしくお願い致します。」

「ほお、内気とはいいが、利発そうな子だ。羨ましいよ。……年はいくつかね？」

当主が飛優に話しかけた。飛優は怯えたような顔をして、祖父の顔を見上げた。

「飛優、お答え下さい。」

祖父がたしなめるように飛優に言った。

「はい……一歳でございます。」

か細い声でそう答えると、飛優は当主の目を見た。そして、不自然でないように、しかし素早く視線を逸らして、また祖父を見上げた。

「なるほど、たしかに内気なようですね。……どうでしょう、悟の許婚には……。」

（絶対に嫌だ。）

上層部と率先して敵対する（予定の）奴に嫁ぐなんて、命がいくらあっても足りない。飛優が、おっとりとした微笑んだ顔をしてそんなことを考えていると、祖父が当主の問いに答えた。

「誠に残念ですが、飛優は古賀の次期当主として育てるつもりですので……。」

「ああ、そうでしたか。いやはや、このようにしつかりとした子が悟についてくれれば安心だったのですが。それは残念です。」

（社交辞令だろうが、冷や汗ものだ。）

挨拶も終わったため、作法通りに退出しようとしたとき、ドタバタと慌しい音が聞こえてきた。

（また、五条悟か？）

飛優はできればそうでないと思いながら、祖父の後に続いて退出の礼をしようとした。音は、だんだんと近づいてくる。それに比例して、五条家当主の顔色は悪くなる。

（……確定だな。）

さっさと退散して、加茂家と禪院家に挨拶をしに行こう。関わりたくない飛優は心待ち早く礼を済ませようとした。少し遠くから襖を開けた音とこちらに向かってくる足音がする。

飛優は礼を済ませて祖父とともに五条家当主の前から去ろうとした。あとほんの少しで退出できると飛優が安心したその瞬間、飛優の肩を誰かが掴んだ。

「なあ、お前。」

誰か、なんて分かりきっている。飛優は助けを求めて祖父の目を見た。祖父も固まっ

ている。そりやそうだ。こんなこと想定しているわけがない。

飛優は仕方なく、五条悟の目を見た。

「面白い目じゃん。」

(……過去視のことか?)

沈黙したままだと、さすがに失礼だ。かといって、どう答えれば正解なのかも皆目検討がつかない。飛優はか細い声で答えた。

「……そうですか。それはよかったですね。」

「な、ソレ、何が出来るの?」

「……昔のことが見えます。」

「へー、俺のは目と術式は別だけど、お前のはそれで一つなんだ。」

「……そうですね。」

できるだけ怯えた顔をして、話しかけられるたびに祖父の顔を伺って祖父の後ろに隠れようとする素振りを見せているのだが、お構いなしに話しかけてくる。

「いいね!面白い!……他には、式神と道具と結界?見せて!」

「……お祖父様、構いませんか?」

仕方がないので、飛優が祖父に問いかけると、祖父は渋い顔をして五条家当主の方を見た。当主は苦笑して、祖父に言った。

「構わないよ。すまないね、うちのが。」

「いえ……飛優、出しなさい。」

「はー。」

白雨の隠密を解く。

影月でも良かったが、白雨の方が見栄えするだろう。白雨を出して、自身の体に巻きつけた飛優に五条悟がキラキラとした目を向けた。

「へー！近づくだけで呪霊を祓えるんだ！すごいな！ま、俺の方が強いけどー！」

「……そうですか。それはよかったですね。」

先程から、肯定するようできて曖昧な言葉しか口にしていないのだが、五条悟は楽しいのだろうか？もしかすると、同じ年頃の子供が普段側にいないから、少し興奮しているのかもしれない。キラキラと青い目が輝き、頬が上気しているのが薄暗い中でもよく分かり、可愛いと飛優は心の中でつぶやいた。

「ちよつと待ってて！」

そう言うと、五条悟は駆け出した。

（え……。）

あつけにとられて飛優が固まっていると、三分もしない内に五条悟が手に何かを持って戻ってきた。

「手、出して！」

「え……。」

どうするのが正解なのか。祖父を見上げて判断を仰ぐ。

「受け取りなさい。」

「はい。」

手をお腕のようにして前に出した。五条悟が握っていたものがそこに乗せられる。

「キヤー!!」

側に控えていた使用人の叫び声が響いた。飛優の手の中にはかなり立派な大きさの雨蛙があった。ニユルニユルと飛優の手の中から逃れようとしてもがいている。受け取ってすぐに、逃げないようにしっかりと掴んだお陰で、この蛙が広間を跳び回る羽目にはならなかったが、当然、五条家当主の顔色は真っ青である。

（着物を汚さずに済んでよかったなー。）

現実逃避するために、そんなことを心の中でつぶやいた。大人たちが後ろで慌てふためいているのを感じた。

「見せてくれたお礼！やるよ！」

（でしようね。）

普通の雨蛙の五倍くらいはあるだろう。飛優の手からはみ出るくらいだ。男の子に

とってはたしかに宝物に違いない。女の子にとつては心底欲しくないものだろうが。普通の女の子であれば、トラウマになってもおかしくない出来事だろう。まあ、飛優の中身は枯れた百越えのお婆さんであるため、特に何も感じないが。

「ありがとうございます。とても大きくて、美しい瞳をした蛙ですね。どこことなく、気品のようなものが感じられます。私にはとても過分なものですから、見せていただけただけで充分でございます。」

とりあえず、そう言つて、蛙を五条悟に向けた。

「そっか！」

そう言つて、パツと花が咲いたような笑みを浮かべると、五条悟は蛙を受け取つて、駆けていった。

取り残された者達は皆、呆然として固まっている。飛優は祖父に向かってこう言つた。

「お祖父様、手を洗いたいです。」

雨蛙の粘液には毒があり、触つたあとの手で目を触ると失明する恐れがある。それに、汚れた手で着物を触りたくない。

飛優の要望通り、飛優と祖父はすぐに手洗い場に通された。飛優はそこで念入りに手を洗つた。

19 会合3

加茂家と禪院家への挨拶は、五条悟が乱入してくることもなく、無事に終わった。飛優は祖父とともに、席に戻った。会合はあと十分ぐらいで再開される。

「飛優、大丈夫か？」

「何がですか、お祖父様？」

祖父が飛優の顔を伺っている。一体どうしたというのだろう。

「蛙を……」

「ああ、蛙はよく庭で見ますから、平気ですよ。」

「そうか、体調が悪くなればすぐに言え。」

もしも、あれがムカデやゲジゲジやクモやゴキブリなどであれば、飛優も多少は取り乱したし、境界を張って拒んだだろう。飛優にだって苦手なものはある。

しかし、蛙は水辺の生き物であるため、飛優からすると、嫌悪するよりもむしろ可愛がるべき存在だ。まあ、毒があるため、触ったあとは必ず手を洗うが。

(それに、悪気はなかったのだろうからな。)

会合が再開したことを伝える五条家当主の声が広間に響いた。それを聞きながら、飛

優は五条悟のことを考えていた。

五条悟から向けられていたのは純粹な好奇心だと飛優は認識している。人に対しての感情というよりは、目新しい玩具に向けるものに近いが、たしかに好意的な感情だった。

(まー、無神経といわれれば否定はできないが、この年頃の子供なんて皆こんなものだろう。)

原作の彼も子供のような人だったな、と飛優はふと思った。甘いものが好きでお酒が飲めない。好みがはつきりとしていて、嫌いなものに対して取り繕わない。気分屋で、周りを常に振り回している。

(……そう振舞っているだけなのかもしれないし、原作で感じた印象そのままだと決めつけるのはよくない。)

本に書いてあるような上辺の情報だけで、自分の為人を決めつけられるのは、誰だつて不愉快だろう。

自分のことを完璧に理解することだつても難しいのに、他人のことなど、尚更分かるわけがない。

当たり前のことだが、人はそれぞれ皆違う。そしてもちろん、認識しているものもそれぞれ異なるのだ。子供と大人、裕福かそうでないか……他にも色々あるだろうが、自

分と全く同じ視界をもつ他人なんて存在しない。

その上で、理解できないものを拒絶するのではなく、できるだけ理解しようと努力することが、人間関係を構築するということなのだ。飛優は考える。

(……なぜ、こんなことを急に考え始めたのだ？……暇だからか。)

会合は、相変わらず老人たちが駄弁っているだけで、座って話を聞くふりをしている。飛優はとて退屈していた。隠密状態の影月や白雨を動かすのにも大分飽きてきた。

(次回からは、私以外の人間が認識することができないような暇つぶしの道具を用意しておくか。隠密状態にすることができて、存在する本の内容を全て読むことができる。本型の神器なんてどうだろうか。隠密状態にして影月たちに持たせれば、他人から分からないように読書することができる。)

新しく作るつもりの神器のことを頭の片隅で考え始めた飛優は、老人たちの話をつまらなさそうに眺めている。五条悟の方に視線を向けた。

昼からは、五条悟も会合に参加させられていた。五条家当主は、息子の素行を隠すのを諦めたらしい。五条悟はあからさまに不満気な顔をして、座布団をいじっていた。

(可愛いなー。)

さすが、自分でグットルッキングガイ G L G と言うだけあって、とても整った顔立ちをしている。成長すれば男らしくなるのだろうか、ふつくと柔らかそうな頬を膨らませているのを見てい

ると、女の子のように思えてくる。

(あとののくらいで終わるのだっただろうか?)

時刻は三時半だ。会合は八時頃に終わるといふ話であったから、あと五時間くらいで済むだろう。

*

会合が終わった。

本来ならば、このあと、懇親会という名の飲み会があるらしいのだが、飛優がいるため、祖父は参加しない。五条家当主や、加茂家当主、禪院家当主に退出の挨拶をして、会場から外へ出た。

「なあー！」

五条悟が飛優に向かって声をかけた。辺りはすっかり暗くなっている。五条家当主の姿は見えない。飛優は祖父を見上げた。

「返事をしなさい。」

促されたため、五条悟に向かって返事をした。

「はい。」

「またな！」

「はい。」

「さよなら！」

「さようなら。」

元気いっぱい手を振る彼の姿が見えなくなるまで、飛優も緩く手を振った。振り終わると、祖父の手を握っていた方の手の力を少し強めた。

「少し、肌寒いですね。」

「そうか、早く宿に帰ろう。」

「甘いものが食べたいです。」

五条悟のことを考えていると、なんだか甘いものが欲しくなった。

「家に帰ったら、多恵さんに作ってもらおうとしよう。今日は疲れただろう。」

そう言うと、祖父は軽々と飛優を抱え上げて宿への道を歩いた。

20 1994年12月

東京都立呪術高等専門学校の近辺を調べていて——といつても、アリスにまとめてもらった亡霊の酒場の情報を眺めていただけだが、気づいたことが一つある

(米花町……?)

飛優の記憶の限りでは、そのような地名は新宿付近には存在しないはずだ。

(……記憶違いか? いや、さすがにあそこら辺の地名は分かる。一時期、通勤するときに使っていた。あー、でも、もう体感で百年は経つし、怪しいものだな。……しかし、あそこまで発展している都市のことを忘れるか?)

飛優は○ヤンプ派だ。サン○ーは高橋○美子の作品しか読んだことがない。結界師のアニメは少し見たが、単行本は持っていない。コナンは、映画の広告を見かけたことがある程度で、全く見たことがない。

つまり、コナンミリしら勢だ。米花町なんて知らない。

(犯罪発生率がすごいなー。)

他と比べて明らかに多い事件の発生率だ。さすが、(まだ生まれていないが)死神の住む町である。

(まー、杉沢第三高校や、浦見東中学校や、八十八橋とかもあるし、もしかすると、原作で後々出てくる場所なのかもしれないな。)

そう考えて納得した飛優は、亡霊の酒場をパタンと閉じて、暖房を切つて、自分の部屋から出た。

世間はすつかりクリスマス一色なのだろう。だが、この家にはそんな文化はない。

(おー、寒。)

廊下に出ると、冷気が床から伝わってくる。足袋を履いているため、幾分かはましだと思ふが、それでもやはり冷たい。

(スリッパが欲しいなー。ま、いいや、……白雨、私の足を結界で覆っておくれ。)

結界とは、本来空間を区切るものだ。空間を区切る境界線を通ることができないものを決めることで、内側にあるものを守る盾として、または内側にあるものを外に出さない檻として利用することができる。

この場合、熱を通さない結界を飛優の足を覆うように張ることになる。

(うん、十分だな。)

音を立てないように、しかし、素早く廊下を走った。多恵さんのいる台所へと向かう。曇ったガラス障子を開けると、多恵さんが料理をしていた。

「おはようございます、多恵さん。」

「あら、おはようございませす、飛優様。一人で起きられて偉いですね。」

「えと……ありがとうございませす。」

頬を赤く染めた飛優は、とりあえず、お礼を言つて多恵さんから目を逸らした。

（恥ずかしい……。まあ、どうせ大人になればこんなことで褒められることもなくなるのだ。というか、どう反応すれば良いのか分からんから、とりあえずお礼をしているのだが、良いのか？これぞ？）

飛優は褒められるのが苦手だ。便利屋時代は、勇者の補佐が主な仕事で、周りの人に注目されることなどほとんどなかった。便利屋として生まれ変わる前……養護教諭として働いていた頃も、それこそ子どもの頃は褒められていたのだろうが、あまり記憶にない。

多恵さんに微笑ましそうに見られてむず痒い気持ちになった飛優は、逃げるようにその場を去ろうとした。部屋から出る直前に、多恵さんに声をかけられた。

「あ、飛優様、御当主様を起こしてきてくださいませ！」

「はい。」

祖父の寝室の前に立つ。飛優がこの家に来て、初めて入った部屋とは別の部屋だ。こちらの部屋は畳が敷いてある。

「失礼します。飛優です。」

返事はない。多分祖父はまだ寝ているのだろう。音を立てないように襖を開けた。
「お祖父様？」

祖父の顔は、普段は眉間にくつきりと浮き出ている皺がなくなり、少し優しそうな顔になっている。飛優は祖父の体を揺すった。

「起きてください、お祖父様。朝ですよー。」

「ん……うぐ……。」

祖父は布団を掴んで抵抗した。

「んー……。どうしよう？」

部屋の暖房はまだ着けていないため、室温はかなり寒い。飛優の体も冷えてきたので、祖父の布団に潜り込んだ。

「お祖父様ー？」

祖父は細身に見えるが、実はかなり筋肉がついているため、体温が高い。

(暖かい……はっ、寝ては駄目だ。起こさなければ！)

「お祖父様ー！起きてくださいー！」

声を大きくして祖父に呼びかける。

祖父はしばらく唸っていたが、すぐに起きた。

「……飛優か。人の布団に入るのはよしなさい。はしたない。」

「んー、でも、寒いー……。」

* 祖父は溜息を吐くと、飛優を抱え上げて部屋から出た。

21 1995年1月 緊急会議

震災の影響が増えることが予測される呪霊について、今後の方針を決めるために緊急会議が開かれた。飛優は今、祖父の邪魔にならないように、自分の部屋にいる。

多恵さんによると、例年の正月はもう少しゆっくりできるらしいのだが、今年は慌ただしい。

今回は、毎年行われることが決まっている会合とは違い、一度に同じ場所に集まることはない。呪符を使用して遠くにいる相手と会話する方法で、話し合いをするのだ。まあ、簡単に言うとりモート会議だ。とても便利である。

多恵さんに聞いたところ、昨年の特ロ事件の際にも開かれていたらしい。

ちなみに、0巻の乙骨憂太の件や渋谷事変のように、呪術関係の大きな事件が起こった場合は直接高専で会議をするらしい。その場合、参加するのは呪術総監部と呼ばれるところに属している者たちだ。

(某宗教のやつか?)

養護教諭をしていた頃の飛優はこの頃まだ生まれていないため、はつきりとは覚えていないが、授業などで聞いたことはある。そのため、だいたい90年代にそのような事

件があったことは覚えていた。

(んー、でも、この前お祖父様の新聞に書かれていた容疑者は別の人だしなあ?)

学生時代の社会の授業を一生懸命思い出す。

そう、たしか、眼鏡をかけていて、ふくよかで、のんびりしていて、髪が特徴的な禿げ方をしている松井先生がこんなことをおっしゃっていた気がする。

『——マスコミと宗教には気を付けようね。』

たしか、この言葉の前に……。

『ええ、知らないの? 嘘でしょ……? あー、みんなまだこのときまだ生まれてないのか……じゃあ知らなくても仕方ないかもね。松本サリン事件つて言うねえ、冤罪未遂事件として有名な事件があるんだよ。みんなのお父さんお母さんも、多分覚えていと思うから今度聞いてみたらいいと思うよー。みんな、マスコミと宗教には気を付けようね。嘘をついていることも結構あるからね。』

(冤罪かよ!!)

なるほど、道理であまり聞き覚えのない名前なわけだ。正直、あの事件は教祖の名前しか覚えていないから、教徒の一人かと思っていた。とても申し訳ない。

(あー、もう少し詳しく覚えていればよかったのだが……。)

学生時代の社会科なんて、テストが終われば記憶の彼方だ。この事件だって、先生の

『マスコミと宗教には気をつけようね。』という言葉が印象に残っていたから覚えていただけである。

(……飛鳥時代から第二次世界大戦が終わる辺りまでは結構覚えているのだけどなあ。) 平成に入ってからからの歴史の記憶がかなり怪しい。単語はぼんやり覚えてはいるが、何年に何が起こったかなんて、さっぱり覚えていない。

(まあ、未来のことなんて知らないのが普通だし、知ったところでどうすることもなし、呪術廻戦の世界である以上、歴史に存在しないはずの事件なども起こるのだろうが。)

それでも、少し気になるため、異空間から学生時代に使っていた教科書を取り出してみた。

(うわ、懐かしいなー。)

ちなみに、養護教諭だった頃の飛優——小夜が使っていたものだ。なぜ今持っているのかというと、当時の小夜は、両親を早くに亡くしており、遺品の引き取り手となるような親戚もいなかったため、迷惑にならないように、勝手に見られたり捨てられたりしないように、便利屋として生まれてからすぐに式神と界渡りを使って自分の遺品を回収したからだ。仕事関係のものや、通帳の類は置いてきたため、持っているのはほとんど個人的なものばかりである。小夜の遺産がどこに相続されたのかは分からないが、お金

のみであれば特に迷惑でもないはずだ。まあ、欲を言えばそのお金でお葬式をして欲しかったが、どのように使うかなんてその人の自由だ。

飛優は歴史の教科書の最後の辺りを捲った。

(あれ、無いぞ?)

阪神淡路大震災は載っていたが、某宗教関係の事件は載っていない。

(あれー? 公民に載っているのかな?)

飛優は公民の教科書を探して、読んだ。しかし、やはりあの事件は載っていなかった。

(んー? 松井先生が話していたのは何だったのだ?)

もしかしたら、授業中の雑談だったのかもしれない。今となつては確かめようのないことだが。

(探し出せなかっただけでどこかに載っているかもしれないが、まあ、そこまで知りたいことでもないしな。)

飛優は取り出した教科書類をしまった。もうじきに昼になる。会議も終わる頃だろう。飛優は、部屋の暖房を消して、部屋から出た。

(……お祖父様に護衛として白雨をつけようか? 聖域を使つたままでは不自然に思われるだろうから、お祖父様が危機的状況に陥らない限り聖域を使わないように命令しておこう。)

飛優は隠密状態の白雨を異空間から取り出して、祖父を護衛するように命じた。（お祖父様には、できれば老衰で亡くなって欲しいからな。）

祖父は一級術師だから、そうそう簡単に死ぬことはないし飛優も分かっている。それでも、やはり飛優は心配だった。便利屋時代、自分が側にいれば守ることができたかもしれないなかつた人達が脳裡に浮かぶ。

世の中には絶対なんてないし、昨日くだらない話をして別れた友人が朝冷たくなっていることもある。保険はあるに越したことはない。

「多恵さん……。」

飛優は台所に立つ多恵さんに声をかけた。

「あら、飛優様、今日のお昼はお蕎麦ですよ。手を洗っていらっしやいませ。」

「はい。」

祖父の姿はまだ見えない。飛優は多恵さんに言われたとおりに手を洗い、部屋に入った。祖父が席についていたのをみて頬が緩んだのが自分でもよくわかる。飛優は祖父の元に駆け寄り、精一杯抱きついた。

「これ、飛優、はしたない。」

口ではそう言つて飛優を嗜めていたが、祖父が飛優を見る目はとても優しくかつた。飛優は無言で、祖父に甘えた。

過去の記憶を思い出して、飛優は少し不安な気持ちだった。大切な人が生きていることをしっかりと実感したかった。

祖父の心音が聞こえた。祖父の体温が伝わってきた。

(……生きている。)

飛優は安堵して、そつと小さな溜息をついた。

22 1997年10月（黒の書の説明）

震災から二年と九ヶ月が経った。今年の会合は加茂家主催で、五条家や禪院家が主催しているときのものよりも大分穏やかである。

「飛優、こっちだ！遅えぞ!!」

現在、自分の手を力いっぱい引つ張る五条悟が、もう少し大人しくしていれば、もっと平和だっただろうにと飛優はぼんやり思った。

なぜ、このようなことになっているのかというと、会場に着いた途端に彼に拉致されたからである。祖父が諦めた顔をして許可を出してしまったため、飛優は今日一日五条悟の遊び相手——玩具である。飛優は着ている着物と全身に汚れを弾く結界を張ったため、汚れる心配はない。

「オイ！なんなんや、一体！放せや!!」

飛優は、五条悟のもう片方の手に引きずられている子どもを見た。今日は禪院直哉も一緒であるため、反応が面白い禪院直哉の方に被害が偏るだろう。

ちなみに、去年の会合で顔を合わせているため、飛優と彼は初対面ではない。

おっとり微笑んで大人たちの話を祖父の少し後ろで聞いている飛優は、彼の目には

「弁えている女」として映ったようで、彼は飛優に対してそこそこ好意的だ。
(お祖父様のところへ帰りたいな。)

五条家と禪院家の仲は原作でも描かれているように、とても険悪である。飛優が初めて参加した会合で、五条悟の態度に関して禪院家の人間が、あからさまに嫌味を口にしたことでもよくわかる。しかし、五条悟はそんなの関係ねえと言わんばかりに禪院直哉で無理矢理遊んでいた。(ちなみに、五条悟本人は禪院直哉と仲良く遊んでいるつもりである。)

五条悟の素行を見て躰を厳しくしたのか、それとも元からきちんと出来ていたのかは飛優には分からないが、禪院直哉は非常に礼儀正しい子どもだった。——なお、この場合の礼儀正しいとはあくまでも作法どおりであるという意味だ。

飛優は彼が、会合に来ている(失礼なことは重々承知だが)才能のない術師のことを見下した目で見ているのを何度か見たことがある。そのため、彼が決して品行方正な優等生ではないことを飛優はよく知っていた。まあ、この年頃の子どもにしては上手く取り繕えている方だろうと飛優は思うが、かなり分かりやすい表情だった。

(それにしても、一年に一度くらいしか会わないというのに、よく覚えているものだ。)
そんなことを飛優がいたらだと考えていると、五条悟の足が急に止まった。手を繋いでいた禪院直哉が体勢を大きく崩して、頭からこけた。顔を思い切り地面に擦っていた

ため、思わず飛優は顔を歪めた。ちなみに飛優は翼・浮遊で浮いたため、こけていない。(うわあ……)

あれは痛い。見ただけでわかる。飛優が、どうすれば良いか分からず沈黙して様子を伺っていると、禪院直哉がムクリと立ち上がった。

案の定、酷い有様である。額と頬を少し切ったようで、そこからジワリと血が滲んでいた。彼の眉は大きく吊り上がり、頬は怒りのために紅潮している。あまりの怒りに言葉が出ないのかもしれない。歯を音が出るほど強く噛み締め、少し潤んで充血し赤くなった目で精一杯五条悟を睨んでいる。

今、禪院直哉の頭の中のほとんどを占めているのは怒りと痛みで、本来ならば、恥も外聞もなく泣き喚きたいのを御三家としてのプライドで押し留めてなんとか保っている状態だった。

「あ、あのー、ハンカチをどうぞ……。」

飛優は白雨に生成させた水をハンカチに浸して禪院直哉に手渡した。飛優の顔を見て少し頭が冷えたのか、彼は大人しくそれを受け取った。

「なんだよ、こけたの？ダッセー、雑魚じゃん。」

ケラケラと心底面白そうに笑う声がある。誰のものかなんてわかりきっている。禪院直哉が転んだ原因にして公式クズ(予定)こと五条悟である。飛優が渡し

たハンカチで顔を拭い、僅かに表情が和らいでいた禪院直哉の顔が一瞬で元通りだ。彼は再び血走った目で五条悟を睨みつけた。

「お前が、急に止まるからやろ!!」

「飛優は転んでねーじゃん。」

「うるさいわ!!」

禪院直哉に怒鳴られた五条悟がパツと花のような笑みを浮かべて飛優に向かって口を開いた。

「飛優、なんか面白いモン出して!」

「……え、えと、白雨、影月、稲葉、出てきておくれ。」

飛優はとりあえず、表に出しても大丈夫な式神を出した。(余談だが、表に出せない式神とは、アリスと亡霊の酒場のことである。)

「無視すんなや!!」

禪院直哉がそう叫ぶが、飛優の式神で遊び始めた五条悟の耳には全く届いていない。

「あの、直哉様……。」

申し訳なさそうに小さな声で飛優が話しかけると、禪院直哉は飛優の方を見た。

「……ああ、飛優ちゃんか。どないしたん?」

「あの、傷をお治しいたしましょうか?」

「……飛優ちゃんはもう反転術式使えるん？」

「はー。」

術式でも治療はできるが、術式の能力を詐称しているため、飛優は反転術式も使えるように練習していた。ちなみに、飛優が反転術式を使うときの感覚を言葉にするとしたら、呪力を強めに放出してそれを少し捻るようにしたあと、針の穴から糸を通すようにしてスツと呪力をその捻った呪力に引っかけて引っ張り出すことで正の呪力を作り出して、患部にそれを流し込む感じだ。言葉にすると難しいし、感覚を掴むまでが大変だったが、一度感覚を掴めばかなり簡単な技術だった。飛優は慣れるために山の生き物に対して何度も使っているので、失敗することはまずない。何か別のことをしながらでも完璧に出来るくらいに手慣れていた。

「ほな、お願いするわ。」

「はー。」

飛優が禪院直哉の怪我の治療を終えると、禪院直哉は驚いたような顔をした。

「へえ、ほんまによう出来とるやん。飛優ちゃんすごいなあ」

「いえ……痛いところはございませんか？」

「おん、ないわ。ほんに、飛優ちゃんはええ子やね……どこぞのどなたかとは違って。」

彼はそう言うとギロリと五条悟を睨んだ。

「オイ、悟!!お前のことやぞ!聞いとるんか!」

「え、直哉どうしたの?飛優がなんかしたの?」

「違うわ!お前や!!」

「えー、俺なんかした?」

「したやろが!親父と一緒にあったのを無理矢理連れてきよって!親父も、『遊んでこい』言うて手え放すし……一体何の用や!」

飛優が五条悟に拉致されたときにはもう居たため、どのような経緯で連れ去られたのか疑問に思っていたが、大体飛優と似たような感じのようだ。可哀想に。

「えー、だって会合にいてもつまんねえじゃん。遊ぼうぜ?」

(まあ、一理あるのだが……。)

飛優は暇つぶし用の道具を作って持ってきているため、1995年の会合はそこまで退屈はしていないが、普通の子どもにとって面白いものではないことは確かだろう。祖父も、『五条悟に連れ去られた』といえは全責任を五条家に押し付けることができる状況であることも理由の一つだろうが、退屈な会合に付き合わせるよりは子ども同士で遊ばせてやろうと思ったのだろう。

(心底余計な気遣いだが。)

ちなみに、暇つぶし用に作った神器はこんなものだ。

神器

名前 黒の書（くろのしょ）

容姿 黒い革の装丁で、鳥の翼の形をした銀色の金属の装飾が施されている本。同じ革が使われた、銀色の糸で鳥の羽根の刺繍がされている葉が挟まれている。

呪力量 多い。飛優から供給することも可能。

能力

・ 図書館 : 存在する全ての本の内容を映すことができる。

・ 酒場の窓口 : 亡霊の酒場の情報を映すことができる。

・ 隠密 : 任意に姿を消すことができる。（飛優には無効。）姿を現すときと消すときには黒い煙が出る。

説明 見たいものを選択する手順は、以下の通り。

1. 本の見返しに葉を挟んで本を閉じる。

2. 本の少し上に検索画面とキーボードが浮かぶ。

↓キーボードに見たいものの名前や、関連する単語を打ち込む。（この検索画面とキーボードは本に触れていない者には見えない。※手袋を着用していても手袋越しに触れていれば見える。）

3. エンターキーを押すと、(該当するものがあれば) 検索結果が表示される。

↓見たいものをクリックする。(検索画面に触れればタブレットと同じように操作できる。)

4. 完了。本の内容が変わっている。

本の内容は本に触れていなくても閲覧することが出来る。ただし、この本で映像を見ようとした場合は、本の少し上の検索画面が浮かぶ場所に映像が映り、本に触れていない者は見ることが出来ない。

ちなみに、黒の書なんていう厨二病感溢れる名前は飛優の趣味だ。飛優は軽い厨二病患者である。他人の迷惑にはならないように気をつけているため、無害な厨二病エンジョイ勢である。心の中の口調も過去に罹患した際の名残である。

(1995年の会合では、黒の書を使っていたのだが……。)

去年の会合でも、飛優は禪院直哉と共に五条悟に拉致されたため結局参加していない。聞いたところによると、1995年の会合では禪院直哉一人が五条悟の玩具になったらしい。ちなみに、禪院直哉が初めて会合に参加したのは1995年のことだ。そのため、禪院直哉は一度もまともに会合に参加出来ないのである。可哀想に。

(まあ、どうせ大したことは話されておらんだろうがな。)

サボタージュしても何も問題はない。遠慮なく遊ぼう。

飛優は言い争いをしている二人を眺めながら、黒の書で芥川龍之介の羅生門を読み始めた。

23 ランドセル (白梅の説明)

「飛優、お前が使う鞆の色は何色が良いか？」

1997年の3月くらいのことである。飛優は祖父にこのようなことを言われた。

突然祖父がそのようなことを言ったため、飛優は少し面食らった顔をした。

「鞆ですか？……んー、黒か焦茶か……暗めの紺色か灰色でしょうか？」

飛優は頭の中で鞆を持つ自分を想像した。昔、自分が使っていた鞆のことを思い出しながら、飛優は祖父に答えた。

「赤でなくても良いのか？女の子は皆、赤を使うと思うが。」

「んー、そうですね？私は赤が苦手ですから、出来れば赤は避けたいのですが。」

(大体、鞆が真っ赤だと服に合わせるのが大変だろうに。地味な色が一番使いやすいと思うが。まー、臙脂色っぽい赤ならば良いのかもしれないが。)

赤は派手に見えるため、飛優はあまり好きではない。同じような理由で暖色系の色は大体苦手である。飛優は寒色系やモノトーンが好ましいと感じる。派手でなければ暖色系でも気にならないが、身につける物は、できるだけモノトーンか寒色系のものにしたいと飛優は思う。

「……そうか。」

そのようなことを考えていた飛優は、祖父がこのとき不思議そうな顔をしていたことに全く気づかなかつた。

(ランドセルの話なら初めからそう言ってくれよ。いや、まあ、たしかに鞆だが。)

今、飛優の目の前には黒い色のランドセルがある。

(あー、目立つよなあ……。ありがたいけれど。)

飛優はこのランドセルを飛優に手渡した祖父の顔を思い浮かべた。「ありがとうございます。」と飛優が言ったときの、嬉しそうな表情が飛優の脳裏に浮かぶ。

もう少し後の時代になれば、ランドセルの色は多種多様になり女の子が黒いものを使っている目立たないかもしれない。しかし、飛優の世代では、男の子は黒で女の子は赤というのが主流だ。

(……ま、べつに、赤でなければならぬなんていう決まりもないしな。)

こういうものは、堂々としていれば案外すんなりと受け入れられるのだ。良いじゃないか、黒いランドセル。格好いいぞ。

(牛革製かなー?)

どうも合皮ではなさそうだ。飛優がランドセルの表面を眺めていると、側面に品良く

施された刺繍に目が留まった。黒い革に、薄紅と白の糸で小さく梅が描かれている。

（可愛いなー、菅公にあやかっているのかね？……あれ、もしか、オーダーメイドか？）
男の子向けの黒いランドセルに花の刺繍をすることなんてそうそうない。おそらく、特注品だろう。

（……大切に使わないとな。とりあえず、結界を張る神器を作るとしよう。）

これからずっと飛優や白雨が結界を張り続けるわけにもいかないし、結界を張るための神器を作っておいた方が良さだろう。

（ランドセルに付けていても違和感のないように、お守りの形をしたものが良いだろうな。）

神器

名前 白梅（はくばい）

容姿 梅の刺繍が施された黒いお守り

呪力量 多い。飛優から供給することも可能。周囲の蠅頭や、蠅頭未満の呪力の塊を吸収して、純粋な呪力に変換し貯蓄することができる。

能力

・結界 : 飛優の能力と同じ。

説明 取り付けている物、または、所持している人の害になるものを全て弾く結界を常時張る。汚れも弾く。

(よし、ま、こんなものかな。)

飛優は白梅をランドセルに付けた。

(うん、なかなか良い感じだ。違う見た目で同じような機能を持つものを、また今度作ろうかな?)

そんなことを考えながら、飛優は部屋を出た。シンと冷たく静かな廊下を一人でひたひたと歩く。もうすぐ夕食の時間だ。

(来年から小学生かー。)

廊下の中頃にある小窓の外に雪が降っているのを見て、飛優は首をすくめた。

(おー、寒。明日からまた一段と冷え込むなー。)

飛優は祖父と多恵さんがいる部屋から漏れる灯りに向かって少し早めに歩いた。

24 入学式とその後

1998年4月

入学式である。買い揃えた制服を着てランドセルを背負った飛優は指示された教室へと祖父と共に入室した。生徒の席の隣に用意された保護者用の席に座った祖父を飛優は見上げた。

「ランドセルを下ろしたらどうだ？周りの子は皆机の上に置いてるようだ。」

「はい、お祖父様。」

飛優は貫禄のある女教師の話を真面目そうな顔で聞き流した。彼女——大石先生という名前らしい——によると、これから新入生は保護者と別れて出席番号順に並んで講堂に向かうそうだ。

「行つてきます、お祖父様。」

祖父に手を振りながら、飛優は列に並んだ。同級生たちと比べると、飛優は極めて小柄だった。

（背の順だと確実に一番前だなー。ま、慣れてるけれども。小夜もミヤも小柄だったからなー。）

どういいうわけか、飛優の身長は149cmを超えた例がない。そのため、橘小夜であった頃は、高い所にあるものを取る事ができないことが不満だった。しかし、ミヤ・クロムとして生まれて便利屋になってからは空を飛べるようになったため、現在の飛優はそのような悩みとは無縁である。(周囲に人がいるときには使えないが、そういう場合は暇そうな人に頼めば解決する。)

飛優は先生の指示に従って、教室から出た。

*

入学式が終わった。どうでもいい偉い人の話の間、飛優はずっと黒の書を読んでいたため、寝てはいないが話の内容は全くわからない。飛優とは違う、純粋な小学一年生たちのほとんどはキラキラとした瞳で一生涯命話を聞いていた。この子たちの目がいつかは飛優のように無感動なものになるとおもうと、なんとも言えない哀しみを感じる。(それにしても、この子、度胸あるよなあ。)

飛優は、飛優の肩に寄りかかって、気持ちよさそうに眠っている少年を見た。おそらく人生初の式典で、熟睡できるとは将来大物になるに違いない。彼の保護者が顔を赤くしたり青くしたりするのを眺めながら、飛優はそんなことを考えた。

「こら、秀太！起きなさい………本当に、ごめんなさいね、うちの子が………秀太!!？」
「あ、いえ、大丈夫ですから、お気になさらず。」

飛優は女性の謝罪に対して、とりあえず無難な言葉を返した。

母親であろう彼女が焦っているのは、祖父の顔が厳格そうにみえるからというものもあるだろうと飛優は思う。仕立ての良い着物を身につけた、所々に古傷がある目つきの鋭い初老の男性……ヤのつく自由業の首領と言われても納得できるくらい風の風格がある祖父の、孫と思われる少女に自分の息子が迷惑をかけているのだ。そりゃあ、普通なら肝を冷やす。

「本当に申し訳ありません！」

そう言いながら、彼らは家族全員で頭を下げた。

「いえ、大丈夫です、お気になさらず。……飛優、多恵さんがご馳走を作っている。早く帰るぞ。」

祖父はそう彼らに言い、それから飛優に声をかけた。

「はい、お祖父様。」

飛優は彼らに向かって礼をしてから、祖父の後ろについていった。

*

登校初日。

出席番号順に並んで隣の席にいたのだから当たり前かもしれないが、入学式で飛優の肩を枕にして爆睡していた少年が飛優の前の席にいた。

「おはよう！昨日はごめんな！お母さんにめっちゃ怒られたわー。」

「いえ、大丈夫です。」

「な、君、幼稚園にはいなかったよな？どこの幼稚園にいったの？」

田舎の小学校だからだろうか、生徒のほとんどは同じ保育園出身であるらしい。

「いえ、保育園には通っていませんでした。」

「え、そーなの？？保育園って行かなくてもいいの？？」

「え、あー、義務教育ではありませんから絶対に通わなくてはならないものではありませんよ？通わない子も、少数でしょうがいらっしやるはずです。」

「へー、なあ、おまえ、なんか変な喋り方だなー。仕事してるときのお父さんみたい。」

「うーん、嫌ですか？」

「ううん、嫌じゃないけど、普通の喋り方の方が好きー。」

「そー？じゃあそうするねー？」

元々、そこまで丁寧な口調が好きなのではない。前々世と前世では、工作中に口調を変えるのが面倒で全て敬語にしていただけであるし、今世では祖父と初対面のときに使っていた敬語のやめ時がわからずそのままにしていただけである。

「俺ね！風見秀太！おまえは？」

小学校低学年特有の、俺の『お』の方が少し高く強く発音された喋り方が可愛いと飛

優は思った。

「古賀飛優だよ、よろしくねー。」

（とうか、『か』から『こ』までの間に一人もいないのか。）

自分の名前を言いながら、飛優は心の中でそうぼやいた。流石田舎、そもそもクラスメイトが17名で一クラスしかないのである。若者は仕事のある都会に流れてゆくのだ。

*

五時間目が終わった。

今日の授業の内容はほとんど教科書や文房具などの記名である。

おはじきやサイコロや何に使うのかよくわからない棒やカードに玩具の時計や鍵盤ハーモニカやカステネットなど、数が多かったため中々時間がかかった。

「な、今日一緒に遊ぼう！」

「え……。」

休み時間、飛優は他の女の子たちと適当に仲良くなっていたため、秀太に話しかけられることはなかったし、ほとんど彼のことを忘れていた。しかし、彼の方は飛優に話しかける機会を伺っていたらしい。放課後になるとすぐに飛優の机に手をつけて飛優に声をかけてきた。

「だめか？」

「いやー、お祖父様に聞かないとわからないなあー。」

「ぶっ、オジイサマって変なの〜。」

「べつに、良いでしょう、言い間違えたの！……祖父に許可をとってからでないと遊べないよ。一回家に帰らないと心配されるからね。」

「ふーん、家まで着いてって良い？」

（え、怖、此奴、家まで着いてくる気なのか？初対面の人間の？えー……。）

沈黙した飛優に対して秀太は不思議そうな顔をした。

（あー、まあ、小学生の頃の人付き合いの距離感と社会人の人付き合いの距離感とは違うか。）

「んー、いいよ。門の前で待つてくれる？」

「うん！」

ガラリと放課後の教室の扉が開かれた。

「秀太ー、帰るぞー。」

入学式に出席していた、秀太の兄と思われる眼鏡をかけた少年が教室の中に入ってきた。

「え、これから飛優ちゃんと遊ぶ約束したのに！」

「いや、まだ遊べるかはわからないよー？お祖父様が許可してくれるか分からないからね。」

飛優は一応訂正した。秀太の頭の中では決定事項のようであるため、意味はないかもしれないが、せめてもの抵抗だ。

「君は、昨日の……コラ、秀太！だめじゃないか！また迷惑をかけて……ごめんな、秀太が。ほら、秀太も謝れ。」

「いえ、大丈夫ですよ。ただ、祖父に許可を取らなければなりませんから、一度家に帰りたいです。」

「だから、俺が飛優ちゃんちに着いて行って、待ってればすぐに遊べるだろ？」

「うーん、飛優ちゃんはそれで良いのか？」

秀太の兄が飛優に話しかけた。

「ええ、かまいませんよ。」

そう飛優が秀太の兄に返答したとき、教室の扉がまたガラリと音を立てた。

「飛優ちゃん、おうちの人が迎えに来てるよー。いるかなー？」

大石先生と和田さんが教室に入ってきた。大石先生は飛優を見つけるとすぐに教室から出て行った。飛優は和田さんに尋ねた。

「あの、和田さん、今日、友人と一緒に遊ぶ約束をしたのですけれど、お祖父様に許可を

とりたいので、携帯電話を貸していただけますか？」

「かしこまりました、飛優様……はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

和田さんから借りた携帯電話を使って飛優は祖父と話した。条件付きではあったが、案外あっさりと許可は出た。条件といっても、六時までに帰ってくるのと、和田さんの側から離れないことだけである。

「秀太くん、和田さんが一緒だけど大丈夫かな？」

「いーよ、早く遊ぼー！」

「うーん、俺たちも一度家に帰ってお母さんに聞いてこないと……」

「ああ、よかつたら、送りましょうか？」

秀太の兄はしばらく考えていたが、和田さんにこう答えた。

「いえ、大丈夫です。家は近いですから、俺が一度家に行つて母に聞いてきます。」

「わかりました。」

和田さんがそう答えると、秀太の兄は教室から出て行つた。飛優は黒の書を開いて、それを読み始めた。

「ねーねー、何読んでるのー？」

「蟹工船っていう名前の本だよ。」

「カニー？なんか面白そう！」

「……そうかもね。」

和田さんが吹き出した。

「うわ、漢字がいっぱい！飛優ちゃんって頭いいな！」

「べつに、早熟なだけだと思っようよ？」

「ソウジユクってなに？」

「うーん、早く大きくなることかな？」

「えー、飛優ちゃん小さいじゃん！」

「体の話ではなくて、頭の中身のことを指す場合もあると思うよ。」

和田さんが笑いすぎて過呼吸になっている。飛優はそれを白い目で見た。

「てゆうか、飛優ちゃんやっぱり頭いいね！」

「……そうかもね。」

そんな話をしてしばらくすると、秀太の兄が帰ってきた。

「お母さん、いいってき。あ、俺も着いていくことになったんですけど、いいですか？」

秀太の兄は秀太に話しかけてから、和田さんに声をかけた。

「かまいませんよ。」

「えー。」

秀太が不満気な声をあげた。

「なんで、おまえが嫌がるんだよ。仕方ないだろ、お母さんが、〃裕也！秀太が迷惑をかけるようにしつかり見張ってるのよ！〃 って言ったんだから。……ごめんね、飛優ちゃん、こんなのにつき合わせて。」

「いえ、大丈夫です。」

飛優は秀太につき合って、近場の公園で遊んだ。途中、秀太の兄である裕也が顔を青くしたりしていたが、概ね問題は起こらなかった。じつは、飛優は入学式の日に初めて家の敷地外に出たため、この地域のことはほとんど何も知らない。秀太はそんな飛優に對してお兄ちゃんぶりながらいろいろなことを教えてくれた。

遊んでいると時間は早く過ぎるもので、あつという間に五時半だ。そろそろ帰る準備をしたほうが良いだろう。

「バイバイ、飛優ちゃん！また明日！」

「さようなら、また明日。」

飛優は和田さんと手を繋ぎながら歩いた。

「楽しかったですか？」

「はい。」

「それはよかった。飛優様にお友だちができて、私も嬉しいです。」

「……友だち、ですか？」

「ええ、もう友だちでしょう？」

飛優は少しの間口を閉じた。

（……今世初の友人かー。）

「違うんですか？」

和田さんが不思議そうな顔をして飛優を見た。飛優は和田さんに向かって花が咲くように微笑んで言った。

「いえ、お友だちですよ。これからも仲良くしたいです。」

真つ赤になった空を鳥が飛んでいる。飛優は明日学校で秀太と会えるのが楽しみになった。

25 修行？と老人の回想

「飛優、私と追いかけてっこをしよう。」

「……わかりました、お祖父様。」

現在地は山（古賀家の敷地内）である。

小学校に入学してから、祖父が飛優を遊びに誘ってくるが増えた。おそらく、訓練の前の段階の体力作りを目的としたものであるだろう。飛優は術式を使わずに、体力と呪力のみで山中を走った。

（まあ、昔読んだどこぞの二次創作のように、いきなり呪霊の前に放り出されるようなことがなくてよかったな。）

もし、そのようなことがあれば飛優に近づく前に白雨の聖域で白い玉になるため、言い訳を考えるのが面倒だと飛優は思う。

（どこに行こうかなー？）

「追いかけてっこ」と祖父は言っていたが、基本的に祖父が飛優を捕まえることはない。（おそらくだが、）あくまでも、飛優に運動をさせることが目的であるため、飛優の少し後ろを着いてくるだけである。飛優は逃げ足には自信があったのだが、祖父は難な

く着いてきていた。

じつは、飛優は前に祖父と遊んだときに、祖父を撒こうとしたことがある。そのときに、飛優がミヤ・クロムであった頃に暗殺者から習った技術を駆使しても祖父を撒くことはできなかったため、飛優は諦めて祖父と一緒に(?)遊ぶことにしている。

飛優——小夜もミヤも、暗殺をしたことはないが、技術自体は師匠(勇者を支援していた大國お抱えの暗殺者。当時、生きる伝説として裏社会では有名な方だったらしい。)に合格をもらえる程度には習得していた。小学一年生の体とはいえ、気配を消して逃亡くらいはきちんとできているはずである。

そのため、祖父はかなり優秀な呪術師であるらしい。

(ま、そんなことはどうでもいいのだが……)

飛優は目についた木の枝にパツと飛び乗った。

「お祖父様、どこで遊びますか?」

「……お前の好きなどころで良い。」

「そうですか……では、いつもの場所へ向かいましょう。」

「ああ。」

猫のように軽やかに木から木へと飛び移りながら、飛優は蓮華の花が咲いている広場に向かった。

*

初めて飛優を見たとき、つくづく妙な子どもだと思ったことを老人——誠一郎は今でもよく覚えてる。

泣きも笑いもせずじつと無表情で見つめてくる子ども。

誠一郎と、子どもの父親——重吾の会話だけで、誠一郎を自分の祖父であると認識した子ども。

まだ二歳だというのに、術式を使いこなしている子ども。

何もかもが異常であった。

誠一郎が子どもを重吾から買い取ったときも、子どもはまず品定めをするように誠一郎を眺め、それから「まあ、いいか。」とでも言いそうなどうでもよさげな顔をして、誠一郎から目を逸らした。

誠一郎の妻であり、子どもの祖母であるあゆ子の幼い姿をそのまま写しとったような子どもが、舞台の上の人形劇でも観るような冷めた表情で大人たちを見つめていたのがとても印象に残っている。

「飛優。」

「何ですか、お祖父様？」

誠一郎は木の上を走る飛優に声をかけた。飛優はぴたりと足を止め、やや垂れ目気味

の黒い双眸で誠一郎を静かに見下ろした。

「……ああ。」

不思議そうな顔をして、飛優が首を傾げた。

随分と人間らしくなったものだ、と誠一郎は心の中で小さくつぶやいた。初めの頃、取り繕った表情ばかりで何を考えているのかさっぱりわからなかった子どもは、ともに暮らしていくうちに段々と感情を見せるようになった。

おそらく、子どもは警戒心が強いのだろう。本人には自覚がないようだが、知らない人間——良平や春香から隠れたように、慣れない人間に対して常に怯えている。

「飛優、ここに来なさい。」

誠一郎が腕を広げると、飛優はふわりと地面に降りてから、勢いよく誠一郎の腕に飛び込んだ。腕の中で機嫌良さそうに笑っている子どもに向かって、誠一郎はこう言った。

「捕まえた。」

「あ。」

子どもが目を見開いて驚く顔が本当によく似ていた。早世した妻そっくりのこの子に対して、自分が厳しくなれないことは嫌というほどにわかっている。

「ずるいですよ、お祖父様！」

精一杯背伸びをして、誠一郎に抗議する飛優を抱えながら、誠一郎は願った。

(なあ、あゆ子、この子が大人になるまで……それまでは、どうか待っていてくれないか?)

仕方がないわねえ、と微笑みながら言う声が聞こえた気がして、誠一郎は思わず笑った。

春風がゆつくりと優しく、長くなつた飛優の髪を撫でている。そのすぐ近くで蜜蜂が一生懸命に働いていた。

26 1998年6月 父親について 式神の改良

(新時子の能力説明)

現在の時刻は午前三時である。飛優は式神——野上時子の体を使って自身の父親である古賀重吾について亡霊の館を使って調べていた。なぜそのようなことをしているのかと言うと……

『古賀重吾さんのものとみられるご遺体が、先日、東京都米花町のホテルで発見されました。』

警察から祖父にこのような連絡があったからである。ちなみに、祖父は確認のため一日中忙しそうにしていた。しばらくの間、手続きなどで慌ただしくなるだろうから、飛優は祖父の疲労が少しでも回復するようにハグをしようと思う。

(しかしなあ、何となく、死んでいないと思うのだよ。なんだか、部屋の中にいた蚊を取り逃がして見失ったような気持ち悪さを感じる。……あくまでも、勘だけけれど。)

飛優の勘だが、古賀重吾は死んでいない。焼死体であったため、歯型の照合で身元が特定されたらしいが、そんなものはデータ自体を書き換えておけば簡単に偽装することができる。……まあ、勘だけで決めつけるのは愚策であるため、こうして、飛優は式神

の体を使って裏付けをしているのだが。

(……ああ、やはりな。整形手術を受けてから偽の戸籍を作っている。今の名前は佐京賢、天涯孤独の32歳……前科なし、貿易商、……表向きの身分はそんなところで……裏では闇ブローカー……主に取り扱っているのは麻薬と銃火器で、とある犯罪組織の幹部。)

飛優は古賀重吾もとい佐京賢が所属している組織についての情報を目で追った。

(組織の人間は黒を好んで身に纏う……幹部には酒の名前がコードネームとして与えられる……佐京賢のコードネームはコニヤックか。うーん、お酒の名前かあ……洋酒みたいな馴染みのない言葉だと格好良く聞こえるけど、大吟醸とかどぶろくとかいも焼酎とかだと少し格好悪いかもな。ま、そんなことはどうでも良いのだが。)

世界中に根を張っている強大な組織のようで、各国の警察組織からスパイが送り込まれているらしい。スパイ——正確にはNOC——の中には幹部になっている者もいるようだ。

(んー、しかし、警察に存在を知られている時点でもう先がない組織のような気がするが……あ、警察組織の上層部にも例の組織の構成員が潜んでいるのか……厄介だな。……そもそも、佐京は何故偽装死したのだろうな？……えーと、父親……この場合はお祖父様か……との折り合いが悪く、完全に縁を切りたかったから……か。犯罪組織内では有

名な話で、古賀と言う単語を聞いただけで不機嫌になるほど嫌っている。……今回の件も組織の構成員たちの間では既に周知されているのか。……お祖父様は佐京のことを犯罪者とおっしゃっていたが……勘当される主な原因となったのは……これか?……無免許運転のバイクで通行中の老人と接触した事故……老人は病院に搬送直後に死亡……古賀重吾はこの後少年院行きとなっている。警察の記録では少年院を所出してからとの消息は不明となっているが……大体そのあたりの時期に犯罪組織に加入しているようだな。……ま、奴の目論見通り、古賀家との縁はこれで完全に切れる訳だからこちらに不利益は一切ない。

飛優は大きな溜息を吐いた。飛優の本体は自室で眠っているため、身体的な疲労については考えなくても良いが、精神的にとっても疲れた気分になった。収納の異空間内でよい硬さのクッションに向かってゆっくりと倒れた飛優はふと思いついた。

(そういうえば、この式神にも隠密が使えるようにしなければならないな。)

祖父に引き取られてから野上時子を表に出す機会がなかったため、野上時子の能力などを作り変えるのを忘れていたのだ。

(母親の肉体そのままだと、父親に見つかってDNAを調べられる可能性があるためいろいろ面倒だな。……DNAと容姿は別の世界の故人にしておけば調べられたとしても特に問題は起きないだろう。……一応お墓に花と生前好んでいた菓子をお供えした

あと、手を合わせたから崇られることはない……はず。

式神

名前 野上 時子（のがみ ときこ）

容姿 焦茶の短髪 焦茶の瞳

呪力量 : 多め。小夜から供給する事も可能。

能力

・催眠術さいみんじゅつ : 周囲の人間を催眠状態にする。発動は任意。

・幻術げんじゅつ : 触ることの出来ない映像のような物をつくる。映像は写真等にも写る。

・読心術どくしんじゅつ : 周囲の人間の心の中を読む。

・隠密おんみつ : 任意に姿を消すことが出来る。姿を現すときと消すときに白い紙吹雪が出る。

る。（飛優には無効。）

・忘却術オウリキエルト : ハリーポッターに登場する対象の記憶を消すことができる魔法を模倣した能力。杖は不要。

た能力。杖は不要。

・動物もどきアニメーガス（鴉） : ハリーポッターに登場する動物に変身することができる魔法を模倣した能力。杖は不要。

模倣した能力。杖は不要。

(鴉ならどこにいても怪しまれることはないし、頑張れば人語を話すこともできるから便利だ。……もう大分遅いから、寝よう。)

飛優は自分の体に戻ると、目を瞑ったまま心の中で呟いた。

(……奴らがこちらに手を出してこない限りは不干渉で良い。だが、もし手を出してくるようならば……それなりの対応をしなければ。)

そこまで考えたところで睡魔に襲われた飛優の意識は、ゆつくりと泥に沈むように消えていった。

*

五時間目が終わるチャイムが鳴った。入学してしばらく経った今でも風見秀太は相変わらず飽きもせず飛優を遊びに誘っている。秀太と飛優二人のときもあったが、大概他の子と一緒に遊ぶ。

「飛優ちゃん、今日いっしょに遊ぼう！」

「いや、どこにする?」

「神社！」

「わかった、一度帰ってから神社で待ち合わせね。」

「うん!……あ、恵一くん、今日飛優ちゃんと神社で遊ぶんだけど、恵一くんも来る?」

「うん、行く!」

「飛優ちゃん、恵一くんもいっしょでもいい？」

「いーよ、それじゃあ、また後だね。」

そんなやりとりをした後、飛優はランドセルを背負って帰路についた。人目につかないところまで歩くと、飛優はそこから家まで界渡りを使って転移した。家まで歩くと往復一時間くらいかかるため、界渡りがあつてよかつたと飛優は思う。

飛優は、多恵さんに「ただいま帰りました」と言ってから自分の部屋にランドセルを置いて課題を済ませた。そのあと、飛優は多恵さんに秀太君たちと遊んでくることが伝えた。飛優は洋服に着替えてから「いってきます」と多恵さんに言つて家を出た。

小学校入学前、飛優は着物や作務衣などの和服しか持つていなかったのだが、制服を買ったときに洋服も数着買ってもらつたため、飛優は友人と遊びに行くときにはそれぞれを着るようにしている。

もう一度界渡りを使つて、飛優は寂れた場所に転移した。そこから飛優は走つて神社まで向かつた。

「あ、飛優ちゃん！」

「秀太君、何をしているの？」

神社の境内にはまだ秀太しかいなかった。飛優はしゃがんでいる秀太に向かって声をかけた。

「蟻を見たの。」

「そうなんだ。……恵一君はまだ来てないの?」

「あ、恵一くんはね、今日用事があるからだめって恵一くんのお母さんが言ってたよ。」

「そう……それじゃあ何をして遊ぶ?」

「うーん……。」

秀太は首を傾げながらこう言った。

「……ケイドロ?」

「二人でするの?」

「うー、じゃあかくれんぼ!」

「わかった、神社の敷地内からでたら駄目だよ。どちらが先に隠れようか?」

「俺!」

「いーよ。何秒要る?」

「えーつと……百秒!」

「はーい、それじゃあ今から目を瞑って数えるからね。」

「うん!」

秀太が駆け出したのを見てから、飛優は目を瞑って数え始めた。

「じゅう、く、はち、なな、ろく、ご、よん、さん、に、いち、ゼロ……もういいかい

？」

返事はない。風が木を揺らす音がやけに不気味に感じた。

「……探すよー？」

飛優は目を開けた。飛優は辺りを見渡したが、秀太は見当たらなかった。

「聴こえてないのかな？」

神社の敷地はかなり広いため、声が聞こえない距離に隠れた可能性がある。子どもの足は案外素早いいため、ほんの一、二分であったとしてもそのくらい遠くに行くことはできらるだろう。

（仕方がないな、林の方から探すか。）

しばらく林の中を歩くと、秀太が見えた。秀太は神社の階段の後ろでしゃがんでいた。

「みーつけた。……何してるの、秀太君？」

「あ、飛優ちゃん、あの人たち何してるのかな？」

「……秀太君、かくれんぼはどうしたの？」

「あ」

「……忘れてたのだね？」

「……ごめんなさい……。」

「べつに、いや。……あの人たち」とは誰のことかな？」

秀太は後めたような顔をして視線を泳がせて飛優を見たあと、全体的に黒い服装の男たちに向かって指を指した。男たちは鳥居の前に立っていた。かなり距離があるためか、彼らが飛優たちに気づいた様子はなかった。

「こら、秀太君、人に向かって指を指したら駄目だよ？」

「ご、ごめん。でもさ、あの人たちさ、変だよ？」

「うーん、秀太君はどこがおかしいと思ったの？」

(黒服……高専関係者か？白雨の能力のおかげで、長らく私は呪霊を認識したことがないのだが……逆に言えば認識する前に被っているということになるからな。不審に思われても仕方がないだろうな。祖父には白雨の能力であることを伝えてあるが……そもそも残穢が残っていないはずだから、私は客観的に見て無関係だ。)

もしかしたらいたのかも知れない、神社にいた呪霊を祓いにきた呪術師だとしても、隠密を使った状態の式神の残穢は残らないため、飛優が何かをしたという証拠は全くないのである。

そのようなことを心の中でつぶやいている飛優に向かって秀太は自分の考えを話した。

「だってさ、この神社ってほとんど人が来ないし……宮司さんもないし……来るの

はほとんど子どもだけだから、大人のひとが来るのはちよつと不自然だよ。」

「んー……たしかに少し怖い雰囲気の人たちだねえ?」

黒服の男たちは辺りを警戒するように探っており、どこか緊張感のある空気を纏っていた。

(黒……まさか、な。)

飛優の脳裏に昨夜(というよりほとんど今朝)見た情報が浮かんだ。そんな、悪の秘密結社を倒す系の子ども向け番組やRPGゲームのように、敵の情報を得た直後に敵と遭遇するなんてことはあるまいと飛優は思った。思いたかった。だがしかし、現実是非情である。男たちの会話の中に、残念ながら「ゴニヤック」という単語が出て来たし、「古賀誠一郎」、「殺す」などの言葉も聞こえた。

(消す。絶対に消す。自分の名前も分からなくなるまで消す。お祖父様に手を出そうとした時点で慈悲はない。呪詛師は処刑対象?……隠密状態の時子にやらせれば証拠は残らん。調べられたところで『変な薬を使って頭が変になった』と判断されるだけだ。)

「そこに誰がいるのか?」

黒服の男の片方がこちらに気づいた。

「おい、どうしたんだよ、いきなり大声だして。」

「誰かが俺たちの会話を聞いてやがった。」

「マジか?……サツにタレコミされちゃ面倒だ。消すか?」

「ああ。」

茂みをかき分ける音がどんどん近づいてくる。飛優は秀太の手を握り、秀太の目を見
た。

「ひ、飛優ちゃん、どうしよう!みつかつちゃう!」

「静かに、落ち着いて、秀太君。……あのね、今から私が言うことを聞いてくれる?」

「……飛優ちゃん?」

「ね、秀太君?」

「うん。」

来年には世界中で大人気の主張の激しい忍者の漫画の連載が始まるはずであるため、
最悪全部忍者のせいにしてしまえば良いと思つた飛優は秀太に向かって微笑んだ。

「ね、秀太君、目を閉じておくれよ。」

「え、なんで?飛優ちゃん?」

「お願い、ね?」

「え、うん、分かつた。」

飛優は秀太が目を閉じている間に時子を出して、男たちの記憶を消した。飛優はその
まま、声に出さずに佐京の記憶の抹消を時子に命じた。男たちは、飛優が何もしなけれ

ばこのまま祖父の暗殺を実行するだろうから、薬で眠らせたあと、服を剥いて、界渡りを使って東京都内の交番の前に放置して来た。所持していた拳銃などは、使われると困るため使えないように破損させて男たちの手に握らせた。衣類は大阪府内のゴミ捨て場に放置した。残穢も指紋も残していないため、何も問題はない。

これらの行為をおよそ三分で成し遂げた飛優は晴れ晴れとした顔で笑った。

「……飛優ちゃん、もういい?」

「いいよー。」

秀太が目を開けた。

「あれ?おじさんたちは?」

「さあね、刑務所お仕事に行ったのかもよ?」

「そっかあ、……怖かったねえ、あの人たち。」

「そうだね、さ、次は秀太君が鬼だよ。」

「あ、そうだった。じゃ、俺も百数えるから、飛優ちゃん隠れてね!」

「はあい。」

飛優は、隠れやすそうな場所に向かって走った。

その後ろに、青々と茂った木の幹に作られた蜘蛛の巣が、重たそうに水滴を支えているのが見えた。まるで水晶の玉を編み込んだレースのように美しいそれに、まんまとか

か
つ
た
揚
羽
蝶
が
、
巢
の
主
に
捕
ま
つ
た
。

27 1998年7月13日 月曜日 風見家

祖父と付き合いのある呪術師家系の方と今週末に会うことになった。

(どのような方だろうか?)

そんなことを考えながら、飛優はランドセルを学校の机の上に置いた。午前中に使う予定の教材を引き出しの中に入れてあと、教室の後ろにある棚にランドセルを入れた。木製の頑丈そうな棚で、柔らかい色のペンキが塗られているが、所々禿げている。鉛筆で描かれた少し歪んだド○えもんがにっこりと笑っているのを見つけて、飛優は小さく笑った。

「おはよう、飛優ちゃん！」

「ああ、おはようございます、秀太君。」

棚の上に置かれたメダカの水槽を眺めていると秀太が教室に入ってきた。挨拶をかわすと、秀太はニツと笑って飛優に話しかけた。

「ね、飛優ちゃん！昨日の仮面ヤイバー見た？」

「んー、仮面ライ○ー？」

秀太は不思議そうな顔をして飛優を見た。

「えー、飛優ちゃん、仮面〇イダーじゃなくて、仮面ヤイバーだよ！知らないの？ヤイバー？」

「うーん、知らないよー？」

養護教諭として働いていた頃の友人の中に特撮モノがとても好きな女性がいたため、飛優はある程度の知識なら聞いたことがあるのだが、仮面ヤイバーという単語は全く聞いたことがない。

（漫画の世界の中の固有名詞が微妙に違う現象か？）

秀太は疑わしそうに飛優を見た。飛優はそんな秀太の表情をみて苦笑しながら話した。

「んー、私の家にはテレビがないからねえ。」

「え!!? そうなの!!? うそお！」

「本当だよ。」

秀太は目をまんまるに開いて飛優を見た。飛優は秀太の顔を見て笑った。

ちなみに、（主に使用しているのは祖父と和田さんだが）仕用のパソコンはある。ただ単に、祖父が必要を感じていないからテレビを置いていないだけである。飛優は、アニメよりも漫画派であるため特に不自由は感じていない。将来、月額数百円ほどで多種多様なアニメを好きなだけ見ることができると知っているため、

今焦って視聴しなくてもいいと思っっていることも不満に思わない一因だ。ただ、飛優は HUNTEOXHUOTERはできればリアルタイムで観たいと思っっている。飛優は旧版のヒソカが大好きである。新版のヒソカが嫌いなわけではないが、やはり旧版のほうが好きだ。絵も旧版のほうがいいと思う。あくまでも飛優の個人的な好みだが。

（お祖父様にお願ひしてみようかなあ……。）

それに、アプリで見ることができなくてもビデオ屋さんで借りればいいと思っっているため、飛優はそこまで深刻にテレビについて考えていない。

秀太と話しているうちに、教室にいる生徒の数がだいぶ多くなってきた。時計を見るとあと少しで朝の会が始まる時間だったため、飛優は秀太に席に着くように促した。席に座ってから、秀太は飛優に対してこう言った。

「じゃあさ、今日うちにおいでよ！ヤイバーの録画してあるから一緒に見よう！」

「え……あ、うん、多恵さんに聞いてみる。」

秀太が嬉しそうに笑った。

「じゃ、学校が終わったらいつもの神社で待ち合わせね！」

「はあい。」

大石先生が教室に入ってきた。先生の話聞きながら、飛優は多恵さんになんと言おうか考えた。

*

『あらまあ！お友達の家におじやまなさるのですか！それでしたら、このお菓子を持って行ってくださいまし！きちんとご挨拶なさいませね、飛優様。いつてらつしやいませ！』

普段よりも急いで宿題を終わらせて、多恵さんのところに向かった飛優はそんなことを言われながら手土産を持たされて玄関の外に放り出された。

（怒涛だったな……。）

飛優は界渡りを使って人気がない場所まで転移したあと、神社に向かった。秀太はただ来ていないようだ。去年のものだと思われる落ち葉が浮いた手水舎を使う気にはなれなかったため、飛優は白雨に水を出させて手と口を濯ぎ、神社に手を合わせた。

（なんとというか、寂しいものだ。）

老朽化はしているものの、造り自体はかなり立派なものだ。昔はそこそこ参拝する者もいただろうに、今はすっかり寂れている神社に、飛優はどこか哀しい気持ちになった。（今度、掃除をしようかね。）

できれば、手水舎を使える状態にしたい。あそこが使えるととても便利だ。

「飛優ちゃん！」

秀太が走ってきた。秀太の兄の裕也も一緒だった。

「わーい！」

秀太が飛優に飛びついた。裕也が慌てて秀太を飛優から引き離れた。

「しゅ、秀太！ごめんね、飛優ちゃん。こら、秀太、飛優ちゃんみたいな大人しい子にそんな乱暴なことしちゃだめだろ。」

「いえ、べつにかまいませんよー。」

どうも、裕也は飛優のことを良家（もしくははやのつくところ）のお嬢様だと思つているようで、秀太が飛優と遊んでいるときはいつも心配そうな顔をしている。正直、当たらずとも遠からずな身分であるため、飛優は否定しない。

「飛優ちゃんも良いって言つてるじゃん。」

「いや、でも、飛優ちゃんに悪いだろ？」

裕也は飛優をちらりと見て、秀太を諫めた。

「はあーい……あ、飛優ちゃん！早く行こう！」

「んー、わかつたー。」

秀太に手を握られた手を握り返した飛優は、秀太に引つ張られるままに走った。

「秀太、どこに行くんだ？」

「え、家だけど？」

「え、ウチ？？聞いてないし、母さんも困るだろう？どうするんだよ？」

「えー、べつにいいじゃん！」

「よくないよ！……とりあえず、一度母さんに聞いてくるから。……ここで待つてるんだよ！」

小学三年生ともなると、随分としつかりしてくるものだ。裕也は一人で風見家まで走っていった。飛優と秀太は神社まで戻って、裕也を待った。

「んー、なんとなくそんな気はしていたけど、お母さんに言っただけなんだねえ。」

「えー、必要ないじゃん。俺らが遊ぶだけだから。」

「それでも、いろいろ用意とかあるから、今度からきちんとお母さんに言わないと駄目だよ。」

秀太は不満そうに頬を膨らませた。飛優が指で頬を軽く突くと、フシユーと空気が抜けた。

（可愛いー。）

しばらく秀太の頬で遊んでいると、裕也が戻ってきた。

「母さん、良いってき。ジュースとアイス買ってきてって言ってたから、一緒に行くよ。お金ももらってるから。」

「はあーい。」

「あ、飛優ちゃんはどうしようか？」

神社で待っているよりも、秀太たちに着いて行つたほうが効率的だ。飛優は裕也に、自分も着いていく旨を伝えた。

まだ、そこまで暑くはないが、三人とも半袖だ。アスファルトで舗装された道路を、飛優は秀太と手を繋いで歩いた。秀太は反対側の手を裕也と繋いでいた。八月辺りでは忌々しく感じる蝉の声も、このくらいの気温であれば、いかにも夏らしく好ましいと感じる。

十分ほど歩くと、スーパーに着いた。

(そういえば、初めてスーパーに来たな。迷子にならないように秀太君たちから離れないようにしよう。)

スーパーでジュースとアイスを買って、風見家に向かった。アイスが溶けてしまわないようにスーパーまでの道よりもやや急ぎ足で歩いた。

五分ほど歩くと、風見家に着いた。少し古びた、黒い瓦の和風建築の家は、元々は秀太の祖父の家だそうだ。ちなみに、秀太の祖父は秀太が生まれる前に事故で亡くなつたらしい。

「んー、私とは正反対だね。」

「なにが？」

「家族構成が。……私にはお祖父様しかないからね。」

「……そうなんだ。」

秀太が心配そうな顔をした。裕也が少し気まずそうに飛優を見た。

「んー、でも、多恵さんと和田さんもいるから寂しくはないよ。鶏や山羊もいるしね。」

「そっか！」

玄関を開けた。秀太の母がいた。飛優は多恵さんから預かったお煎餅の缶を手渡した。

「あ、いらつしやい！飛優ちゃん！」

「お邪魔します、風見さん。……つまらないものですが、皆さんでお召し上がりください。」

「あら、そんな、べつによかったのに、ありがとうね、飛優ちゃん。しっかりしてるわね！」

「ありがとうございます。」

裕也は飛優に対して少し怯えていたように思えたが、秀太の母はそんな様子はなかった。

「さ、上がってちようだい。ゆっくりして行ってね！」

秀太の母はにこやかに飛優を家に迎え入れた。そして、テレビが置いてある部屋に飛優を通すと、裕也からジュースとアイスを受け取って、奥に下がった。

「飛優ちゃん！ヤイバー観よ！」

「んー。」

飛優は秀太が慣れた様子でテレビを操作するのを眺めた。

じつは、飛優はテレビの操作方法をあまり知らない。録画の仕方も分からない。養護教諭をしていた頃の飛優の両親はあまり子どもにテレビを見せたがらない人たちであつたし、飛優も本か漫画があればそれで満足していたため、テレビを観る習慣が全くなかつた。飛優が成人してからも、家にテレビは置いていなかった。アニメはアプリとDVDプレーヤーで観ていたし、ニュースもスマホ一台で事足りていた。掃除に使うため、新聞はとっていたが内容はたまに読むくらいで、興味があつた記事以外は全く覚えていない。

（受信料とは無縁の人生だったなー。）

軽快な音楽とともに、テレビ画面の中に仮面の男が大きく映し出された。

「飛優ちゃん！これがヤイバーだよ！」

「へえー、格好良いねー。」

飛優が昔、友人と観た特撮モノでは、背景や爆発や炎などはCGが多かつたが、まだこの時代は本物の火薬を使つていて、かなり迫力があつた。

（カメラに火がついたらどうなるのだろうか？炎の中からバイクが飛び出してくる構

図って格好良いよなー。」

飛優がそんなことを考えていると、怪人が現れた。主人公の青年がついにヤイバーに変身した。

（おー、ダイナミックだなあ。痛そう。）

プロレスやボクシングを彷彿とさせるような戦い方だ。飛優が子ども時代に観ていた指輪の魔法使いとはまるで違う。空中から現れた大きな手に敵が潰れたりなんてしない。純粋な（？）パンチとキックだ。敵が刃物を持っていたとしてもパンチとキックだ。つよい。

（仮面のバイク乗りなのに過去はそんなに重くないなー。）

飛優が見たことがある仮面のバイク乗りシリーズの初代は、元・敵組織のモルモット兼兵器だ。シリーズに登場するほとんどのライダーの過去は涙なしには語れないのだが、仮面ヤイバーはそこまで重くはないようだ。安心して観ることができる。

「頑張れ！ヤイバー！負けるなー！」

「……君、一度観たことがあるはずだよね？」

秀太の熱狂具合がすごい。隣にいた裕也も呆れた顔をしている。

「秀太、あんまり興奮しすぎるなよ。」

裕也が秀太に言った。秀太は口では頷いていたが、裕也の言葉を全く聞いていないの

は明白だった。

「飛優ちゃん！ヤイバーが勝ったよ!!？」

「んー、すごいねえ。」

ヤイバーが画面の中央でポーズをとった。その背後で敵が爆発した。

「迫力があるねー。」

「カッコいいー!!？」

「すごいねー。」

(戦闘シーンで周囲が着ぐるみと変身スーツの中、一人だけ生身だったお姉さんは、撮影現場では一人で喋っているのか。なんかシユールだな。)

着ぐるみたちの声はあとで声優さんが出している。本当に会話をしているようにみせる主人公の恋人役のお姉さんの演技力がすごい。

戦闘シーンが終わって一件落ち着いたところで、秀太の母がジュースとアイスを持って来た。

「あ、ありがとうございます。」

「いえいえ、たのしい?ごめんなさいね、秀太に付き合わせて。」

「あ、飛優ちゃん、エンディングだよ!」

「いえ、初めて観ますが、とても楽しいです。こちらこそありがとうございます。……格

好良い曲だね、秀太君。」

「そう。それじゃあ、おぼさんは戻るけど、何かあったら呼んでちょうだいね。」

「はい、ありがとうございます。」

秀太の母が部屋から出た。画面の中ではヤイバーが夕日を背負ってバイクを走らせている。その後も、秀太と飛優は何話かヤイバーを観た。

「楽しかったね！飛優ちゃん！」

「うん、面白かった。……あ、秀太君、私もう帰らないといけない時間だから、また明日ね。」

風見家の人たちに挨拶をしてから玄関を出た。飛優は、手を振る秀太に軽く手を振り返してから歩き出した。人気のない場所まで歩くと、飛優は界渡りを使って古賀家の庭に出た。

「ただいま帰りました。」

飛優は玄関の戸をガラリと開けた。多恵さんが洗濯物を運んでいた。

「あら、おかえりなさいませ、飛優様。今日の夕食は鯖の味噌煮ですよ。」

「はい。」

「楽しかったですか？」

「ええ、楽しかったです。」

「それはようございしました。……さ、手を洗ってきてくださいませ。」
「はい。」

洗面所で手を洗いタオルで拭いてから、飛優は台所に向かった。薄暗い廊下を一人歩
きながら、飛優は今日観たヤイバーの内容を思い浮かべた。

(なんだか、特命〇隊が観たくなつたなー。)

この世界にスー〇〇戦隊シリーズがあるのかはわからないが、飛優はなんとなくそう
思った。

28 1998年7月14日 火曜日 寿命三十秒

(リトについての説明)

ゆったりと落ち着いた音色が古賀家の森の中に響いた。洞窟の中に響いている音の
ような、音叉のような、優しい響きの音だ。

その音の源、日当たりの良い場所に座っている着物姿の少女——飛優は、聖樂によつ
て鳥寄せの効果がつけられた音に誘われてきた数羽の小鳥を目で追った。

(これくらい集まればいいだろう。)

飛優は手に持ったオカリナのような見た目の楽器——“リト”——という名前の、飛優が
便利屋をしていた世界の笛——に、先程までとは少し違う方法で息を吹き込んだ。する
と、小鳥が囀るような音がリトから出た。

「ご機嫌いかが？おちびさんたち。」
ナンデ？ シャベッタ？ ナカマ？
 ピー、チチチ、ピピ、と小鳥たちが騒いだ。

余談だが、リトとは龍響笛りゅうきょうてきという笛の一種で、本来は龍を飼育する際に、飼育員が龍
を呼んだり宥めたり、龍に対して指示をしたりするためのものだ。ちなみに、龍響笛を
使用しても、龍語のようなものを発することができるだけで、龍の言葉を理解できるよ

うになるわけではない。そのため、龍の飼育員は教本の内容からの推測と、経験による勘で、気性の荒い龍の要望を即座に理解して迅速に対応しなければならない、とても過酷な職業だった。六十人居たはずの新人が三ヶ月後に三人生きていれば今年も豊作と言われるくらいだ。（大抵、三ヶ月も生き残ったしづとい奴は七十年くらいそのまま勤めている。）もしかしたら呪術師よりも酷いかもしれない職場である。

話を戻そう。飛優は便利屋だった頃、この龍響笛を模して改良した、どのような音でも発することができている神器を作っていた。これさえあれば、人間の体では発音することができない言語も使用することができるため、便利屋時代にとっても重宝していた。原物は魔力を使うため、今飛優が使っているのは魔力の代わりに呪力を使うようにして新しく作ったものだが、便利さはそのままである。

飛優は小鳥たちの話に少し笑って、もう一度小鳥たちに向かってリトを吹いた。

「いや、君たちの言葉は分かるのだけれどね、体は人間だから道具を使わなければ君たちの言葉を話せないのだよ。」

ハナセル？、ナカマ？、
ピーチチ、ピピ

カラ、ダ、ニンゲン？
チチ、チ、ピピピー

「聞きたいことがあるのだけれど、いいかな？」

チ、ピ、ピ、チ

チ、^キピー、^{タイ}ピ、^{コト}ピ

「黒い服の男たちを見たことがあるかい？」

チチ、^クチ、^ロチー、^カピッピ、^スチ、^ミチチ

一羽が首を傾げて囁いた。そのあと、別の一羽が飛優に向かって尋ねた。
チ、^ヒチチ、^ノチチチ、^ニチチチ、^オピー、^イチー、^ニチー

「火の匂い？」

チチ、^イチ、^モチー、^シピ、^スチ、^オチチ、^オチチ、^キチー、^ナチチ、^オチチ

「……バーン！とかパン！みたいな爆発する音かな？」

チツチチチチ、^バチ、^クチチチチチ、^ハピー、^ツチ、^ハチチ、^ツチチ、^ハチー

飛優は黙り込んだ。

（火薬のことだろうか？……銃火器を所持した人間がいたのかな？）

飛優は深呼吸をして、またリトを吹いた。

「彼らは黒い……鳥のような服だったかい？」

ピー、^ソピ、^ウチチ、^ダチチ、^ヨチチ

チチチ、^ニチチ、^ンチチ、^ゲピー、^ンチチ、^ダチチ、^テチチ、^モチチ、^タチチ、^ベチチ、^ルチチ

チ、^コチチ、^スチチ、^タピー、^ベチチ、^ルチチ

チ、^アチチ、^イチチ、^ラチー、^ハピー

チコチワ、チイ、ピキピヲ、ピツ、ピケピテ

〔彼らはどこにいたの?〕

チコチコ、チヨ、ピリ、チモ、チト、チオチク
チア、ピカ、チイ、ピミ、チノ、チキ、チト、ピコ、
チノ、ピノ、チキ、チト、ピノ

〔そうか、教えてくれてありがとうね。これはお礼だよ。〕

飛優は用意していた木の实などを手に乗せた。

チオチレチイ、チゴチハチン!
チチチチ、ピノ

〔今度から、気になることや不自然なことがあつたら私に教えて欲しい。教えてくれたら、またご飯をあげるよ。〕

チワチカ、チカ、ピタ、ピタ

チミ、チナ、チニ、チモ、チイ、チウ、
チノ、チノ、チノ、ピノ

〔ありがとう、よろしくね。〕

〔まあ、アリスに聞いた方が早くて確實だが、人脈……この場合は鳥脈?は作っておいた方が便利だからな。ある程度、依頼と報酬による関係を構築したい。……あと、可愛い。式神とは会話することができなくて少し虚しいからね……。〕

飛優はリトから口を離すと、小鳥に向かつて小さく微笑んだ。そして、小鳥が啄んでいる餌を地面に置くと、その場をゆっくりと立ち去った。

*

(さあて、どうしようかな。)

飛優は自室で大きく伸びをした。秀太と遊んでいるときに遭遇した酔いどれ烏どもは、しばらくの間、古賀家の付近に現れることがなかった。そのため、飛優もほとんど彼らのことを忘れていた。

しかし、今日、また例の組織の人間——飛優は彼らを酔いどれ烏と呼ぶことにしている——を見かけたため、飛優は彼らについて調べていたのだ。

(んー、どうも、狙いは古賀ではないようだから放っておこうか。鳥たちの話とアリスからの情報によると古賀家の近くには寄り付いていないようだしな。)

飛優が酔いどれ烏を見かけたのは、下校時、界渡りで転移するため人気のない場所を歩いていたときのことだ。古賀家よりも小学校の方が近いくらいの場所で、すぐそばに、少し突いたら崩れそうな、屋根に大きな穴が空いて葛に覆われている廃工場があるところだ。飛優はそこで、廃工場の中で仲間を待つ酔いどれ烏の男を見た。

どうも彼は待ち合わせ場所を間違えていたらしく、飛優が物陰に隠れて彼を観察していると、仲間からのものと思われる電話に焦った声で相手に弁明する彼の声が聞こえた。ちなみに、彼がそこから車で隣の市まで移動して仲間と落ち合ったことも確認している。

アリスで調べたところ、酔いどれ鳥どもの目的は、裏切り者——NOCを捕獲して情報を吐かせたあと殺すことらしい。

(はは、NOCなどという単語初めて聞いたぞ。どうやら作業員という意味らしいが、なんと小洒落ている。)

知らない人間を救うほど、飛優は優しい人間ではない。飛優が原作に登場するキャラクターが死なないように取り計らいたいのには、既に「知っていること」だからだ。そして、知っていたのに、何もしなかったから(読者として一方的に)愛着のある人間が死んだということになれば確実に夢見が悪いからだ。

飛優は(自分が罪悪感を感じないために)原作の悲劇は出来るだけ回避するつもりだ。しかし、それも、飛優に余裕があるからすることである。もし、飛優が弱ければ、誰かを救うなど考えもせずに部屋でのんびりとしているはずだ。

飛優は小心者だ。しかし、できないことについて悩むほど飛優は若くはない。中途半端に力があるから、しなければならぬような気になっているだけである。最初からできないことや知らないことについては悩まないし、関与しない。

追われているNOCが知っていることを知っていたとしても、飛優が追われているNOCのことをよく知っているわけではないし、飛優が何もしなくてもNOCが助かる可能性もある。

飛優はランドセルから宿題を出して、机に着いた。そして、プリントを終わらせたあと、鉛筆を弄びながら、飛優はぼんやりと窓を眺めた。

(暇だなー。反転術式の練習も少し飽きてきたし、もう完璧に出来るしなー。)

今日は秀太と遊ぶ約束をしていない。学校から帰ってきてからすぐに着物に着替えたのはそのためだ。祖父は今日、呪術師の仕事で県外に行っているため、家には帰らない予定だ。多恵さんの手伝いでもしようかと、飛優が席を立った瞬間、コツコツと窓を突く音が聞こえた。

「んー?」

飛優が見ると、先ほど会話した小鳥たちのうちの1羽が窓の外にいた。飛優はリトと餌を手にとって窓を開けた。

「どうしたの?」

チツチチ、チン、ピー
アノネ、ニンゲン、イタ

「どんな人?」

餌を啄みながら、小鳥は答えた。

チチ、チ、ピツピ
チマミ、レ、アシ、ケガ

ピー、チチ、ピビ、チ
ヒ、ノ、ニオイ、ソ、クロイ、ヤツ

「その人はどこにいたの?」

チチ、チ、ピモツト、ホシイ

「はい、どうぞ。……それで、どこに？」

小鳥は林檎の切れ端を食べてから、答えた。

チツチ、チチ、ピーイ、チモ

チ、チ、チツピー、チ、ピーイ、チチチオオキナ、クロイ、モン、マエ、トコロ

「そうか、ありがとう。お礼にこれをあげるよ。」

飛優は蜜柑を丸ごと一つ小鳥に与えると、小鳥を窓の外に出した。そして、時計を見ながら、部屋の襖に手をかけた。

夕食までにはまだ時間がある。飛優は多恵さんに庭に出ることを伝えて、門のところまで走った。

*

血の匂いがした。気配を消しながら、血を流している女に近づいた飛優は、少し顔を顰めた。

「ねえ、どうしたのですか、このような場所です？」

返事はない。女はぐったりと横たわり、息も絶え絶えといった様子だ。

（出血が多いな。）

彼女が今まで歩いてきたと思われる道には点々と血痕が残っており、もし、追手がい

れば古賀家に押し寄せてくるだろうことは明白だった。

飛優は白雨に道の血痕を洗い流してくるように命じた。そして、時子に、付近の酔いどれ烏どもの記憶を消してくるように命じた。そのあと、別の白雨に女の傷についた泥を洗うように命じて、それから反転術式を使って女の傷を治した。

(面倒なところで倒れてくれたよ、本当に。)

おそらく、追われているNOCだとは思うが、NOCを追っている組織構成員の可能性もないわけではない。それに、全く無関係の犯罪者の可能性だってある。飛優は女が持っていた拳銃などの武器を全て没収して門の陰に隠した。

「もしもし、大丈夫ですかー?」

「う、ぐ……」

「声は聞こえますか?」

「あッ……」

女が目を開けた。そして、飛優を見ると、女は思わず、といった風に叫んだ。

「子ども?……ツ痛、逃げなさい!私といたら、あなたまで殺されてしまうわ!早く、警察に……!」

「どこか痛いのですか?」

叫んだ内容からおそらくNOCの方だろう。飛優は女に対する警戒を少し緩め

「いって駄目だと(多恵さんが)おっしやっていたのです。」

(……名前をぼかしたり、人間さんと呼ぶことでかなり人外らしさが増したはずだ。括弧の中を口に出さないことでまるで妖怪の里の長老が幼い妖怪に語った教訓のように聞こえる。……どうだ!)

女はしばらく考え込んでいた。女が沈黙するほど、飛優は段々と恥ずかしくなってきたが、開き直って堂々とすることにした。

「そう、そうなのね、わかったわ。……ありがとう、妖精さん、助けてくれて。」

(よ、妖精さん!? 流石にそれは嫌だ。天使と同じくらい嫌だ!というか、着物を着ているというのに妖精!? せめて、妖怪だろ!)

「よ、妖精ではありません!」

「あら、それじゃあ、なあに?」

女の質問に飛優は視線をさまよわせた。代わりの、何か不思議な存在をなかなか思いつかない。妖怪は色々な種類があるから却下だ。悪魔も同じ理由から却下だ。

「う、うー、えーと、その……そう、死神なのですよ! 傷を治した対価に貴様の寿命を三十秒くらい貰ったのです。もつと治して欲しければ、もう三十秒ほど寿命を超越すのです! 他に怪我はありませんか!」

(そんなもの貰っていないが、寿命を貰った方が死神らしくろう! 妖精と天使よりは恥

ずかしくないし、格好良いぞ！完璧だ！」

飛優は自分で黒歴史を作った。死神もかなり恥ずかしい渾名である。まあ、飛優は厨二病だから恥ずかしさを自覚することは一生ないだろうが。

苦し紛れに言った飛優の言葉に、女が大きな声で笑った。そして、飛優に向かってこう言った。

「随分とお安いのね、死神なら魂を寄越せとでも言うのかと思つたわ。」

女が揶揄うように笑った。飛優は少し不満気に抗議した。

「お、お安いと言わないでください！魂を丸ごと取ることができるのは寿命がなくなりかけている人間さんからだけなのですよ！それも、大人の死神にしかできないことなのです！」

（いや、死神の生態なんぞ知らんが。）

「そ、そう……。」

今適当に作つた設定を堂々と説いた飛優は、段々と自分が何故このようなことをしているのか不思議になってきた。時子に命じて女の記憶を消せば問題ないというのに、一生懸命架空の死神の生態について考えているのが心底馬鹿らしいと感じた。

飛優が一人で勝手に落ち込んでみると、女がなぜか緊張した様子で飛優に尋ねた。

「……ねえ、貴方が大人になるのはどのくらい先かしら？」

「……十四万年後ですよ。」

(あつぶない、十四年後と言いかけた。死神らしくしなければ。)

女は沈黙した。妙な空気だ。飛優には上司の一発芸が思いつきり滑ったあとの忘年会の空気そのままに感じられた。とても気まずい。

(さ、流石に無理があるかな? 今からでも遅くない。『……という設定のおままごとなので!』と言つてしまおうか?)

飛優の心配をよそに、しばらくの間黙つて考え込んでいた女は少しがっかりしたように言った。

「そう、残念ね。私の魂を対価に私の協力者になつて欲しかったのだけど。」

「えと、協力者とは何でしょうか?」

女は飛優の質問に対して少し笑みを浮かべた。

「ああ、協力者というのは、私たち公安警察の捜査に協力する人間のことよ。……興味ある?」

飛優に対して、小さな子どもに説明するように優しく語つた女は、話し終わつてからすぐに、いたずらつ子のようにニヤリと笑つた。

「んー、拘束時間によるのです。」

(公安警察が何なのかよくわからないが、まあ、警察の一種だろう。……捜査と言つてい

るし。)

飛優は特に何も考えずにそう答えた。

「あら、死神さんはお忙しいのかしら?」

飛優はたじろいだ。飛優は勉強のできる阿呆である。学校の成績は良くても、根本的なところで頭が悪い人間だ。咄嗟の判断が何よりも苦手である。

「え、う、あー、えと、こ、拘束時間によつて受け取ることができる寿命が変わるのです! 下つ端ですから! ……治療には三秒かかったから3×10で三十秒なのです! ……あ、あと、どのような仕事だとしても、するかしないかは私の気分次第なのです! やりたくない仕事は断りますよ!」

(今考えた設定だけどな! ……本当は、式神さえ使えば同時に複数の仕事をする事ができるから、時間を捻出するくらい、簡単だけど、とりあえず条件はつけておこう。)

女はクスクスと笑うと、ふと何かに気づいた様子で飛優に声をかけた。

「ねえ、あなた、私の拳銃を知らない? さっきまで持つていたんだけど! ……」

「あ! ……ごめんさい、悪い人間さんだったら困りますから、貴方が持つていた怪しい物は全て隠したのです。少し待つていてください、今から取つてきますから。」

女は呆れたような感心したような顔をした。

「用意周到なのねえ。」

「ええ、まあ、最近なにかと物騒ですから。」

女が持っていた武器の類を女に手渡した飛優は、女に頭をさげた。

「あの、私は貴方の契約者となることはできません。私は既に契約済の死神ですから。……今の私の姿は、私の契約者さんのものです。……あ、契約者さんにはきちんと許可をとっていますよ！この姿ですが、公序良俗に反さず人間さんの法律に抵触しないことであればどのようなことをしても構わないそうです。人間さんの姿を借りなければ、死神は契約者さん以外の普通の人間さんには見えないため、姿をお借りました！」
(とりあえず、今、私、素顔だからな。死神≠古賀飛優ということにしておかなければ。)
女は驚いた顔をした。

「あら、じゃあ、それはあなたの本当の顔じゃないのね。……契約者、とは何なのか聞いてもいい？」

「契約者とは、死神と契約した人間のことです。契約すると、死神は契約者の願いを無償で叶えることができるようになります。契約は完全に死神の気分です。死神は自分の好みで契約者を選びます。一柱の死神は一人の人間としか契約することができません。契約していない人間さんに対して何かをした場合、死神は必ず対価をいただく決まりです。」

飛優は、自分に感心した。よくも、ここまで自分に都合の良い出まかせを咄嗟に考え

ついたものだ。

「でも、それだと、契約していない人間でも、対価を払えば願いを叶えてくれるのよね？」
「うっ、えーと、まあ、そうですね。」

寿命などという妙な設定をつけなければよかったと飛優は思った。このままでは只働きさせられそうである。

「じゅ、寿命は、人間さんでいうところの、娯楽や嗜好品のようなものです。人間さんの寿命をいただくことよりも契約者さんの願いを叶えることのほうが、得られる快感が強いいため、契約者さんの願いを叶えるほうが優先ですよ！」

「あら、それじゃあ、あなたの契約者の願いつてなあに？」

「ここで、死神が飛優に従う緩めの設定を伝えておけば、後々の女の質問にも答えやすい。飛優は少し考えて女の問いに答えた。」

「えと、契約者さん——飛優ちゃんのお友だちになることと、飛優ちゃんと一緒にいることです。だから、あまり飛優ちゃんと離れることはできません。飛優ちゃんは、寂しがり屋さんで臆病ですから、できるだけ近くで守りたいです。……私が、飛優ちゃんの側にいたいということも理由の一つですけれど。」

女は得心がいったように頷いた。

「ああ、その歳の子どもなら、まあ、そんなお願いかしらね。」

女はしばらく黙った。そして、飛優に尋ねた。

「ね、その、ひゆうちゃん？が、あなたに私の協力者になるようにお願いしたら、あなたははどうするの？」

「飛優ちゃんが構わないなら良いですよ。でも、飛優ちゃんと飛優ちゃんの家族に圧力をかけて無理矢理従わせたとしたら怒ります。」

女はフツと笑うと、ポケットからメモ帳を出して一枚破り取り、何かを書き込んで飛優に渡した。

「はい、これ。」

「何ですか？」

「私の連絡先よ。ひゆうちゃんに渡してくれる？プライベート用の携帯だから、気が向いたら連絡してちょうだいね。メールアドレスもそこに書いてあるから。……あ、私のことは田村と呼んでくれたらいいわ。」

そう言つて、女——田村は門の前から去ろうとした。

「待つてくださいい！」

「え、どうしたの？」

「怪我は大丈夫なのですか？」

「ああ、肩のところが少し痛いけれど、平気よ。」

「治しますよ……ほら。」

反転術式で田村の肩を治した飛優は、田村に言った。

「対価は寿命十秒ですよ。……行きたい場所があるなら、寿命三十秒で連れて行きます。どこでも構いませんよ。」

田村は飛優の目を見た。

「ねえ、優しい死神ちゃん、あなたの名前はなんていうの？」

「私の名前……えと、飛優ちゃんから呼ばれている名前は夕日です。『ひゆう』を反対にしているから、対になっているとおっしゃっていました。」

田村は、飛優から目を離して、遠くを見るような表情をした。そして、飛優に向かって言った。

「そうね、それじゃあ、夕日ちゃん、東京の、警察庁の前までお願いできる？」

「はい。あ、飛優ちゃんと私のことは誰にも言うてはなりませんよ！秘密です！」

田村は飛優の言葉に頷いた。飛優は田村の手を取って、共に界渡りをした。黒い穴を通り抜けると、すぐに警察庁に着いたことに田村は驚いた顔で飛優を見た。

「それでは、私は飛優ちゃんのところに戻りますから、さようなら。飛優ちゃんが連絡したいと思ったときに連絡しますからね。」

田村はまだ何か言いたい様子だったが、無視して飛優は帰った。

(つ、疲れたあ。)

脳みそを一週間分使った気分だ。飛優はすこし頭が痛くなった。自室の時計を見ると夕食まであと十分だった。

(ま、気が向いたらと言っていたし、そこまで急いで連絡しなくても良いか。) 飛優はそう考えながら、多恵さんがいる台所に向かった。

29 強制参加 嘘の後始末

1998年7月18日

(へー、京都の高専の内部はこんな風になっているのか。まー、基本的な構造はアニメで観た東京の高専と同じみたいだな。あ、でも、忌庫と天元様は東京にしかないのか？どうなのだろう？)

祖父の後ろを歩きながら、目だけをさりげなく動かして建物内を眺めた飛優はそう心の中で呟いた。

今日は土曜日で、飛優はこれから祖父の知人に会う予定だ。

「失礼します。」

祖父が、学長室の戸を静かに開いた。

「おお、誠一郎か。息災だったかの？」

「ええ、まあ、おかげさまで。お久しぶりですね、楽巖寺先生。」

柔らかな長椅子に腰掛けた老人が、部屋に入ってきた祖父と飛優を見た。祖父に倣って飛優も静かに礼をする。

(うわー、ピアスすごいし、眉毛長いなあ。あの着物の中はやはり、アニメで着ていたや

つみたいなロツクなTシャツなのだろうか？」

京都府立呪術高等専門学校の学長、楽巖寺学長である。保守派筆頭で、初登場時は堅苦しい着物姿だったが、戦闘シーンではTシャツ姿となりギターで戦うような、中々趣味が若いご老人だ。保守派筆頭とは言われていたが、一般家系出身者のうえに女性である三輪を連れていたため、禪院家よりも女性に優しいのではないかと飛優は思っている。

（いやー、琵琶か三味線でも弾いていそうな見た目なのに、ギターだものなあ。少し驚いたよねえ、初めて見たとき。）

飛優は、祖父と楽巖寺学長を見ながら心の中でそう思った。すると、楽巖寺学長が祖父の後ろにいた飛優を見た。

「古賀殿、そちらの子どもが会合にも連れて来ておったお主の孫かの？」

飛優は祖父に促されて、楽巖寺学長に挨拶をした。

「はじめまして、古賀飛優です。よろしくおねがいたします。」

そう飛優が言うと、楽巖寺学長はゆっくりと目を細めた。

「ほう、あゆ子殿によく似ておる。利発そうな子だ。」

楽巖寺学長の言葉に、祖父がゆっくりと噛み締めるように笑った。

「恐れ入ります。……本当に、大きくなるたびに妻に似てきておりますよ。目元が特に

よく似ております。」

「そうじゃのう。……儂は、京都で学長をしておる楽嚴寺という者だ。誠一郎とは昔からなにかと気が合つての。何かあれば儂に言え。顔は広いほうじゃからの。」

楽嚴寺学長に言われた言葉に対して飛優は小さく微笑んで礼を言った。

「ありがとうございます。」

挨拶が終わると、祖父と楽嚴寺学長は、二人で仕事についての話や呪術界限で最近起こったことについての噂話を始めた。子どもが割り込んで場の空気を乱すわけにもいかないため、飛優は部屋に用意されていた茶菓子と緑茶を少しずつ食べた。

そうして三十分ほど経った頃、ふと楽嚴寺学長が思い出したように飛優に声をかけた。

「のう、飛優……じゃったかの？お主、楽器は好きか？」

「え……えと、はい。」

（好きな方だな。聖樂のおかげで大体の楽器の使い方はわかるし。）

すると、楽嚴寺学長が長椅子から立ち上がった。

「少し席を外してもかまわんかの？」

「ええ、どうぞ。」

祖父にそう断ってから部屋を出た。そのあとすぐに隣の部屋の奥からゴソゴソと何

かを探す音が聞えた。

(なんだ?)

飛優が不思議に思っていると、年季の入ったギターのソフトケースを持った楽巖寺さんが部屋に戻ってきた。

「ほれ、もう使っておらんものじゃが、音は出るはずだ。」

「え……あ、ありがとうございます。」

飛優は戸惑いながら、楽巖寺さんからギターを受け取った。

(ギターは……弾いたことがないぞ……?)

箏や三味線や篠笛や尺八や鼓など、和楽器の類は大体演奏した経験があるのだが、洋楽器はピアノとトランペットとハーブ以外演奏した経験がない。

(いや、聖楽のおかげで使い方はわかるけれども……え、壊したら申し訳ないから触りたくないのだが?)

飛優は祖父を見た。祖父は困ったような顔で楽巖寺学長に言った。

「先生、あまり、貴重な物を子どもに渡すのは……。」

「かまわん、壊されてもよいものだ。まあ、ボロで悪いがな。」

「しかし……。」

「お前さんと話しておる間、退屈じやろうからの。向こうの部屋で遊んでくるとよい。」

「ええ、まあ、わかりました。……行つてまいりますお祖父様。」
おそらく、気を遣われたのだろう。

(なんだか、申し訳ないな。)

飛優は楽蔵寺学長に申し訳なく思ったが、退屈だったのはたしかだ。

(せっかくだから、何か弾いてみようか。)

ケースの中からギターとピックを取り出すと、飛優はゆつくりと、ドレミの順で音を出した。

(ほー、なるほど、こんな感じかあ。体格のせいでも少し弾きにくいが、ま、弾けんことはない。)

とりあえず、大体の弾き方は理解できたため、飛優は、適当に聴いたことがある曲を弾いた。

勢いがあるイントロ。イントロが終わると少し穏やかになり、そこから、激しいサビになる。そしてサビが終わると、静かに囁くような旋律になり、そのままフツと消えるように終わる。

(ん、……あ、音大丈夫かな？この部屋、防音なのかな？)

何も気にせずに遊んでいたが、会話の邪魔にならなかつただろうか？飛優は部屋の入りの口の方に目を向けた。

(んー、扉は閉めていたから、そこまで……ッ!??)

閉めていたはずの扉は開いて、楽巖寺学長と祖父が立っていた。

「あ……あのう、煩かったでしょうか？」

二人は何も言わない。

(え、怖い。もしかして、怒られる?)

飛優は恐る恐る祖父たちの様子を伺った。

「のう、誠一郎。本当に飛優は初めてギターを触ったのじやな？」

「ええ、そのはずですが……飛優、どこでギターを習ったのだ？」

(……あー、そういうことか。)

飛優は少し安堵した。たしかに、ギターを見たこともないような子どもが、いきなり一曲弾けば、まともな感性の人間ならば訝しがるだろう。

(どうやって誤魔化そう……いや、ギターを触ったのが初めてであるのは事実だから、秀太君の家のテレビで見たことがあるということにしよう。CMで一瞬映っていたような気がするし、まるつきり嘘というわけではない。)

「友人の家にお邪魔したときに、見たテレビに映っていました。……見様見真似ですから、おかしな弾き方かもしれませんけれど。」

祖父は納得したようだ。多恵さんから、飛優が秀太の家に行ったことは聞いていたの

だろう。

「あの、お聞き苦しいものをお聞かせして申し訳ございませんでした。」

無言で何かを考えている楽巖寺学長に対して飛優は謝った。楽巖寺学長はカツと目を見開いて、飛優を見た。

「す、すみません！」

飛優は反射的に謝った。目がとても怖かった。

「のう、誠一郎、お主の孫を儂のバンドに入れても構わんな？」

祖父は楽巖寺学長の言葉に困惑した様子で飛優を見た。

「え、はあ、飛優の意思に任せますが……。」

祖父の答えに、楽巖寺学長は飛優の肩をガツと掴んだ。

「飛優、お主、儂のバンドに入らんか？」

目が怖い。飛優としては、これから呪術高専に入学するとしたら確実に京都のほうになるため、学長の機嫌を損ねるような真似はしたくない。

「……………」

か細い声で飛優は楽巖寺学長の言葉に応えた。

*

1998年7月20日 朝

（ま、一応バンドに入ったとは言っても、京都と福岡じゃあ、そう頻繁に参加することはないけどな。）

楽巖寺学長と会ってから二日が経った。半強制的に楽巖寺学長のバンドのメンバーとなった飛優は、自室の窓の外を眺めながら心の中でそうぼやいた。

今日は月曜日だが祝日である。のんびりできるのは良いことだ。

（暇だなー。）

学校の課題は全て終わったため、反転術式の練習くらいしかすることがない。最近の飛優の目標は反転術式と同時にお手玉をできるようになることだ。お手玉をしているときの飛優の反転術式の成功率は大体四割くらいのため、これを十割にしたいのである。ちなみにこれは、敵の攻撃を避けながら反転術式を使えるようにするための、別の作業をしながら反転術式を使う訓練でもある。（飛優の場合は結界の中に閉じこもれば外部からの攻撃を一切受けなくなるため、あまり必要な技術ではないが、使えるに越したことはない。）

ぼんやりとお手玉をしながら、自傷した左手を反転術式で治療していると、コツンと何かが窓に当たった。

（ん、あ……つと、リトと餌を用意しなくては。）

収納の異空間から素早くリトと鳥用の餌を取り出した飛優は窓を開けて小鳥を招き

チ、チピ、チリ

「そう、ありがとうね。お礼に、今日は葡萄の実をあげるよ。」

そう言った後、窓の外に餌を置いた飛優は、小鳥を外に出してから小さく欠伸をした。今日は祖父が家にいるはずだから、小鳥が言っていた人間は祖父に用事がある人かもしれない。

（お祖父様のお客様かなあ？特にそんなことは伝えられていないけれど。女の人かあ……。）

外に出る予定もなかったため、飛優は今着物を着ている。

（まあ、しばらく部屋から出ないほうが良さそうだな。）

お客様と鉢合わせをして気まずい思いをしたくない。飛優は（元の予定と同様に）しばらく自室から出ないことにした。

しかし、部屋の本棚から祖父にもらった古事記の絵本を取り出して、飛優が読み始めようとしたとき、部屋の外から多恵さんが呼ぶ声が聞こえた。

「失礼します、飛優様、お客様がいらしていますよ？」

（私に来客……？）

きよとんと不思議そうな顔をした飛優に、多恵さんが言った。

「なんでも、『夕日ちゃんのことと話がある』とか……。断ろうにも、『田村が来たと伝え

てくれ』の一点張りで……どうしましょうか？」

「お祖父様にはお伝えしたのですか？」

（うわあ……あの人があ。）

多恵さんがゆつくりと被りを振った。

「御当主様は、お客様がいらつしやる前に急用で外に……今、家にいるのは私と飛優様だけですよ。……本当に、困りましたねえ。」

多恵さんが溜息を吐いた。飛優は、多恵さんの着物の袖を小さく引いた。

「夕日ちゃんは私の友人です。お客様は夕日ちゃんのお家の方でしょうか？」

「あら、そうなんですか？それなら、飛優様にお任せしましょう。……お茶とお菓子をお待ちしますね。」

「ありがとうございます。お願いします。」

訪問者が女性ということもあり、多恵さんはそこまで警戒していないようだった。玄関に向かう多恵さんを見ながら、飛優は小さく溜息を吐いた。

（ま、夕日と飛優は別人という設定だからな。面倒なことになった。）

*

お座敷に通された女性——田村は、開口一番にこう言った。

「本当によく似ているわね。……いや、夕日ちゃんがあなたの姿を借りているんだった

かしら。」

あくまで、飛優と夕日は別人であるという設定だ。

「どちら様ですか？……夕日さんの名前を出すなんて。」

（というか、この人、本気で死神タムなんて信じているのか？こんなに騙されやすく、日本警察は大丈夫なのか？）

飛優が死神を自称する前は『妖精さん』などと脳みそに花が咲いていそうな発言をしていたから、元から夢見がちな性格なのかもしれない。……酔いどれ烏どものところに潜入していたことが原因で現実逃避をしやすい頭になってしまった可能性もある。

飛優は夕日として話していたとき、意識して幼くしていた口調を元に戻した。飛優は静かに、しかし、はつきりと田村を問い詰めた。

「あ、いや、夕日ちゃんから何か聞いていない？」

「……拳銃を所持した黒服の女が門の前で倒れていたため、痕跡ごと消したと聞いておられます。……てつきり、あの世に連れていったものと思っておりますが、まさか……。」

「あー、まあ、間違いないけど……うん。」

飛優は胡乱な目で田村を見た。田村はたじろいで居心地悪そうに視線を彷徨させた。

「冗談ですよ。夕日さんから話は伺っております。先週の火曜日でしたね。ご苦勞様で

す。」

流石に、田村が哀れに思えてきた飛優は田村にそう言った。田村が目をまんまるに見開いた。

「え、でも……擲揄ったのね？」

田村が飛優を軽く睨んだ。

「ええ、夕日さんが気に入っていらした方がどのようなお人柄か興味がありましたからね。騙されやすそうな方で、安心しました。」

田村が顔を顰めた。

「なんだか、『優しそう』に含みがありそうで嫌だわ。……はあ、夕日ちゃんはもつと素直だったのに、同じ顔でも全然別人ね。」

「まあ、真面目な話、呪術能カを悪用した場合は死刑ですから、慎重にならざるを得ませんよ。」

呪術規定9条「非術師に対し故意による術式発動による殺害行為を行った呪術師は、呪詛師とみなし、処刑対象とする。」である。

飛優の言葉に、田村が驚いた顔をした。

「ど、どういことワ？」

「……夕日さんは、厳密に言うくと死神ではありません。規定に抵触しないように、不思議

な存在として誤魔化したのでしょね。」

（実際、古賀飛優ではないと誤魔化したのはそんな理由だし。……反転術式くらいならば、非術師相手に使ってもそこまで怒られないと信じたいがな。）

田村が神妙な面持ちになった。飛優は多恵さんが持つてきた和菓子を黒文字で切った。飛優が一口食べ終わると、田村が口を開いた。

「……規則を定めているような組織に所属しているということかしら？」

中々鋭い。わかりやすくヒントを与えたとはいえ、すぐに答えに辿り着くとは優秀だ。

「固有名詞は出せませんが、そのように考えていただいて結構です。」

呪術規定8条「秘密」である。

（一話で、伏黒恵が非術師である虎杖悠仁に特級呪物に関する説明をしているから、そこまで厳しくはない気がするけど、一応、そういう決まりだからね。）

『自転車で歩道を走ったら駄目』くらいの拘束力だと思われる。歩行者がいなければセーフな気がするような感覚だ。

田村が沈黙したため、飛優が続けて話した。

「……本来ならば、夕日さんの存在自体が禁忌ですよ。自立思考が可能なものを無限に作ることができるということは、一人で軍隊を所持できるということでもありませんか

ら。」

（夜蛾学長は、まさにそれで殺されたしね。）

そう言うのと、飛優はお茶を一口飲んだ。少ししてから、田村が飛優に問いかけた。

「ねえ、ということとは、夕日ちゃんはあなたが作ったの？……友人というよりも母親と
いったほうが適切かしら？」

「あら、夕日さんはそこも誤魔化したのですね。……ええ、夕日さんを作ったのは私です。……母親と言ったほうがおそらく正しいです。……このことが周知されれば私は殺されるでしょうから、ここだけの話にさせていただきたいですけれど。」

飛優の言葉に、田村は呆れた顔をした。

「命の恩人を間接的に殺すような真似しないわよ。……ここに来たのだから、夕日ちゃんにお礼を言うのと、連絡先を渡すためだし。」

「……んー？連絡先は以前にもいただいていたと存じますが。」

田村が視線を彷徨わせて気まずそうな顔をした。

「あー、うん、なんというか……今まで事情があつて身分を偽っていたのよ。本当の名前は田村ではないし、この前教えた連絡先は訳あつて使えなくなつたから、改めて自己紹介をして連絡先を渡そうと思つたの。」

（あ、なるほど、NOC——— 工員だったらしいから、その関係か。……警察官は大変だ

なあ。）

「そうですか。夕日さんは、私が起きているときは表に出ることができませんから、私が受け取っておきます。」

「そうなのね。……二重人格のようなものかしら？」

「ええ、まあ、元は違いましたが、今は私の中にいます。……イマジナリーフレンドのようないだと思えますよ。今でも、頭の中では賑やかにしておりますから。」

（そもそも存在しないし。）

田村は優しく笑った。そして、少し顔を引き締めて飛優に言った。

「改めまして、警察庁警備局警備企画課に所属している美谷陽子みたにようこよ。階級は警部補。よろしくね。」

「よろしくお願いたします。」

田村——美谷が持っていた鞆から名刺を取り出して飛優に手渡した。

「……これが私の連絡先。夕日ちゃんにありがとうって伝えておいてくれるかしら？」

「ええ、必ず。……というか、今もこの会話を聞いて照れていますよ。」

そう飛優が言うのと、美谷は笑った。

「そう、それじゃあ、私はもうお暇させていただくわ。」

「はい、また今度。さようなら。」

「さようなら。」

美谷の見送りをした飛優は多恵さんと一緒にお座敷の片付けをした。
縁側の風鈴がチリンと涼しげな音を立てた。

30 あおぞらこども院

1998年11月7日土曜日午前九時。

「はーい、皆さーん！」

淡いピンクのエプロン姿の若い女性が子どもたちに向かって声をかけた。子どもと一括りに言っても、その年齢には大きな開きがある。一番上はおそらく高校生くらいで、一番下はまだ一歳にも満たないくらいだろうか？

「今日一日、一緒に遊ぶことになった古賀飛優ちゃんです。皆さん仲良くしましょうね。」

「はあーい。」

しぶしぶといった様子で子どもたちが返事をした。紺色のワンピースの上に白いカーディガンを羽織った垂れ目の少女——飛優が女性に促されて挨拶をした。

「よろしくお願いいたします。」

飛優はゆっくりと頭を下げた。柔らかそうな黒髪が飛優の肩に落ちた。女性が子どもたちの顔を見回して、大柄な少年に声をかけた。

「サブちゃん、この子のことお願いね。怪我をしないように見ててちょうだい。」
女性はそれだけ言うのと手のかかる乳幼児のほうに向かった。

「へ、へい！」

少年は慌てた様子で返事をした。それから戸惑ったように飛優を見た。

「……あー、えーつと、俺は魚塚三郎だ。サブでいい。」

「わかりました。サブさん。」

飛優がそう言うのと、魚塚は気まずそうなむず痒そうな顔をした。

「あー、いや、『さん』はいらねえ。普通にサブだけでいい。」

そんなことを言われても、飛優には体格差のある少年に向かって呼び捨てをすることができないような度胸がない。

「サブ兄さん……?」

「……あー、まあ、それでいい。……お前のことはなんて呼びや良い?」

「普通に飛優で良いのではありませんか?」

「そう言うわけにはいかねえよ。……お前、ここのスポンサーのどこのお嬢様なんだろう? 失礼のないようにって、昨日から先生たちがうるせえんだよ。」

あおぞらこども院は古賀家が多大な寄付をして成り立っている孤児院である。そのため、ある程度古賀家の融通が効く施設だ。書類上は飛優がかつて在籍していたことに

なっている施設でもある。

飛優が在籍していたことになっている時期にこの施設にいた人間は、それぞれ古賀家が援助している別の施設に移しているため、飛優が本当に施設にいたかどうかを知る人間は施設長の老女のみだ。施設長も、古賀家の寄付金がなくなつては困るため、決して口を割ることはない。

長く続いている術師家系で、それなりに資産家のためか、古賀家はこの施設以外にもさまざまなところに出資をしているようだった。飛優が祖父に聞いたところ、古賀家は表向き古物商を営んでいることになっているらしい。(まあ、一般人に職業を聞かれて『呪術師』と答えるわけにもいかないだろうから妥当なところだろう。) 何故古物商なのかというと、呪物などの買い取りを滞りなく行うためだそうだ。古賀家のある町の隣りに小さな営業所もあり、資格もきちんとして持っているらしい。

「……私も、以前はこの施設にお世話になっていた身ですから。」

飛優がそう言うのと、魚塚は目を見開いた。

「へえ、お前もか。……そういや、先生が言つてたな。俺がここに来る一年前にお金持ちの家に引き取られた子がいるって。あれ、お前のことか。」

「そうかもしれません。」

飛優が今日ここに来たのは、子どもたちに飛優の存在を印象付けるためである。同じ

理由で、飛優はこれから定期的にこの施設に通う予定だ。

飛優は戸籍上、身元が不明の元孤児ということになっている。1992年の2月22日にこの施設の玄関にバスタオルに包まれた状態で捨てられていた赤ん坊という設定だ。その後、田口夫妻と養子縁組をするが、その直後に田口夫妻が交通事故で死亡したため、そのまま1994年まで、あおぞらこども院に在籍していたことになっている。

(2月に産まれたことは確かだが、22日とは……安直すぎないか?)

飛優はそう思うが、まあ、覚えやすくて良いということにしておこう。

「お前も大変だったんだな。」

魚塚はそう言つて飛優の頭をぼんと軽く撫でた。

「まあ、それでも、今、スポンサーのこの娘つてのは変わらねえからなあ……そうだな、

『ひいさん』なんてどうだ?……飛優だし。」

「呼びやすいように呼んでください。」

「それじゃ、ひいさん、これからどうする?」

飛優は部屋の中をぐるりと見渡した。子どもたちのほとんどは外にいるようで、遠くから賑やかな声が聞こえた。部屋の中にいる子どもたちは物珍しそうに、または、疎ましそうに飛優を見ていた。

「本が読みたいです。」

「そうか、本棚は向こうにあるから……ほら。」

魚塚は飛優の手にそっと触れた。壊れ物を扱うように、恐る恐る丁寧に触れているのがよくわかり、飛優は少し申し訳なく思った。

飛優が本を読んでいる間もずっと、魚塚は飛優の側にいた。

「他にやりたいことがあるなら、そちらを優先してください。私はここで本を読んでいますから。」

そう飛優が言うと、魚塚は少し黙った後話し出した。

「いや、ひいさんの側には……なんていうか、化け物が居ねえからな。」

「化け物……?」

「……周りの奴らに言ったら笑われちゃうし、気味が悪いってんで親にも捨てられたから出来るだけ見ねえようにしてるんだが……すまねえな、こんな変な話を聞かせてよ。」

それだけ言うと魚塚は黙った。飛優はじっと魚塚を観察した。

(呪力……たしかにあるな。)

飛優は魚塚の目を見た。

「どのような化け物ですか?」

「……信じてくれるのか?」

「ええ、私は自分の周囲から弾いているため、あまり見ることはありませんけれど。」

「……あの化け物はなんなんだ。」

飛優は悩んだ。

(まあ、これまで呪術規定のことを気にしていたが、そもそも、あそこまで美谷さんに対して神経質になつていた理由には、相手が公的機関に所属している警察官だからというものも含まれている。子ども相手だし、そこまで気にすることはないか。)

飛優は手元の本に視線を落としたまま魚塚の問いに答えた。

「呪霊というそうですよ。……人の害にしかならないものです。今まで触れずに生きてこられたならば、これからも極力そうしたほうが良いでしょうね。」

飛優の言葉に魚塚が唇を噛み締めた。

「……倒す方法はねえのか?」

飛優は再び魚塚の顔を見た。

「……学びたいならば、京都府立呪術高等専門学校へ向かってください。……見えるだけでも十分希少価値があります。」

「……わかった。」

飛優がそれ以上話すつもりがないことが分かったのだろう。魚塚は頷いた。部屋の外にいる子どもたちの声は相変わらず聞こえていたが、しばらく飛優と魚塚の間は静かなままだった。

「なあ」

魚塚が声を出した。

「何ですか？」

「ひいさんも行くのか？その、呪術高等専門学校つてのによ。」

「ええ、おそらく。」

魚塚が言いくそうに口籠もりながら飛優に言った。

「その……どのくらい金がかかるか分かるか？」

「……さあ、どうでしょう。私は存じません。」

（原作に書いてあったのかもしれないが、そんな細かいことなど覚えていない。）

飛優がそう言うと、魚塚が頭を抱えた。

「あ、ー、金がねえんだよなあ。奨学金が貰えるような頭もねえしよ。」

「呪霊を倒すことが出来るのでしたら、そこまでお金に困ることはないと思いますよ。」

「なんでだ？」

「たしか、学生であつても呪霊を倒す仕事ができればお給料が貰えたと思います。」

「本当か？？」

魚塚の目が輝いた。

「……今度学長先生に尋ねてみますね。私も噂話として聞いたことがあるだけですか

ら。」

(……二次創作原作にはのみ有効設定だったらすまん。)

原作にそんな描写があつたかどうか飛優は覚えていない。ただ、支部では一般的だった気がする。

「つつても俺じゃアイツらを倒すことなんて出来ねえから、それで金が入ることがわかつてても無駄だけどな。」

そう言いながら、魚塚がまた落ち込んだ。それを見て、飛優は魚塚に声をかけた。

「今まで呪霊に触ったことはありますか？」

「木の枝で突いてみたことならあるぜ。」

「そうですか。……それでは、呪霊を殺したことはありますか？」

「前に、ちっこい奴を殺そうとしたことはあるが、何回潰しても元通りになつちまうから、逃げた経験しかねえよ。」

魚塚が苦虫を噛み潰したような顔をした。

「蠅頭とはいえ潰せるだけ上出来ですよ。殺すことに忌避感はないようですから、呪力の使い方さえ分かれば十分戦えるでしょう。」

飛優の言葉に魚塚は目を瞬いた。

「呪力……?」

「呪霊は呪力がある者——呪術師にしか見えません。呪霊が見えるのでしたら、貴方も呪力はあると思いますよ。」

「そうなのか……?」

「ええ。」

飛優は目を瞑った。

(どうも術式はないようだから、呪霊と戦うつもりなら呪具が必要だが……まあ、呪術高専に行くつもりがあるなら、呪具を渡してもそこまで問題にならないだろう。)

そう考えてから、飛優は魚塚の顔を見た。

「これも何かのご縁です。今度、呪霊用の武器をお貸ししましょう。」

*

午後六時

飛優は、あおぞらこども院から家に帰ってきた。玄関から入って祖父と多恵さんに入ってから、飛優は学習机に着いた。そして、引き出しから取り出した自由帳のページを一枚切り取り、鉛筆立てに入っていたボールペンで魚塚に渡す呪具について書き留めていった。

(接近戦に慣れていないなら、飛び道具の方が良いのだろうか……。)

魚塚は体格ががっしりとしているため、白兵戦も十分出来そうである。というか、なんとなく喧嘩慣れしていそうだ。

(……付ける能力はどうしようか。あまり、強力すぎるのも良くない。……念のため、呪霊以外は攻撃できないようにしておくか。)

最初から、強力な武器を使うことに慣れると大変だ。初めて使う武器ならば、できるだけ単純なものの方が良いだろう。

(最低限死なないように、結界を付けておけば大丈夫だろう。使用者が自力で防ぐことができない攻撃などを自動で緩和するようにしておこう。……訓練用と想定するならば、ゲームのように、使用者が戦闘不能になった時点で、あらかじめ指定した場所に強制的に転移すれば……これ、実戦で一番欲しい機能だな。)

死亡率が大幅に下がるはずだ。今まで思いつかなかったのが不思議なくらいだ。

(呪具の形……呪具自体は非術師には見えず、触ることもできない指輪の形で、合言葉に反応して、指輪を着けているほうの手の中に武器が出現、または、消滅するようにしたほうが、施設で生活しているサブ兄さんにとつて都合が良いだろう。問題は、肝心の武器をどのようなものにするかだが……。)

無難に、薙刀がよいだろうか。

源義経の郎党、武蔵坊弁慶は薙刀を使って平家の武士の刀を強奪している。このこと

から分かるように、基本的に、刀よりも薙刀のほうが強いのだ。

(まあ、そこは本人に決めて貰おう。)

向き不向きがあるため、あまりにも使いにくそうなら取り替えるつもりだが、やはり、使いたいものを使ったほうがよいだろう。

(そろそろ夕食の時間だな。多恵さんの手伝いに行こう。)

飛優はボールペンを鉛筆立てに戻して、椅子から立ち上がり、小さく伸びをした。

31 あおぞらこども院2 (銀桜の説明)

「おはようございます。」

施設の職員に案内されていた飛優が魚塚の後ろから声をかけた。飛優があおぞらこども院に来るのはこれで二回目である。

「おお、来たか。」

魚塚は少し驚いた様子だったが、飛優に対して小さく笑った。

「はい。先日お話しした呪霊用の武器のことなのですけれど……サブ兄さん、サブ兄さんはどのような武器を使いたいですか？」

職員が飛優を魚塚に預けた後、しばらくしてから飛優はそう言った。

「選べるのか？……というか、武器だってタダじゃねえだろうし、無理しなくてもいいぞ？」

魚塚がキョトンとした顔で飛優を見たあと、そう言った。

「作るのには私ですからね。ほとんど無料ですよ。」

「え、ひいさんが？？」

魚塚が驚いた顔をした。

「作るつつたつてどうやって……?」

魚塚が怪訝そうな表情になった。飛優は同学年の子どもと比べても小柄なほうで、とても、鍛冶仕事などの肉体労働ができるようには見えないからだ。

「んー、見せたほうが早いですから、まずは要望を教えてくださいな。」

飛優はそう言つて、悪戯好きの子どものように小さく笑つた。魚塚はごっこ遊びに付き合う大人のような表情になつたが、飛優の問いに答えた。

「……サバイバルナイフとかか?……金属バットとか……?メリケンサック?」

「サブ兄さんは不良さんですか?」

選択肢の治安が悪い。

「いや、……まあ、喧嘩はそれなりに……。」

魚塚は口籠もつた。

普通の優しいお兄さんだと思つていたというのに、まさかそんな一面があつたなんて衝撃だ。

(……まあ、たしかに喧嘩慣れしていそうな体格だが。それはそれとして、使いたい武器があるならば話が早い。……人間を攻撃した場合は、攻撃を受けた人間は無傷で三時間眠り続けるようにしておこう。どうも、殺していない場合はわりと寛容らしいからな。)

呪詛師に対して何も攻撃ができないというのも問題だから、これで良いのだ。これ以上は魚塚の良心を信じるしかない。

「そうですか。それでは、少し待っていてください。」

「お、おう。」

魚塚は狐につままれたような顔をした。飛優は魚塚に断りを入れて、魚塚から少し離れたところまで歩いた。そして、魚塚に用意する神器について考えた。

(……頼むから、呪詛師にはならないでくれよ。)

一応、後で、呪詛師になった場合、死刑になることは伝えておこう。そして、魚塚が呪詛師にならないことを祈ろう。

(……サバイバルナイフ……どうせなら、野営に最低限必要なものもつけておこう。野宿することもあるだろうしな。あ、水を出せるようにしておけば、生き残ることができ確率が上がるよな。……サバイバルナイフは、人間を切ることはできない上に切りたもののしか切れないとか、面白そうだな。よし、採用。)

たった今思いついた面白そうな能力もついでにつけておくことにした飛優は、ふと冷静に考えた。

(……強すぎるか？しかし、呪術廻戦だしなあ。)

モブもネームドも皆平等に死にやすい世界である。

(ま、いいか。攻撃力はそこまで高くないし、確実に生き残るにはこれくらい必要だ。それに、この前まで考えていた強制帰還する能力はつけないことにしたから、これくらい大丈夫だろう。)

強制帰還する場所をどこにするかという問題があったのだ。高専所属の術師であつたら、高専でよかつたのだが、生憎魚塚は高専とは無関係である。それならば、使用者の呪力を勝手に操作できるようにして、反転術式が自動的に発動するような仕組みにしたほうが生存率が高くなる。

神器

名前 銀桜(ぎんおう)

容姿 銀色の素朴な指輪。内側に小さく桜の花が彫られている。呪術師にしか見えず、呪術師以外が触れることはできない。カメラなどの機械にも映らない。

呪力量 多い。使用者の呪力と同調・同化する。

能力

・呪力操作 : 使用者の呪力操作を補助することができる。また、使用者が負傷した際に使用者の呪力を操作して反転術式による治療を行うことができる。

・結界 : 飛優の能力と同じ。ただし、使用者が使うことはできない。

・ 道具箱 : 指輪を嵌めている手の中に、特殊な空間から武器を召喚することができる。呪力を使って道具や消耗品を作成することができる。召喚した武器は使い終わると自動的に特殊な空間の中に戻るが、呪力で作成した道具と消耗品のはそのまま残る。召喚に必要な呪力は少ないが、作成に必要な呪力はやや多い。

召喚できるものと作成できるものは以下の通り。

召喚できるもの

・ サバイバルナイフ : 呪力を通しやすいサバイバルナイフ。切りたい対象のみを切ることができる。このナイフで人間を攻撃した場合、その人間は無傷の状態ですら三時間眠り続ける。なお、このナイフで指輪の使用者を攻撃することはできない。

召喚する際は指輪を嵌めている手を開いた状態で『白桜』と口に出して言いわなければならない。

作成できるもの

・ 飲料水 (1.5Lペットボトル入り)

・ ライター

・ 麻縄

・ 薬缶

・ 鍋

・防水防寒服

・寝袋

・小型テント

作成する際は指輪を嵌めている手の親指だけを曲げた状態で『白桜』と口に出して言った後、作成したい道具の名前を言わなければならぬ。

説明 使用者が自力で防ぐことができないかつ即死する威力の攻撃を、結界を使って自動で弾く。基本的に、能力を行使する際は使用者自身の呪力を使う。例外として、使用者の呪力が完全に尽きた場合のみ、神器の呪力を使用する。

(ん、こんなもので良いか。野営道具についてはいいだし、そこまで充実していなくても良からう。最低限、水と火があればしばらく生き延びられる。食料は自分で頑張ってくれ。)

頭の中で神器の能力を決めた飛優は手を胸の前に緩く広げて神器を作り始めた。

「……なっ？」

魚塚が声を上げた。

金粉が混ざっているようにキラキラした白い煙が飛優の手と手の間から溢れ出した。煙は段々と塊のようになり、最後には銀色の一つの指輪になった。

「はい、どうぞ。」

飛優が魚塚に向かって指輪を差し出した。

「……………これは？」

魚塚は身構えた。魚塚の脳裏に先程の幻想的な光景が浮かぶ。煙から出来たとは思えないほどしっかりと存在しているそれが、魚塚には恐ろしく、そしてどこか神秘的に思えた。魚塚は思わず、ゴクリと喉を鳴らした。

「武器です。着けてみてください。」

飛優がそう言った。魚塚はしばらく躊躇っていたが、諦めて指輪を左手の中指に嵌めた。

「……………これで良いか？……………この指輪が武器？メリケンサックにもなりそうにねえが……………」

魚塚が訝しがりながら恐る恐る指に嵌めた指輪を触った。

「指輪を嵌めている手を開いて、『銀桜』と口に出してください。」

「え？」

「お願いします。」

「あー、はいはい、わかったよ。やればいいんだろ！」

魚塚が投げやりに手を広げ、『銀桜』と言った。すると、魚塚の手の周りに蜃気楼のよ

うな揺らぎが現れ、そこから武骨なサバイバルナイフが出てきた。

「うお！なツ、コレ……。」

ナイフが重力に従って落ちて行くのを見て、魚塚は慌ててナイフを手を取った。

「成功ですね。」

飛優が微笑んだ。魚塚は怯えた顔をして飛優を見た。

「なんだよ、コレ……。」

「呪具です。」

間髪入れずに飛優が答えた。それから、瞬きを一つして、口を開いた。

「簡単に言うと、呪霊を倒すための道具ですよ。」

「これが……。」

魚塚はまじまじと手の中のナイフを見た。

「使い方は今から説明します。注意すべき点についてもお話ししますから、よく聞いてくださいね。」

*

(さーて、どうなるのかね?)

飛優は和田が運転する、古賀家に帰る車の中で考えた。

(一通り、使い方と注意事項は教えたし、あとは勝手にそこら辺の呪霊を倒して経験を積

むだろう。)

まだ、中学生だというのにあの体格だ。元から頻繁に喧嘩をしているようだし、三級呪霊くらいならば倒せるようになるのではないだろうか。

(呪霊を倒していけば、いずれ呪術師と接触するだろうから、問題なく高専に入れるさ。)

魚塚にも、呪術師という人間がいることは伝えてある。ちなみに、飛優の名前は極力出さないようお願いしておいた。

(何も言わなければ、銀桜は魚塚の術式だと思われるだろうし、白髪で青い目の五条悟という人間に聞かれた場合は正直に答えるように伝えてある。……五条悟がいる限り、ほかに六眼を持った術師が産まれることがないのは幸いだな。)

それに、五条悟の性格上、わざわざ魚塚に絡みに行くことはない気もする。六眼の呪術師を警戒する必要がないのは良いことだ。

魚塚には『貸す』と言ったが、飛優は銀桜を返してもらおう気がない。返してもらっても、使い所がないし、飛優としては、もう魚塚の術式という扱いでいいと思っっている。(まあ、呪具に頼り切りになられても困るしな。自転車の補助輪のようなものだから、銀桜なしでもある程度戦えるように鍛えたほうがいいとは伝えてある。それに、呪力操作の補助を日常的に受けることによって、反転術式の習得もしやすくなっているだろうか、まあ、そうそう困ることはないだろう。)

飛優はあくまで武器を与えただけだ。武器を使うのは魚塚で、成長するのも魚塚である。

(これからは、定期的にあおぞらこども院に通うことになるのだから、そのときに魚塚の様子を見るようにしよう。使いにくいようだったら、そのときにまた別のものを与えればいい。)

飛優はそつと目を閉じた。

32 ……魔王？

1999年5月

(あ、蠅頭だ。)

二年生の教室の窓の外に、醜い小鳥のようなものがふわふわと飛んでいる。

(少し視界が鬱陶しいな。)

飛優は現在、聖域を使わないように白雨に命じていた。

なぜ、そのようなことをしているのかというと、今週から、呪霊を倒す訓練が始まるからだ。ついでに、白雨に呪霊を収集させることもやめた。夏油傑の弱体化に繋がりそうだからである。……もう手遅れかもしれないが、まあ、きつと大丈夫だ。

(面倒だが、まあ仕方がない。)

祖父の命令である。祖父は白雨の能力のことを出来るだけ隠しておきたいと思っっているようで、飛優にもきつく口止めをしていた。

(五条悟が会合のときに口に出していたから、もう既に手遅れだと思うが……。)

そこまで詳細に能力の説明をしていたわけではないため、セーフということだろうか

?

(べつに、どうでもいいけれども。)

祖父がそう言うならばそれに従っておこう。

「飛優ちゃん！」

秀太が飛優に話しかけてた。二年生になった今でも、飛優は秀太と親しくしている。

「んー? どうしたの、秀太君。」

「あのね、お昼休み、みんなでサッカーしよう！」

「ん、いーよ。」

飛優は秀太の誘いに快く応じた。秀太が飛優の手を取って走り出した。

*

「いくよー！」

男の子がボールを蹴った。ゴールに向かって一直線に転がるボールを飛優が受け止める。

「秀太君！」

飛優は、足で押さえたボールを秀太にパスした。

「いっけえ！」

秀太の蹴ったボールがゴールの真ん中に入った。

「よっしやあ！」

飛優と秀太と同じチームの子たちの歓声が聞こえた。

「やっぱりズルいよ！秀太と飛優ちゃんが一緒だと勝てないもん！」

相手チームの子が不満な顔をしてそう言った。

「それでは、私は次からそちらのチームに入ろうか？」

飛優がそう言うと、秀太が叫んだ。

「えー！ヤダ！飛優ちゃんと一緒にいい！俺もそっちのチームに入る！」

「そうは言ってもね、秀太君、バランスが悪いよ。」

秀太が異議を申し立てたことで少し揉めたが、最終的に、秀太と飛優は二つのチームに、交互に参加することになった。

(結局変わらないのでは……?)

飛優はそう思ったが、子供たちがそれで納得したのならそれでいい。

*

昼休みが終わって、五時間目の授業が始まった。

(……とりあえず、しなればならないことをまとめようか。)

今日の授業の内容は長さの単位だ。当然、飛優はセンチメートルとミリメートルなどとうに理解しているし、なんなら、ナノメートルでもいいくらいだ。よって、今日の授

業は聞かないことにした飛優は、授業に真面目に取り組んでいるふりをしながら算数のノートのすみに呪術廻戦の時系列を描き始めた。

(高校一年生は……十六歳くらいかな?と、なると……。2018—16で、2002か。)

2000：加茂憲紀生誕

2001：乙骨生誕・西宮生誕・東堂生誕・与生誕・狗卷生誕・禪院真希、真衣生誕

2002：三輪生誕・釘崎生誕・伏黒生誕・虎杖生誕

(留年や早生まれがあった場合、微妙に違うかもしれないが、大体このようになってはいるはずだ。……子どもが産まれるよりも先に母親が亡くなるようなことはないだろうから、2002年までは確実に伏黒母は生きてるのか。……早めに接触しておいたほうがよさそうだな。)

飛優がそこまでノートに書き終わると、先生から指示が出た。

(えー、1メートルは100センチメートル、2.5メートルは250センチメートル……つと。)

飛優はプリントの問題を解いた。小学二年生の問題プリントの文字が大きいこともあって、一分もせずして全て解き終わった。それからしばらくすると、秀太が小声で飛優に話しかけた。

「飛優ちゃん、できた？」

「うん。できたよー。」

飛優は秀太に自分のプリントを見せた。

「わー、すごいね！」

「まーね。」

（流石に、人生三回目でこれがわからないのは大変だよ。）

飛優は小さく苦笑した。それから秀太のプリントをちらりと見た。

「あ、秀太君、そこ間違えているよ。」

「え、どこ？？」

「こここの、(3)のところだよー。」

「うへえ……。」

秀太は飛優の言葉に顔を顰めた。

「大丈夫、小数点の場所を間違えただけでしょう？すぐに出来るようになるよ。頑張つて。」

「はあい。」

秀太が眉間に皺を寄せながらプリントの文字を消し始めたのを見て少し笑ったあと、飛優はノートの隅の年表の下に原作が開始する前にしたほうが良いことを書き込んだ。

(まあ、まずは、伏黒母の死亡の阻止だな。)

亡霊の酒場の情報で、伏黒夫妻の現在の住所はわかっている。

(問題は、遠すぎることだ。)

福岡から離れすぎている。なんせ埼玉だ。明らかに小学二年生の行動範囲外である。

(『古賀飛優』が頻繁にそこに訪れるのは不自然だろう。)

ならば、どうしようか。飛優は少し考えてから鉛筆を握った。

(あ、時子の肉体を使えば良いのか。)

野上時子の肉体で活動すれば足はつかない。飛優は小さく頷いた。

(伏黒夫妻の周辺だけに出没して、勘繰られては困る。……ちようどいい機会だ。この

世界の裏社会の伝手を作ろう。)

*

授業が終わったあと、飛優は秀太の誘いを断った。それから飛優は家に帰るために人気がない場所まで歩いた。帰り道にも蠅頭は飛んでいたが、慣れればそこまで騒ぐほどのことではない。

(しかし、気持ちが悪い。魔王の配下の下級水魔だつてもう少しまともな顔をしていたぞ。)

何故あのような醜悪な風体をしているのだろうか。飛優は思わず眉を顰めた。

(まあ、いわば、人間の負の感情の集合体なのだから、妥当なところか。)

飛優は溜息を吐いてから、誰にも見られていないことを確認したあと、界渡りで家の門の前に転移した。

「ただいま帰りました。」

玄関の扉をガラリと開けてから、飛優はそう言った。

「おかえりなさいませ、飛優様。」

多恵さんが洗濯物を抱えたまま飛優を見た。

「手伝いますよ、多恵さん。」

「あら、ありがとうございます、飛優様。」

多恵さんから受け取った洗濯物を畳みながら、飛優は心の中で呟いた。

(……んー、昔のように便利屋を営むのも良いが、便利屋業は拘束時間が長いことが多いからな。)

便利屋とは現在で言うところの探偵のようなものだ。仕事は、息子の恋人の素行調査や迷い猫の捜索のようなものが多い。より詳しく説明すると、探偵とフリーターが合体したような職業である。

(これで生計を立てるわけではないしな。……まあ、ほとんど趣味のようなものだから、基本的な立場は『気まぐれに情報売る情報屋』くらいで良いか。それか、『道端の占い

師』でも良いな。)

ミステリアスで、何を考えているのか分からない奴を目指すのだ。気まぐれという設定にしておけば、どこにいてもそれなりに言い訳ができる。

(そうと決まれば早速今夜から活動を始めよう。)

飛優は多恵さんに、畳み終えた洗濯物を手渡すと、自分の部屋に戻って課題を始めた。

*

夜になった。

(さて、飛優^本の肉体^体は部屋で眠っているから睡眠時間は気にしなくても良いのだが……。)

すつきりと短く切られた茶髪が風に靡いた。

(これからどうしようかね?)

無計画である。

鏡に映る中性的な時子の顔を軽く眺めてから、飛優は大きく伸びをした。

(つとと、危ない。)

時子の肉体はかなり長身で、小柄な飛優にとっては少し動かしづらかった。

(時子の肉体を動かすのにも慣れておかなければな。)

両手を軽く閉じたり広げたりしながら飛優^{時子}は歩き出した。

(あ、呪詛師認定されると困るから、他の呪術師からは非術師だと認識されるようにしておこう。それに、隠密を使っていない状態でも残穢などの呪力の痕跡が全く残らないようにしたほうがいいな。)

幸い、時子の能力は目の錯覚や手品で誤魔化せるような類いのものだ。飛優は時子の体を作り替えた。

(とりあえず、治安が悪そうなどころに行ってみようかな。)

飛優^{時子}は亡霊の酒場を使って適当な場所を見繕った。

(お、近いな。ここにしよう。)

飛優^{時子}は鴉に姿を変えて飛び立った。

*

目的地に着いた。どことなく澱んだ雰囲気の港だ。下の様子を見ながら飛優^{時子}は翼を動かした。

(ま、生憎と暗くてほとんど何も見えないがな。)

それでも、空を飛ぶというのは自由を体現しているような気がして好きだと飛優は思う。

ゆつくりと飛優^{時子}が空を飛んでいると、発砲音が聞こえた。

(……近いな。)

音のした方向に向かって飛優は飛んだ。

(どこかの暴力団の勢力争いだろうか?)

絶えず銃声が響く様子を電柱の上から眺めながら飛優はそう思った。もし、そうならば、男たちのほとんどは地面に倒れているため、じきに決着はつくだろう。

(劣勢な方に手を貸して恩を売りつけようか?)

そんなことを飛優が思ったとき、一人の男が飛優の目に留まった。

(……銀色の、髪。)

飛優の脳裏に銀色の長髪に紺色の瞳の彼の横顔が浮かんだ。

(魔王……。)

飛優が呆然としている間に飛優が注目していた男が撃たれた。

飛優は思わず男のそばに飛び降りた。そして、男にさらに攻撃を加えようとする者たちの意識を稲葉に命じて一瞬で奪ったあと、男のほうに顔を向けた。

「……魔王さん?」

鴉から人間の姿に戻った飛優は、血濡れた男にそう言った。
緑色の鋭い瞳が飛優を睨んだ。

33 ジン視点 悪魔

銃口が目の前に突き出された。

(クソツ……！)

額の傷口から流れた血が目の中に入って視界が明瞭度になった。満足に動かすことができない体に反比例するように脳みそが凄まじい速さで働いているのがわかる。

——親に捨てられたスラム街。初めて人を殺した日。手を差し伸べて救い出してくださったあのお方の顔。拳銃を握った感覚。血。苦悶に叫ぶ人の顔と声、声……。(走馬灯つてやつか？笑えねえ。)

口角が自然と上がった。ここで死ぬのだとしても、少しでもあのお方の役に立てたのなら本望だ。

ジンは薄く目を開けた。目の前の男が引き金に力を込めたのが見えた。

(——ツ!!?)

その瞬間、鴉が羽ばたく音と一緒に、ジンの周囲の人間が一斉に倒れた。

(毒ガスか？……いや、それなら倒れた奴よりも先に、蹲っていた俺が死んでねえのが不

自然だ。」

ジンは思考を巡らした。生きて、生きて帰って、あのお方の役に立つために。

「……魔王さん？」

低い女の声にも、高い少年の声にも聞こえる中性的な声が聞こえた。ジンは声の主であるソイツを見た。暗い色の短髪と象牙色の肌が月の光に照らされてよく見えた。

(鴉が、人間に……？見間違いか？)

ジンは精一杯ソイツを睨んだ。

「あれ、違った。残念。」

あつけらかんとそう言ったソイツは興味を失ったようにジンから目を外した。

「オイ、これはテメエの仕業か？」

ジンの言葉に反応してソイツが答えた。

「うん、そうだよ。邪魔したね。」

ソイツはあっさりそう言うと、静かにその場から立ち去った。無関心なソイツの態度が、ジンなど警戒するに値しない存在だと言外に述べている。

「……クソツ。」

ソイツの足音が聞こえなくなつてから、ジンは立ち上がった。満身創痍で、指一本動かすのも辛い体を無理矢理動かして、意識を失った奴らに引き金を引いた。

「……これで、全部か。」

味方は既に全員死んでいた。

報告は明日でいいだろう。

死体の処理をして、自分の傷の応急処置をしたあと、ジンは歩き慣れた道をゆつくりと歩き始めた。それから、数ヶ月前に大人の真似をして吸い始めた煙草が胸ポケットの中で潰れているのをみつけて、ジンは小さく舌打ちをした。

「酒でも飲むか……。」

行きつけの店はまだ開いているはずだ。

*

「……何故ここにいる?」

「あ、さっきの銀髪君。……いや、何故と言われても困るのだけけどね?」

組織御用達のBARで、ソイツは優雅に酒を嗜んでいた。複雑な模様が描かれたカードを手で弄びながら、ソイツがジンの目を見た。

ジンは無言でソイツの隣に座った。

「なんだ、それは?」

「んー?」

「そのカードだ。タロットじゃなさそうだが。」

「ま、そうだね。一応、占いに使う物ではあるのだけれど。」

あまりにも穏やかなソイツの様子に、ジンは毒気を抜かれた気分になった。

「せっかくだから、占ってみせようか？」

「……好きにしろ。」

ジンがそう言うと、ソイツはカードを机の上に並べた。何度かカードを移動させると、ソイツはジンに声をかけた。

「……よし。さ、この中から一枚好きなカードを選んでみてよ。」

ジンは無言でカードを一枚手に取った。手に取ってみて初めて分かったが、カードの裏面の色と模様は見る角度によつて変化するようだった。何か複雑な細工がしてあるのかもしれないが、生憎とジンにはわからない。ただ、ピロードのように深みのある濃紫の中に散りばめられた金色が、星のようで美しいとジンは思った。

「ふふ、『忠誠』か。」

ソイツが妙な言葉を口にした。聞き取りにくい不思議な発音で、ジンが今まで聞いたどの言語とも違うように感じた。

「何だ？」

「ああ、そのカードの名前だよ。……とある地域の言葉で、忠義、誠実、誓い、忠誠といった意味がある。……このカードに選ばれた君は、とても強い忠誠心を持っているのだ

ね。」

ジンは胡散臭そうにソイツをみた。ジンの表情を見てソイツが軽く笑った。

「はは、まあ、占いなんて誰にでも当てはまるようなことをそれらしく言っているだけさ。君が信じたいように信じれば良い。」

ジンはカードをじっと見つめた。

目を瞑った灰色の騎士が片手で細身の剣を握っている。騎士のもう片方の手は胸元に当てられている。胸には太陽の絵が描かれており、どうもそれが主に対する忠誠心を示しているようだ。

「……コイツの目の色は何色だ？」

ジンはソイツに尋ねた。

「たしか、紫色だったと思うよ。そのカードの裏面と同じ色だ。忠誠心を象徴する色でもあるね。」

「そうか。」

「気に入ったのならあげるよ。それ、私が作った模造品なの。本物は私の家にある。」

「へえ、何故本物を使わねえんだ？」

ジンが不思議そうにそう言うと、ソイツは目を伏せた。

「んー、私、大切な物は誰にも見えないところに置きたいのだよね。汚れたり、盗まれた

りしたら困るだろう?」

そう言って、ソイツはゆっくりと自分の胸に手を当てた。ジンは黙ってソイツを見た。

「昔、友人に貰った物だからね。」

ソイツはそう言って、グラスの中の酒を見た。金色の酒を揺らしながら、ソイツは懐かしそうに口元を緩めた。

「明るい子でね、占いも、その子に習ったの。」

ジンは何も言わなかった。ソイツは話を続けた。

「……優しい、良い子だった。最後は、子どもと孫たちに看取られて穏やかに亡くなったよ。」

ジンは眉をひそ顰めた。

「……友人つてのは、お前よりも歳下じゃねえのか?」

ソイツは、まるで小さい子のことを話しているような口ぶりだったのだ。

「うん、歳下だよ。その子のお母さんのお腹が大きかった頃も見だし、その子のおしめを替えたこともある。その子のお父さんとも友人でね、共に旅をしたこともあるよ。」

ジンは、ソイツの言葉を嘘とは思えなかった。ソイツは、本当に自分の経験をそのまま話しているという雰囲気だった。ジンとそう大して変わらない年頃に見えるソイツ

が、まるで年老いた老女のような目をしていることに、ジンは気づいた。

(……心の病気か、本物か……普通に考えりや、前者だがな。)

ソイツが、鴉から人間になった瞬間がジンの脳裏に浮かんだ。

(化け物……悪魔か?)

ジンは自分の背中にじつとりと嫌な汗が浮かんだのがわかった。

もし、悪魔であるならば、友好的なうちに離れたほうが懸命だろう。

「そうか。」

ジンはそう言って、胸ポケットの中の煙草とライターを取り出そうとした。そして、煙草の箱が無残に潰れているのを見て、ジンは舌打ちをした。

(そーいや、潰れてたな。)

気分を落ち着かせるために吸おうとした煙草のせいで、余計に焦る気持ちが強くなつた気がした。

「へえ、いいね、ジツポライター。格好良い。」

ソイツが興味深そうにジンの手元を見た。

「要るか? カードの代わりにやるよ。」

悪魔から対価もなしに物を貰うなどという恐ろしい真似をしたくなかったジンは、ソイツにライターを手渡した。

「え、べつに気にしなくても良いのに。……ま、ありがたく貰うよ。」

ソイツはジンから受け取ったライターをキラキラとした目で見つめた。

「……そんなにいいモンか？」

「え、ジツポライターは格好良いだろう？ 私はライターを使う機会がないから持っていないけれど、金属でできていて、火が出て、彫刻がしてあるのはすごく格好良いと思う。」
そうジンに答えてからソイツは狼と月が彫られているライターをもう一度見つめた。
ジンはソイツの様子を見て、喉の奥で笑った。

「もう、何で笑うのさ？」

ソイツが不満そうな顔をした。ジンは思い切ってソイツに尋ねた。

「テメエ、名前は何だ？」

ソイツは不思議そうに目を丸くしたあと、微笑みながらジンに言った。

「時子だよー。占い師兼情報屋をしているから、必要なときに声をかけてね。……そうだね、今日からこのBARの付近で活動することにしたの。よろしくねー？」

*

時子が帰ったあと、ジンは店を出た。

(……警戒する必要はねえのかもな。)

ジンから貰ったライターを嬉しそうに眺める時子の顔が目に見えかけた。

(……煙草買おう。それと、ライター。)

ジンは、溜息を吐いてから煙草を売っている店に向かって歩き出した。

この小説を新しく書き直すことにしました。

書き直した小説の一話のコピペです。←

1 橘起小夜とミヤ悪・クロム夢の記憶

勇者が死んだ。王国の命令で魔王を討伐したあと、魔族と呼ばれていた原住民族に殺された。

もう千年も前の話だ。共に魔王を討伐した勇者の仲間たちは皆死んだ。ただ一人、ミヤ・クロムを除いて全て魔族に殺された。

おそらく、魔王と王国の戦いは宗教戦争のようなものだったのだろう。王国の国家宗教であった聖域教が、原住民族の精霊信仰を淘汰しようとして起こった戦争。ミヤ以外の勇者一行は、王国と聖域教に利用されたあと、魔族の手により無残に殺された。

ほとぼりが冷めた頃に、ミヤが調べたところ、王国と聖域教は始めから勇者一行を犠牲にするつもりであったようだ。最初から、わかりやすい加害者として勇者一行を目立たせておくことで、魔族の意識から王国と聖域教を逸らしていたらしい。

今思えば、勇者も勇者一行も聖域教が運営する孤児院で育てられた、簡単に切り捨てられる身分の者ばかりである。ミヤも、魔族の母親から生まれ、とある貴族の落胤として孤児院に預けられていた、死んでも構わない（むしろ死んで欲しい）と周囲から思われている子どもだった。

ミヤはそう言う事情があつたため、王国に助けを求めず一人で魔族から逃げたが、他の仲間たちは王国と聖域教に助けを求めた。そして、王国は彼らを裏切り、彼らを魔族に差し出したらしい。

ミヤがそれを知つた頃には勇者が死んでから五百年ほどの月日が流れていた。当然、仇敵は全員既に故人であるし、ついでに言うと、元々少数民族であつた魔族は絶滅していた。

仇敵の子孫に対して何かをする気にもなれなかつたミヤは、ただ呆然とした。そのとき、自分が泣いたのかすらミヤはもう覚えていないが、現存する仲間たちの遺骨を全て集めて懇ろに弔い終わつた頃には八百年が過ぎていたと思う。

「ケホツ」

ベット以外はほとんど何も無い白い壁の小さな部屋に、乾いた咳の音が響いた。人目を避けるために人里離れた山奥に建てられた家はしんと静まり返っている。

魔王と呼ばれていたとはいえ、原住民族が祀る神としての面もあつた精霊を殺すこと

に加担したためか、ミヤは自害ができない肉体になっていた。

手首を切つてもすぐに傷が塞がり、毒をのんでも苦いばかりで苦しむことも死ぬこともない。入水しても、なぜか水中で呼吸ができたため、死ぬことができなかった。他にもさまざまな方法を試してみたが、どれも失敗に終わった。そういうわけで、ミヤは人間不信を拗らせながら無為徒食におよそ千年も生きていた。

(老いたな……。)

外見は、若い頃と何も変わらない。鏡の中には、若い——幼いといつてもいいくらいの童顔が映っている。しかし、自分の体の中がここ最近すっかり弱っているのがミヤにはよくわかった。

「死ぬのか。」

ようやく、死ぬるのか。

「ゲホ、コホ、コフツ」

口元を押さえたミヤの手の平に血が付いていた。

(これで、終わりか。)

ミヤは溜息を吐いた。

(疲れたな。)

ミヤはベットに体を横たえて、ゆっくりと静かに目を閉じた。緩やかに体から力が抜

けていくのを感じながら、ミヤは安らかに二度目の死を受け入れた。

*

ミヤ・クロムはかつて便利屋として勇者一行の雑務全般をこなしていた女だ。

自分の事を説明しろと言われて最も先に出てくる言葉はやはり「便利屋」だろうとミヤ——小夜は思う。

橘小夜という平凡な日本人女性がミヤ・クロムに転生した原因はいわゆるトラ転と呼ばれるものだった。目の前で子供がひかれそうになっていたから咄嗟に庇い、橘小夜として死んだ。

普通ならば、そのまま小夜の魂は死後に浄化されて記憶をなくした状態で転生するはずだった。しかし、とある神の気まぐれにより、小夜は記憶を持ったまま魂死にくにく直接異能力ようを付与加工された状態で二度目の人生を与えられることになったのである。チープなネット小説ではよくある展開だと当時の小夜は遠い目をしながらそれを受け入れた。

(さて、長かった二度目ミヤ・クロムの人生もこれでようやく終わったわけだが……。これは一体どういうことだろうか。)

小夜は困惑していた。早く魂全を浄化てされ忘れたいたと思っていたのに、自分が今いるのは水の中だ。

(……はどことだ?)

気づいたら、小夜は深く薄暗い水の底にいた。自分の体温とほとんど同じ温度の水の中は、まるで羊水の中にいるような安心感があり、小夜は強い眠気を感じた。頭の中がぼんやりとして思考がまとまらないのがもどかしいと小夜は思った。

銀色の気泡が小夜の口から溢れた。そのまま、小夜は水中で大きく息を吸ったが、やはり苦しくはない。小夜が辺りを見回すと、視界の端に美しい銀髪が見えた。

(魔王……。)

小夜が振り向くと、月の光を集めたような色をした魔王の髪が水中にふわりと広がっているのが見えた。長い髪が浮いてることで、女と言われても納得してしまいそうなほど美しい魔王の顔が露わになっている。魔王の瞼は軽く閉じられており、髪と同じ色をした長い睫毛が目元に微かな影を落としていた。

(……ああ、そういえば、精霊だから無性なのだったか。)

そんなことをぼんやりと考えながら、小夜は魔王に手を伸ばした。

小夜の手が魔王の頬に触れる直前に、魔王の目が開いた。深い水の底のような紺色の瞳が小夜を真っ直ぐ見た。

『ああ、ようやく堕ちてきた。』

魔王がそう言った。——正確には、喉を震わせたと言うのが正しいのかもしれない。

人間の言葉とは異なる、『精霊語』でも称するべき言語を使って魔王が小夜に話しかけた。

小夜は何も言わずに魔王を見つめた。

魔王は小夜の腕を掴んで自分の方に引き寄せた。硬い鱗に覆われ、大きく鋭い爪が生えている魔王の腕を見て、小夜は身を固くした。

(……切り裂かれるのか、それとも食い千切られるのか。……当然だ。魔王は私たちを憎んでいるはずだから。)

小夜はきつく目を瞑ったが、予想していた痛みはなかった。恐る恐る小夜が目を開けると、魔王は片方の腕で小夜の腰を緩く掴んでいた。そして、もう片方の腕で小夜の体を確かめるようにゆっくりと優しく撫で、それから小夜の首筋に自分の顔を埋めて深く息を吸った。

『……魔王？』

ミヤが幼少期に魔族の母に少しだけ習った精霊語を使って、小夜は魔王に話しかけた。魔王は何かに酔っているように、とろりと目を潤ませ頬を上気させて小夜を見た。

『ついに、手に入れた。私の吾子。』

小夜の言葉を無視して魔王がそう言った。

『忌々しい聖域教のせいだ、随分と探すのに時間がかかったが、わざわざ聖域教あちらのほうか

らお前を差し出してくるとは……。』

愉快そうにそう言うのと、魔王はもう一度深く息を吸った。そして、満足そうに息を吐き出すと、小夜の胸の中央に手を当てた。

『おかげで、殺された振りをしてお前の中に入り、お前の魂と私を完全に同化させることができた。……これで、永遠に一緒だ。お前が何度、人として生まれ人として死のうとも、私も共に生まれ共に輪廻の輪を巡ることになる。……ああ、なんと幸せなことか。』
悪寒がして、小夜は魔王の腕から逃れようと藻掻いた。魔王は小夜が逃げようとしているのに気づくと、腰を掴んでいた腕に力を込めた。そして、もう片方の腕で小夜の肩を掴み、小夜の耳に口を寄せた。

『吾子や、無駄なことはするな。お前は私で、私はお前になった。もう離れることはできぬ。』

小夜は恐怖で固まった。魔王は小夜の耳から口を離すと、小夜の目を見た。

『お前の魂は私と同化したことで、固定された。お前の魂はこれから成長も退行もしない。お前は今のお前としての記憶を持ったまま私と共に転生するのだ。』

『……忘れることができないということですか？』

『ああ、そうだ。』

魔王はそう答えた。小夜は呆然として、魔王を見つめた。

『……なぜ、私なのでしょいか。』

小夜は、特別美しくも醜くもない平凡な容姿の人間だ。魔王がなぜ、地味な自分に執着しているのか分からず、小夜は魔王にそう尋ねた。

『……言っただろう？ 私の吾子。遠い昔に失くしてしまった私の娘。』

『……娘？』

『お前が覚えていなくても構わない。……千年前、お前をこの世界に戻してくれた友に感謝しなければな。』

『私をこの世界に戻した……？』

『ああ。……お前に異能力を与えた神だ。』

小夜の脳裏に、自分をこの世界に転生させた神が浮かんだ。

『……ただの気まぐれではなかったのですね。』

『そうだ。……偶然見つけたため、そちらに送る』と言われたときは、一体なんの冗談かと思っただが、お前がこの世界に産まれたのを感じたときは本当に嬉しかった。……それから、すぐにお前が聖域教の施設に移されたせいで、どこにいるのか分からなくなつたときには気が狂うかと思っただ。』

小夜は、魔王が何の話をしているのか分からなかった。しかし、魔王に対して、自分が酷いことをしたような気がして、とても申し訳ない気持ちになった。

『……………ごめんなさい。』

小夜がそう言ったのを聞いて、魔王は優しく微笑んで小夜の頭を撫でた。

『構わない。これから、永久にお前が私と共にいるならば。』

魔王は小夜を抱きしめた。小夜は魔王に身を任せてゆつくりと体から力を抜いた。そうしているうちに、段々と自分の意識が消えていくのが小夜には分かった。

(……………ああ、これから転生するのか。)

小夜は心細い気持ちになって、魔王の胸にしがみついた。魔王は嬉しそうに小夜の頭を撫でると小夜の額に優しく口付けをした。

『もうお眠り、吾子や。次はお前が産まれるときだ。』

魔王の優しい声を最後に、小夜の意識は完全に途絶えた。

*設定

(ここから先は見なくても多分大丈夫です。とりあえず、主人公は無駄に多彩な能力を持つているということだけ覚えていてください。魔王に関しては、主人公のモンペという認識です。ヤンデレですが、あくまでも家族愛の範疇です。)

*主人公

種族 人間？

真名 不明

名前 〈便利屋〉 橘 小夜（たちばな さよ）

ミヤ・クロム

容姿 小夜 : 黒髪 黒色の瞳の垂れ目 白い肌

ミヤ : 黒髪 金色の瞳の垂れ目 白い肌

霊力量 : ほぼ無限

異能力

・界渡りかいわたリ : 異世界間を自由に行き来することが出来る。同じ世界内を移動すること

も可能。（移動するときは黒い穴を空間に開く。穴を潜ると移動することが出来るが、穴を跨いだ状態で穴を閉じるとその部分は綺麗に切断されてしまうので注意が必要。穴を開けるときに行き先を意識するとそこに繋がる。）

・式神生成しきがみせいせい・しえき・使役 : 式神を作りその式神を使役することが出来る。式神自体に自由意志は無い。一般人は基本的に式神を見ることはできず、写真や映像に写ることもないが、式神が意識して姿を見せることは可能。写真や映像に写ることも可能。

・神器生成じんぎせいせい : 神器を作ることが出来る。神器の材料などを生成することもできる。

また、生成した神器の作り方などがある程度理解することができる。神器は基本的に壊

れることはないが、神器の性質として壊れるようにしておけば壊れる。

・翼・浮遊つばさ・ふゆう : 天使の翼のような白い翼を生やすことが出来る。それを使って自由に飛行することが可能。翼を出していなくても空中に浮遊する程度は可能。翼は基本的に肩甲骨の辺りの皮膚から生える。服だけを通り抜けるなど、特定の対象のみを通すことが可能。逆に、特定の対象を弾くようにすることで盾として使用することもできる。痛覚はない。霊力で構成されているため、実体は無いように思われるが、抜けた羽根はその場に残る。羽根からは鱗粉のような金色の粉が出ているようにみえる。この翼は一般人にも見え、写真などにも写る。

・治療ちゆちゆ : 自分を含む生物の治療が出来る。

・聖薬せいやく : 様々な効果のある薬を作ることが出来る。

・聖歌せいか : 歌を歌うことや、奏でることで様々な効果を及ぼすことが出来る。自由に

声を変えることが出来る。楽器の使い方が分かる。

・結界けっかい : 基本、盾として使用。様々な効果を付与することも可能。

・収納しゆうのう : 異空間に収納することが出来る。

・過去視かこし : 直接目で見ることで物・生物の過去に関する情報を見ることが出来る。

(任意で発動する。) 発動時から1時間瞳が緑色に変色する。その間は幽霊などが見えるようになり、瞼を閉じた状態でも普通に見えるようになる。(幽霊などは過去の人物の

情報や思想が何かに焼き付いた残留思念と言う認識のため、見ることはできるが、一方的に話を聞くことしか出来ない。(瞳の色が変色する理由は小夜の魂の色のようなもの
が表面に出るから。小夜の魂の色は外側が金色で内側は深緑色のため、変色する場合は
一瞬金色になってから緑色になる。色が元に戻るときは、アースアイのような模様にな
りながら徐々に金色になり、完全に金色になってから元の色になる。)

・げんごのうりよくほじよ言語能力補助 : 全ての生物の言語を理解出来るように補助する。

備考 : 大昔に死んだ魔王の娘が転生した姿。(人間との間にできた混血児であった
ため、人間としての寿命を全うして死んだ。)魔王の娘としての記憶はない。千年一人で
過ごしても発狂はしないくらい丈夫な精神を持っている。

元々人間嫌い気味だったが、今回魔王と同化したことにより、倫理観が人外寄りに
なった。一応、人間としての意識のほうが強いため、人間としての決まり法律は守るが、道徳心に欠け
ているところがある。

*魔王

種族 精霊

真名 真湖

容姿 銀髪 紺色の瞳 白い肌 鱗に覆われた両手と人魚のような足

霊力量 : 無限

属性 : 水 植物 大地 光 闇 空間

備考 : 長年探していた娘が見つかったため嬉しい。基本的に娘以外はもうでも良いと思っっているため、勇者一行に対しても何も思っていない。魔族に対しても同様。小夜の魂と完全に同化するのに千年もかかった。自然の化身である精霊の多い土地は豊かになり自然災害が減る。そのため、魔王のような強力な精霊が離れた土地は荒廃することが多い。

補足すると、小夜と同化した魔王は『二重人格＋イマジナリーフレンド状態』になっている。魔王は、小夜の体を使うこともできるが、小夜の体の外に出て活動することもできる。基本的に、小夜の体の外に出ている状態の魔王を小夜以外の人間が見ることはできないが、勘の良い人間や動物は気づくことがある。小夜の体（魂の中）に入ります瞬間、魔王の体は銀色の粒子のような状態になる。

←魔王のイメージ

*王国・聖域教 : 近い未来、滅びる運命にある。